

大阪市平野区

長原・瓜破遺跡発掘調査報告 XX

2000年度大阪市長吉瓜破地区

土地地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書

2003.3

財団法人 大阪市文化財協会

長原・瓜破遺跡発掘調査報告 XX

2003. 3

本書には長原遺跡西南地区の発掘成果を収録する。

飛鳥時代の柱穴を検出したことで、同時代の集落の南端を確認できた。

中世の灌漑用水路と中世馬池の樋口を検出し、瓜破台地と馬池の歴史を考える上で、貴重な資料が得られた。

この地域の灌漑体系の一大変革であった新大和川の開鑿事業前後の景観変遷をうかがうために、発掘成果と古絵図・古文書などの付合せを行ってみた。

大阪市平野区

長原・瓜破遺跡発掘調査報告

XX

2000年度大阪市長吉瓜破地区

土地地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書

2003.3

財団法人 大阪市文化財協会



長原遺跡西南地区 中世灌漑用水路(東から)

『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』XX 正誤表

頁	行など	誤	正
iv	右16行	図41 溝出土土管	図41 溝出土土管・ <u>陶管</u>
3	図2 左端	<u>95</u> -44	<u>83</u> -44
20	9行	木靴	木沓
50	13行	土師質蓋	土師質 <u>土</u> 器
51	図41	溝出土土管	溝出土土管・ <u>陶管</u>

大阪市平野区

長原・瓜破遺跡発掘調査報告

XX

2000年度大阪市長吉瓜破地区

土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書

2003.3

財団法人 大阪市文化財協会

序 文

本書は、大阪市 長吉瓜破地区 土地区画整理事業に伴う発掘調査成果を収めた『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』シリーズの第20冊目に当たるとともに、最終冊である。

本書では2000年度に行った調査成果を収録している。同地区の区画整理事業に伴う調査も、本書刊行とともに終了する。

同年度の調査地は長原遺跡西南地区の2箇所にとどまったが、瓜破台地と馬池の中世の姿を復元できる成果が得られた。

ひとくちに20年といっても、長原遺跡は30年前には知る人ぞなかった遺跡であるから、この間、新発見の連続であった。調査成果を前にすると、新知見の多さに感慨ひとしおである。

今後は、調査の成果を多くの市民に還元すべく、普及・啓発活動に努めたい。

最後に、発掘調査および報告書作成にあたって、ご理解、ご協力を賜った関係機関各位と、玉稿をお寄せいただいた先生に心よりのお礼を申し上げる。

2003年3月

財団法人 大阪市文化財協会

理事長 脇 田 修

例 言

- 一、本書は大阪市建設局長吉瓜破区画整理事務所が施行した、大阪市平野区内における2000年度土地区画整理事業施行に伴う発掘調査の報告書である。
- 一、発掘調査は、財団法人大阪市文化財協会調査課長京嶋覚の指揮のもとで、調査主任(現、主任学芸員)黒田慶一と調査員(現、学芸員)李陽浩が行った。各調査の地番・面積・期間・担当者は表1に記した。
- 一、本書の編集および執筆は京嶋の指揮のもと、李との検討や調査記録をもとに、黒田が行った。石器遺物の記述については学芸員絹川一徳の教示を得た。英文要旨の作成は黒田が行い、ロンドン大学大学院生の幕内博子氏の御教示を得た。
- 一、遺構写真は主として担当した黒田・李が撮影したが、一部は徳永罔治氏に委託した。遺物写真の撮影は西大寺フォト杉本和樹氏に委託した。
- 一、樹種同定と年輪年代測定については、独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所の光谷拓実氏の御教示を得た。
- 一、発掘調査と報告書作成の費用は、大阪市建設局および同市水道局・同市下水道局・日本電信電話株式会社・関西電力株式会社・大阪ガス株式会社が負担した。
- 一、本書に掲載した石器遺物は、大阪市文化財協会での石器整理番号である登録番号で管理されている。各石器遺物の登録番号は、本文で使用した報告番号の前に、00-12次調査は00AC、00-29次調査は00ADを付加したものとする。例：報告番号139の場合は00AD139。
- 一、発掘調査で得られた出土遺物、図面・写真などの資料は当協会が保管している。

凡 例

- 一、本書において用いる地層名は、原則的に各調査ごとに個別に記載する。長原遺跡の標準層序との対比は[趙哲済2001]に基づいて行い、標準層序の表記は、文中では長原〇層とし、図表等ではNG〇層とした。
 - 一、遺構検出面の層序関係に基づく呼称および形成過程に基づく呼称は、[趙1995]に従って行った。
 - 一、遺構名の表記には、掘立柱建物・竪穴住居(SB)、溝(SD)、井戸(SE)、堤(SF)、土壙(SK)、ピット(SP)、その他の遺構(SX)、自然流路(NR)の略号を用いた。略号の後ろには各調査次数ごとの通し番号を付した。
 - 一、水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文・挿図中ではTP±〇mと表記する。また、挿図中の方位は座標北を示し、座標値は旧来の国土平面直角座標(第Ⅵ系)の値である。
 - 一、本書で頻繁に用いた土器編年と用語は下記の文献に拠っている。本文中では煩雑さを避けるため、これら引用・参考文献をその都度提示することを行わない。円筒埴輪：[川西宏幸1978]、古墳・飛鳥時代の須恵器：[田辺昭三1981]、飛鳥・奈良時代の土器：[古代の土器研究会1992]、中世の土器：[中世土器研究会1995]、近世の陶磁器：[九州近世陶磁学会2000]・[大橋康二1994]
- 肥前陶磁器の時期区分は以下のとおりである。

I 期：1580～1610年代、II 期：1610～1650年代、III 期：1650～1690年代、

IV 期：1690～1780年代、V 期：1780～1860年代

本文目次

序文

例言

第Ⅰ章 調査の経過と概要	1
第1節 2000年度の発掘調査と報告書の作成	1
1) 発掘調査	1
2) 報告書の作成	1
第2節 発掘調査の経過と概要	3
1) 00-12次調査	3
2) 00-29次調査	4
第Ⅱ章 長原遺跡西南地区の調査結果	7
第1節 00-12次調査	7
1) 層序とその遺物	7
i) 層序	
ii) 各層出土の遺物	
2) 遺構とその遺物	11
i) 飛鳥時代	
ii) 近世～近代	
3) 小結	12
第2節 00-29次調査	14
1) 層序とその遺物	14
i) 層序	
ii) 各層出土の遺物	
2) 遺構とその遺物	35
i) 鎌倉時代	
ii) 室町時代	
iii) 近世～近代	
iv) 更新世	
3) 小結	55
第Ⅲ章 遺構の検討	57
第1節 馬池と中世の灌漑用水路	57
1) 中世の灌漑用水路の復元	57
2) 中世の灌漑用水路の廃止	59
第2節 馬池と八箇用水-近世大和川北岸地域の水利事情-	61
1) はじめに	61

2)大和川付替え前	64
i)狭山池懸り	ii)東瓜破村と狭山池用水
iii)馬池の利用	iv)東除川と村々溜池
v)川辺村と王水	
3)大和川付替え後の変化	70
i)瓜破台地と新大和川	ii)落堀川開鑿
iii)笥組と八箇用水	iv)大和川北岸諸樋
v)犬走り井路から八箇用水へ	vi)喜連3ヶ村の取水
vii)長原村馬池から瓜破村下ノ池へ	
4)おわりに	77
引用・参考文献	81
あとがき・索引	
英文要旨	
報告書抄録	

原 色 図 版

- 1 長原村絵図[享保8年]

図 版 目 次

- | | |
|----------------------|--------------------------|
| 1 00-12次調査 | 9 00-29次調査 北区 中世の遺構 |
| 上：調査区全景(南から) | 上：第4d層上面(北から) |
| 下：SP501検出状況(南から) | 下：第4d層上面(東から) |
| 2 00-29次調査 北半 | 10 00-29次調査 北区 中位段丘構成層上面 |
| 3 00-29次調査 南半 | 上：自然流路と足跡化石(西から) |
| 4 00-29次調査 南区 近世の遺構 | 下：ナウマンゾウの足跡化石(東から) |
| 上：南端(南東から) | 11 00-12次調査 出土遺物 |
| 下：SD201(西から) | 12 00-12次調査 出土遺物 |
| 5 00-29次調査 近世の遺構 | 13 00-12次調査 出土遺物 |
| 上：南区第2c層上面(南東から) | 14 00-29次調査 出土遺物 |
| 下：北区第2a層下面(北から) | 15 00-29次調査 出土遺物 |
| 6 00-29次調査 南区 中世の遺構 | 16 00-29次調査 出土遺物 |
| 上：SD301(南から) | 17 00-29次調査 出土遺物 |
| 下：SD301(北から) | 18 00-29次調査 出土遺物 |
| 7 00-29次調査地中央部 中世の遺構 | 19 00-29次調査 出土遺物 |
| 上：SD301堆積状況(南から) | 20 00-29次調査 出土遺物 |
| 下：SD301アゼ撤去後(南から) | 21 00-29次調査 出土遺物 |
| 8 00-29次調査 北区 中世の遺構 | 22 00-29次調査 出土遺物 |
| 上：第3a層下面(東から) | |
| 下：第3a層下面(北から) | |

挿 図 目 次

図1	土地区画整理事業施行範囲と調査地	2	図27	地山上面遺構平面図(2)	34
図2	長原遺跡西南地区の調査位置	3	図28	SX401実測図	35
図3	00-12次調査区配置図	4	図29	SD301・SF301断面図	36
図4	00-29次調査区配置図	5	図30	SD301断面図	37
図5	00-12次調査区平・断面図	8	図31	SD301出土須恵器・土師器	38
図6	第1層出土遺物	9	図32	SD301出土羽釜	39
図7	各層出土遺物	9	図33	SD301出土遺物	40
図8	石器遺物(第4層)	10	図34	SD301出土木製品	41
図9	SP501実測図	11	図35	SF301に伴う杭	42
図10	SP501出土須恵器破	11	図36	SD201出土遺物	43
図11	SD101出土遺物	12	図37	近世の畑平面図	46
図12	飛鳥時代の遺構分布図	13	図38	近世の畑と梨溝痕跡	47
図13	00-29次調査区西壁断面図	15	図39	近世～近代の溝平面図	48
図14	第2a層出土遺物	17	図40	近世以降の遺構出土遺物	49
図15	第2a～2c層出土遺物	18	図41	溝出土土管	51
図16	第2c～2d層出土遺物	19	図42	NR501と足跡化石	52
図17	第2d層出土遺物	21	図43	足跡化石実測図	53
図18	第2e～3a層出土遺物	23	図44	馬池と調査地点	57
図19	第3a～3b層出土遺物	24	図45	馬池谷復元図	58
図20	第3a・4a～4b層出土遺物	25	図46	慶長13(1608)年製造、狭山池東樋復元図	59
図21	石器遺物	26	図47	大和川周辺等高線図	62
図22	軒丸瓦・丸瓦	27	図48	狭山池分水図	63
図23	丸瓦・平瓦	28	図49	東瓜破村下絵図	65
図24	平瓦	29	図50	村絵図写	67
図25	平瓦	30	図51	王地丸樋・馬池間大和川堤樋絵図	72
図26	地山上面遺構平面図(1)	33			

表 目 次

表1	2000年度土地区画整理事業に伴う発掘調査一覧	1	表2	慶長17(1612)年 狭山池東除川(中樋)筋の丹北郡・住吉郡村々	64
----	-------------------------	---	----	-----------------------------------	----

写 真 目 次

写真1	SD302断面	44	写真4	ナウマンゾウ足印2(南から)	54
写真2	SF301杭出土状況	44	写真5	川辺村絵図	68
写真3	檜材の杭222	45	写真6	川辺村領内絵図	78

第Ⅰ章 調査の経過と概要

第1節 2000年度の発掘調査と報告書の作成

1) 発掘調査

2000年度の土地区画整理事業に伴う発掘調査件数は2件、発掘総面積は1,150㎡で、すべて長原遺跡西南地区である(図1、表1)。調査はまず00-12次調査が6月1日に開始して7月11日に終了し、やや間を置き、00-29次調査が9月13日開始で、翌2001年3月2日に終了したのを最後に、長吉瓜破地区の土地区画整理事業に伴う発掘調査をすべて完了した。各調査次数の担当者・調査面積・調査期間は表1のとおりである。各調査とも基本的には、現代盛土および現代作土を重機掘削し、それ以下を人力掘削し、遺構の精査に努めた。調査にて検出した遺構および遺物は、実測図や写真によって記録し、遺物について保存処理が必要なものはその都度処理を行った。なお調査次数は遺跡記号NG(長原遺跡)の後に年度、各年度における調査開始順の番号を付けて表記しているが、煩雑であるため本文ではNGを省略して表記する。

2) 報告書の作成

現場終了後の遺物の水洗・マーキング・接合およびおもな遺物の図化、写真の整理などの基本的な整理作業、および各現場における層序、遺構の検討は、終了後ただちに各調査担当者が行っている。2002年度の報告書作成に伴う図面・写真・遺物などの整理作業は、調査課長京嶋、長原調査事務所長高橋の指揮のもと黒田が行った。各調査次数の報文の執筆は、各調査担当者が作成した完了報告書をもとに、黒田が行った。

表1 2000年度土地区画整理事業に伴う発掘調査一覧

発掘次数	面積	調査地番	担当者	調査期間
長原遺跡西南地区				
NG00-12次	150㎡	平野区長吉長原西3丁目	李陽浩	2000年6月1日～2000年7月11日
NG00-29次	1,000㎡	同 長吉長原西3丁目	黒田慶一	2000年9月13日～2001年3月2日

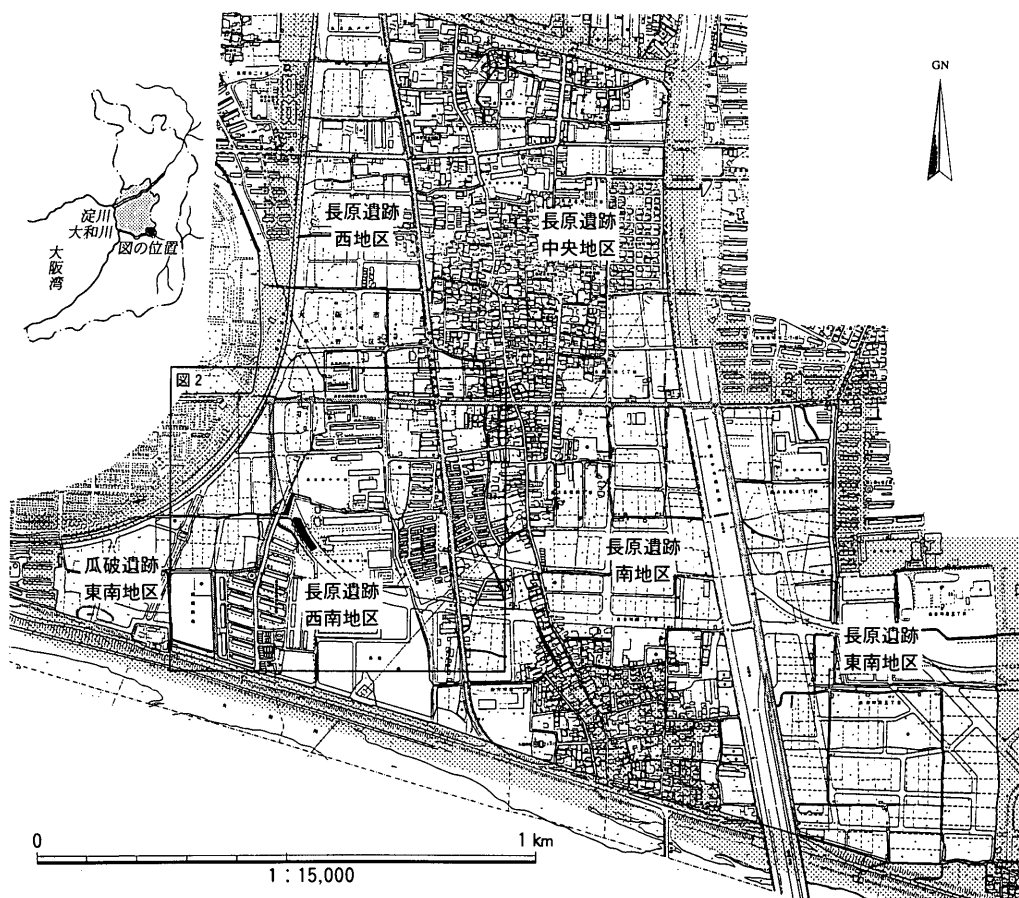


図1 土地区画整理事業施行範囲と調査地

第2節 発掘調査の経過と概要

1)00-12次調査

本調査地は長原遺跡西南地区に位置し、瓜破遺跡に隣接する。周辺では1982年度以降多くの調査が行われており、古墳時代から鎌倉時代の遺構が見つかっている(図2)。

とりわけ、北側に隣接する89-67次、97-18次調査では、飛鳥時代の掘立柱建物が見つかり、周辺一帯に飛鳥時代の遺構が数多く存在したことが知られている。

今回も区画整理に先立ち発掘調査を行うことになった。調査では現代盛土を地表下約 1 m まで重機で掘削し、それ以下については人力で掘削を行った。

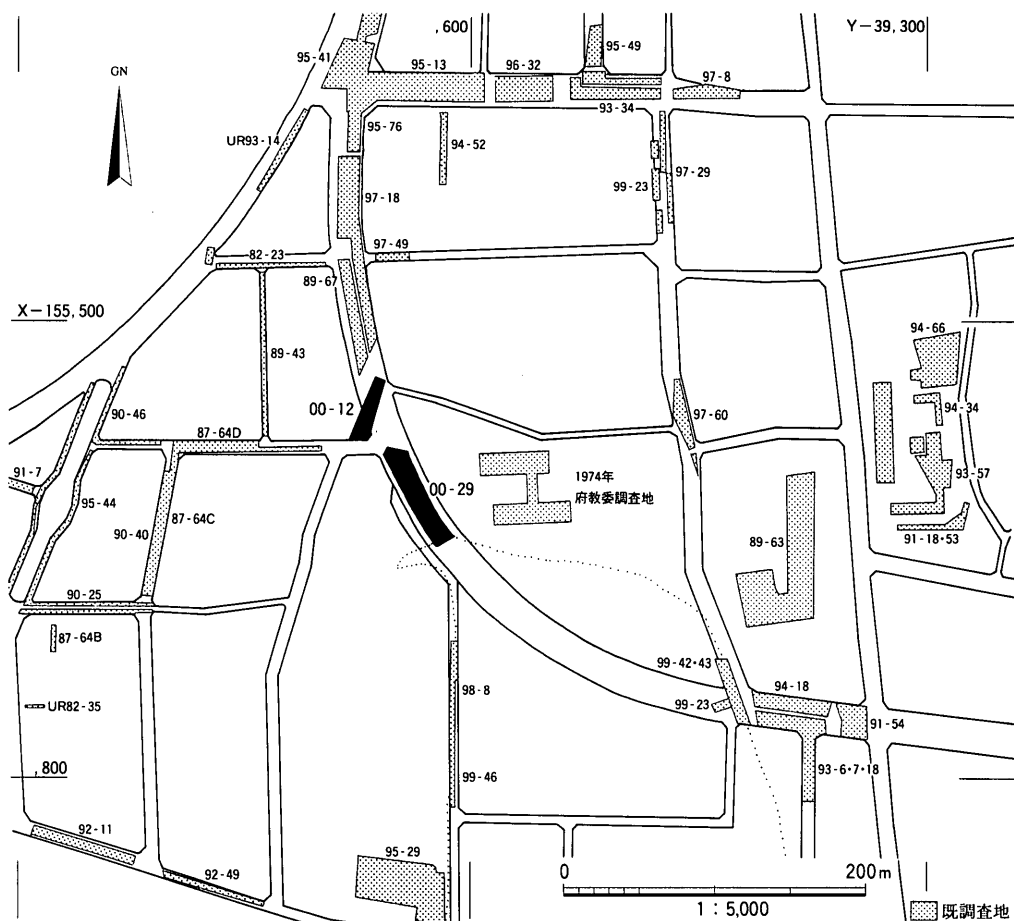


図2 長原遺跡西南地区の調査位置(点線は馬池の輪郭)

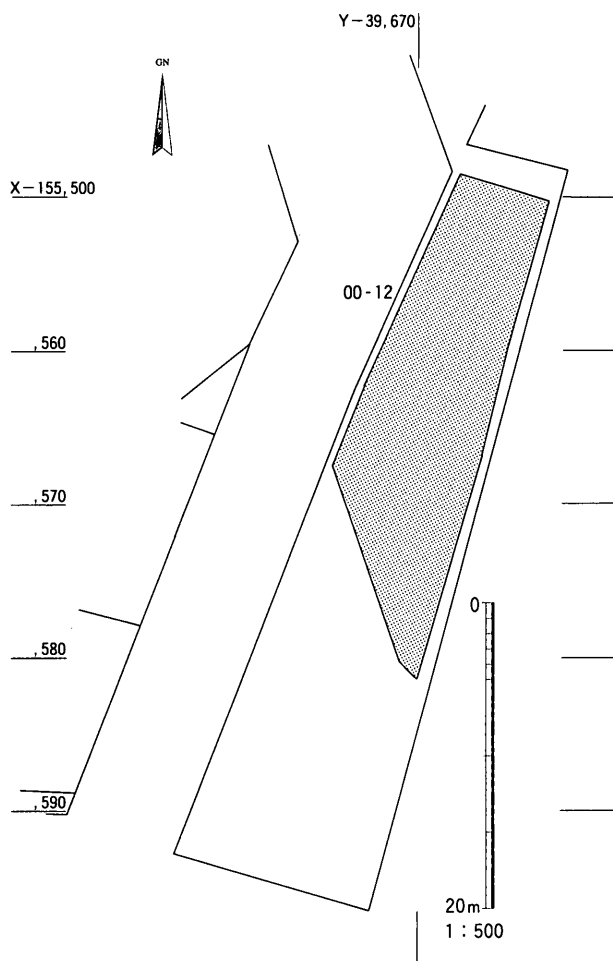


図3 00-12次調査区配置図

調査は6月1日に開始し、7月4日に発掘調査に係わる掘削や実測・記録作業を終了し、7月11日に埋戻しを含めたすべての現場作業を終了した。

2) 00-29次調査

本調査地は長原遺跡西南地区に位置し、00-12次調査地の南側である。本調査地南端は旧馬池の堤で、近時の99-42・43次や99-46次で馬池の堤が調査されている。99-46次調査地に北接する98-8次では、古墳時代後期から飛鳥時代にかけての遺構・遺物が検出されている。

また当地は本調査地東隣の大阪府立長吉高校の校舎建設時の発掘調査(1974年、図2)で、旧石器時代遺物などが出土したことから、

かつて「長吉野山遺跡」に指定された。ただ最近、当地周辺に分布する地山層は、中期旧石器時代以前のものが判明したから、中期旧石器時代の遺構・遺物の発見も期待できた。

調査後の工事との兼ねいで、調査地を南北に2分割して南・北2区を設け、南区から作業にかかったが、降雨による日程の遅れから、南区の北端の精査を後回しにし、北区の調査と同時に行うこととした。重機掘削で現代盛土と現代作土を除去し、それ以下は人力で掘削し、適宜遺構の精査・検出等の作業を行った。

調査最終段階で北区の中央に、旧石器遺物探査用のトレンチを設定したところ、西壁にナウマンゾウの足跡の可能性のある凹みが確認されたことから、足跡化石と旧石器時代遺物の検出に努めた。

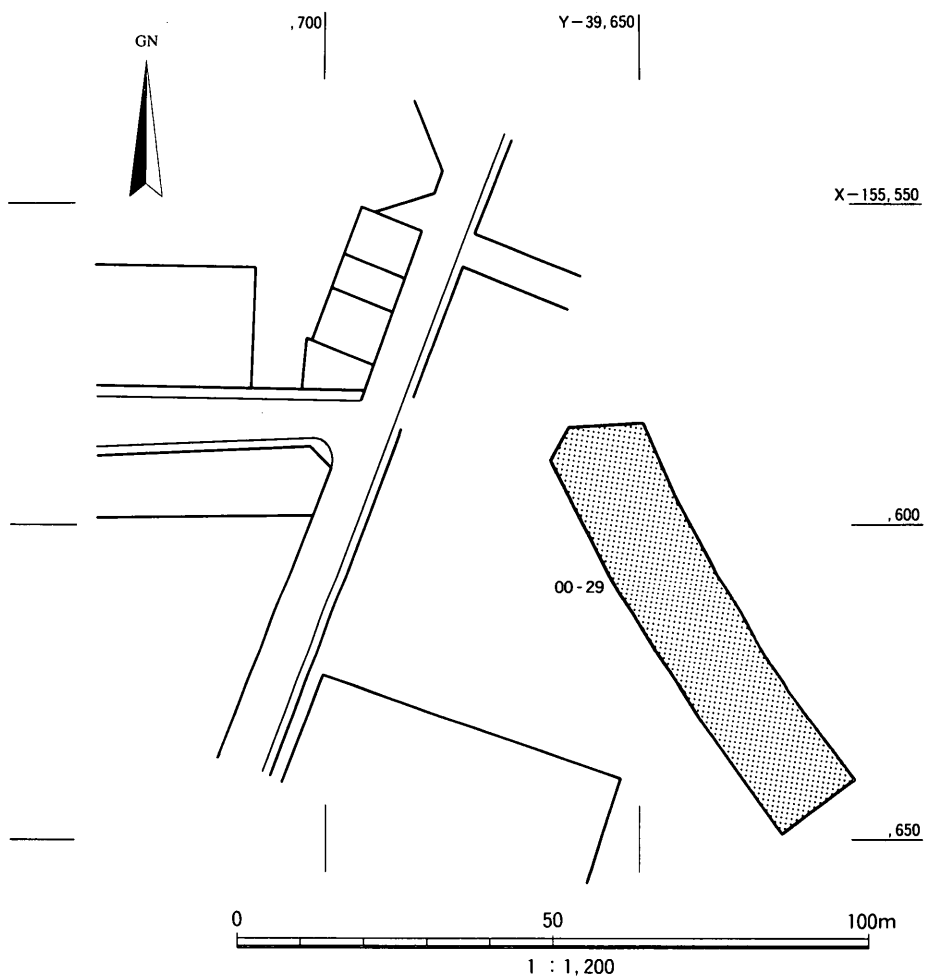


図4 00-29次調査区配置図

空中写真測量は11月24日と1月31日の両日実施した。調査は2月20日に終了し、同日から埋戻し、3月2日すべての現場作業を終了した。調査開始に当り公共座標に合わせて5mメッシュを組み、それに基づいて実測、遺物の取上げを行った。

第Ⅱ章 長原遺跡西南地区の調査結果

第1節 00－12次調査

1) 層序とその遺物

i) 層序(図5)

調査区内では現代盛土以下に、近世の作土層を検出した。地山上面は中近世の開発で大きく削平されているようである。

第0層：現代盛土である。

第1層：層厚5～15cmを測る黄灰色(2.5Y4/1)粗～細粒砂混りシルトの現代作土層である。

第2層：層厚5～15cmのオリーブ褐色(2.5Y4/6)細～極細粒砂混りシルトである。以下、第4層までは近世の作土層で長原2層に相当する。

第3層：層厚5～15cmの粗～細粒砂を含む黄褐色(2.5Y5/6)極細粒砂混りシルトである。

第4層：最大層厚10cmの粗粒砂を含む黄褐色(2.5Y5/4)極細粒砂混りシルトである。

第5層：細粒砂を含む黄褐色(2.5Y5/6)混りシルトの地山層である。

ii) 各層出土の遺物(図6～8)

第1層出土遺物(図6、図版13)

土製ミニチュア1は梵鐘で、撞座より左1/6が残っている。土人形2は唐子を表す。いずれも18世紀頃のものと思われる。

肥前磁器片3は周囲を打ち欠いて不整六角形にしたオハジキである。肥前磁器碗26と同じ文様と思われ、V期の碗の一部と思われる。

第2層出土遺物(図7、図版13)

瓦質播鉢6は口縁部断面が三角形を呈し、外面はヨコナデ、内面はタテナデを施す。15世紀前半頃と思われる。

第3層出土遺物(図7)

瓦器碗11と12が出土した。11は退化した高台をもつ。13世紀前半に位置する。12は復元

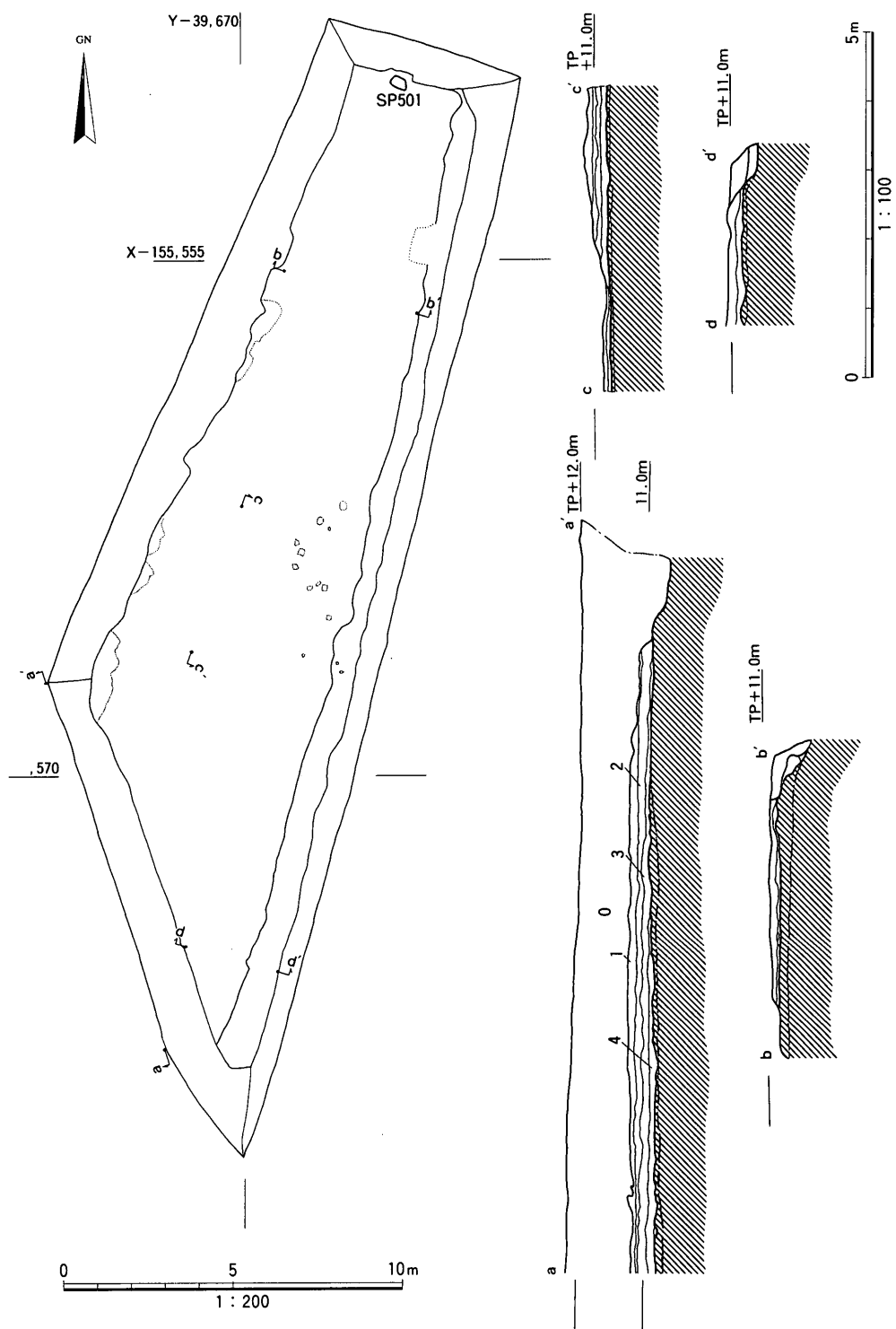


図5 00-12次調査区 平・断面図

口径12.2cmで、13世紀後半である。

第4層出土遺物(図7・8、図版11~13)

土師器碗9は器形が瓦器碗に似ている。型作りによると思われる。13世紀前半であろう。

赤絵碗10は復元口径13.4cmで、中国製の可能性がある。17世紀前半である。

土師器皿13は復元口径9.0cmで、強いヨコナデで短い体部を形成する。13世紀と思われる

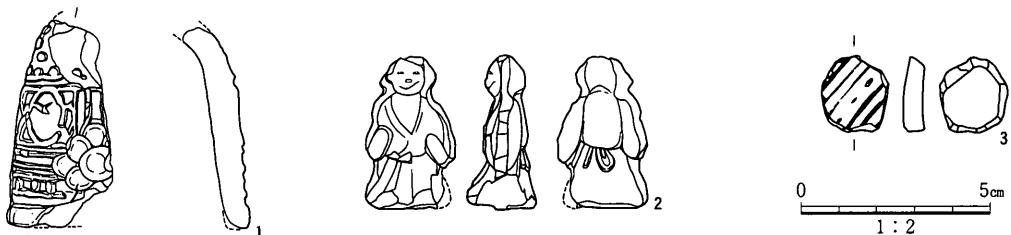


図6 第1層出土遺物

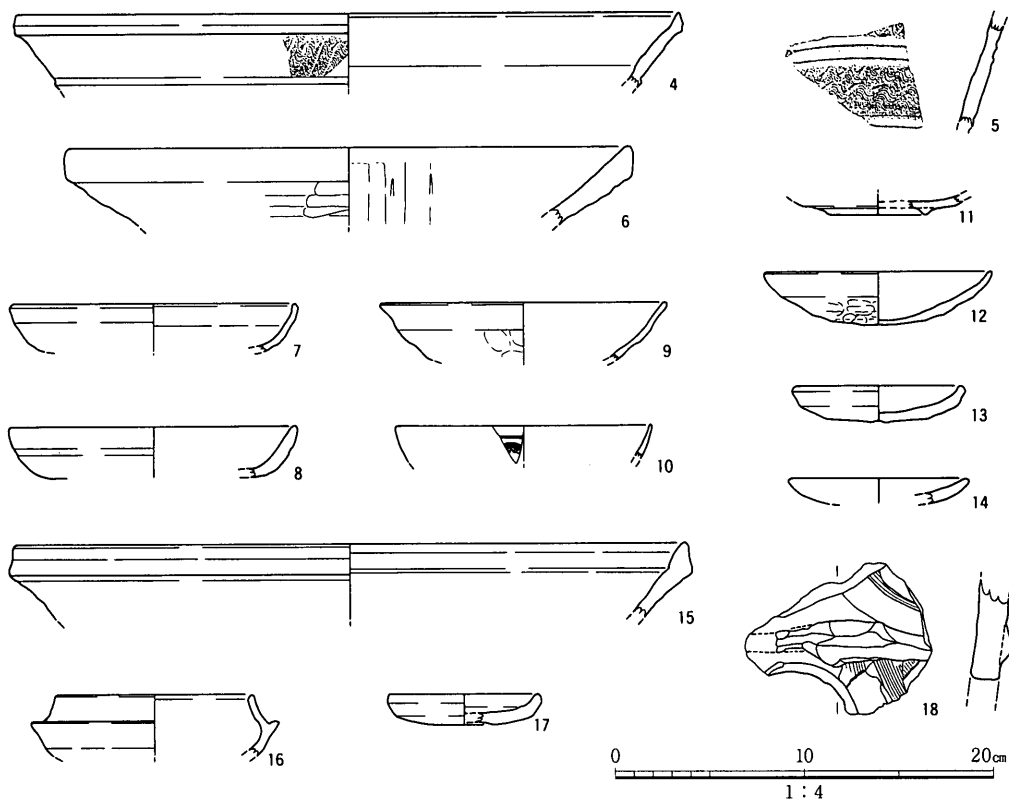


図7 各層出土遺物

第2層(6)、第3層(11・12)、第4層(9・10・13・15)、第2~4層(4・5・7・8・14・18)、
地山上面(16・17)

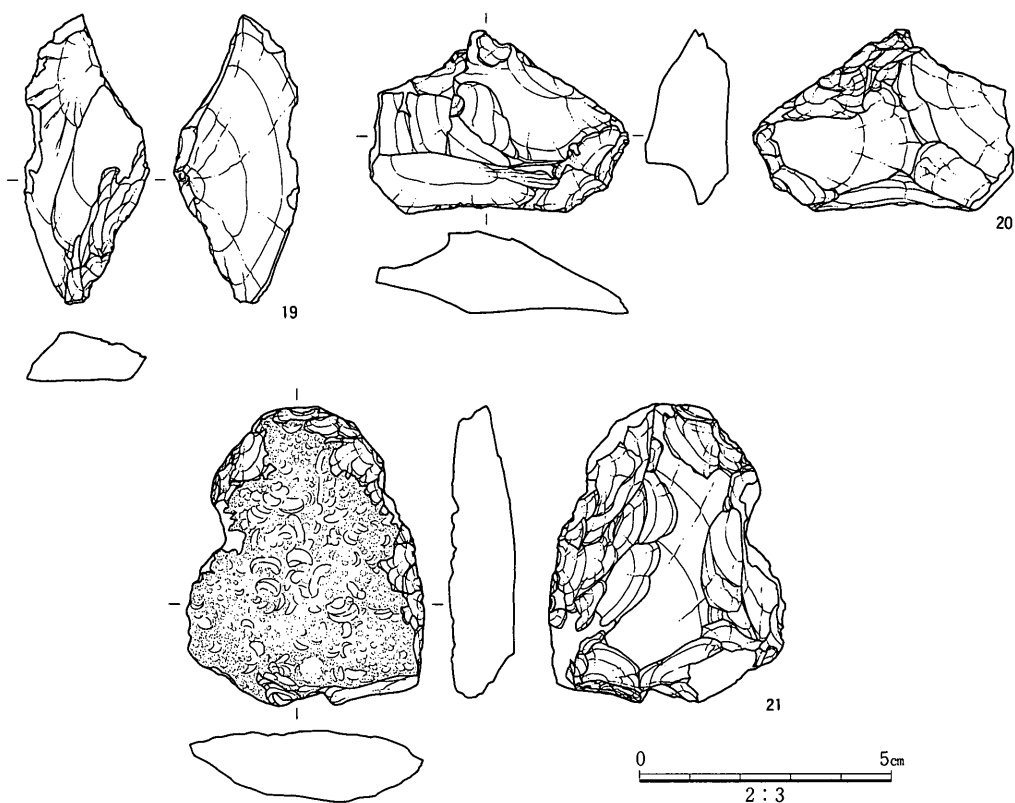


図8 石器遺物(第4層)

る。

須恵器捏鉢15は東播系で、12世紀末～13世紀初頭と考えられる。

石器遺物として19～21が出土した。いずれもサヌカイト製である。

19は横形剥片である。山形の打面部を形成して剥離されたものと思われる。

20はクサビである。厚みのある剥片を素材としている。表面の右側縁、上端部に敲打により生じた剥離痕が認められる。

21はスクレイパーである。幅広で大型、かつ厚みのある剥片を素材としている。素材剥片の表面は、全体が自然面である。素材剥片の周縁より、やや深い調整剥離を連続して施している。大型の石鏃などの半成品の可能性もあろう。

19～21も後世の作土層より出土しており、所属時期は不明である。石器遺物の風化度がそれぞれ異なっていることから、旧石器時代から弥生時代までの遺物が混在しているものと思われる。

第2～4層出土遺物(図7、図版12)

須恵器甕4と器台5が出土した。4は口縁部と突帯の間に波状文を施す。ON46型式と思われる。5は2本の突線の下に波状文をもつ。TK208型式である。

土師器皿7・8はそれぞれ復元口径15.2cm、15.4cmの皿AⅡに当り、平城宮Ⅵに位置する。また土師器皿14は復元口径9.6cmで、14世紀頃のものと思われる。

円筒埴輪18は一次調整のナナメハケ後、断面が不整形で突出度が低いタガを付け、円形のスカシ孔を施す。Ⅴ期に属する。

地山上面(図7、図版12)

須恵器杯身16は断面はセピア色を呈し、復元口径10.5cmで、ヘラケズリは時計回りであり、TK208型式と思われる。

土師器皿17は浅くへこむ円板形の底部に短い体部が立上る。体部は強いヨコナデが加えられ、底部との間に明瞭な稜線が形成される。13世紀と考えられる。

2) 遺構とその遺物

i) 飛鳥時代

SP501(図9・10、図版1・12) 調査区北端の地山上面で検出した柱穴で、掘形の平面は南北0.3m、東西の長辺0.6mの台形を呈し、深さは0.1m残っていた。西端に直径0.2mの柱痕跡が見られた。掘形から飛鳥時代の須恵器甕22が出土した。

須恵器甕22は円孔のある体部破片であり、稜線は不明瞭であることから、口頸部が長大化した甕最終末のものと考えられる。TK209型式であろう。

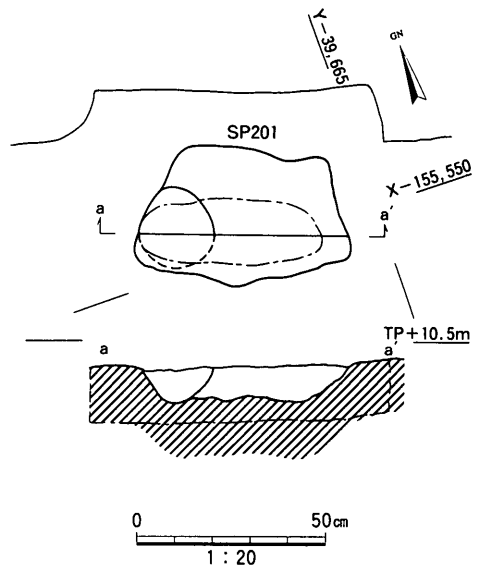


図9 SP501実測図

ii) 近世～近代

SD101(図11、図版13) 調査区の東端で検出した北で東に15度振る幅1m以上、深さ0.4mの現代溝である。長原地域は正方位を示す中河内条里内であるが、当地は馬池谷に影響され、方位を大きく振っている。

須恵器甕23は口縁部を肥厚させ、端部は丸くおさめる。6世紀頃の

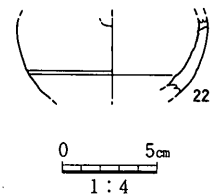


図10 SP501出土
須恵器甕

ものとみられる。瓦器碗24は見込みに斜格子の暗文を施す。12世紀頃と考えられる。

唐津焼皿25は折り縁皿で、口縁部をやや内傾させ、灰釉を施す。Ⅱ期に属する。

肥前磁器は碗26・27・30、皿28が出土した。26は体部外面に丸の内に実線と点線で平行線を描く丸文と口縁下に圈線を巡らせる。Ⅴ期と考えられる。27は高台と底部外面に3条の圈線を巡らせる。Ⅳ期に属する。28は底部は蛇ノ目凹形高台で、見込みに草文と揺れる連珠を描く。Ⅴ期と思われる。30は桐文を描くⅢ期の碗の周囲を欠き取り、おはじき状にしたものである。

堺焼播鉢29は口縁部内面に段があり、細かい揺り目を施す。18世紀後半と考えられる。

3)小結

今回の調査では、調査区北端の地山上面で飛鳥時代の柱穴SP501を検出した。ほかに同時期の遺構が検出されなかったことから、北方に展開する飛鳥時代の掘立柱建物群は当地より南には延びていないと推定される。SP501検出の意義を考えておきたい。

馬池谷西側には東西2箇所、飛鳥時代の建物群が集中するところがある。今回調査地と同様馬池谷を臨む、97-18・49次調査地を中心とした「東群」[大阪市文化財協会2001a・b][高橋工2000]と、その西南方400mのUR86-11次調査地を中心とした「西群」[大阪市文化財協会1994・1999a・2000b]である。後者は建物配置がコ字形を呈するなど、官衙の可能性のある建物群であり、東群と西群の間には南北に延びる小さな埋没した谷地形が存在し、両者を分けている。SP501は東群に属するから、ここでは東群とSP501の関係を

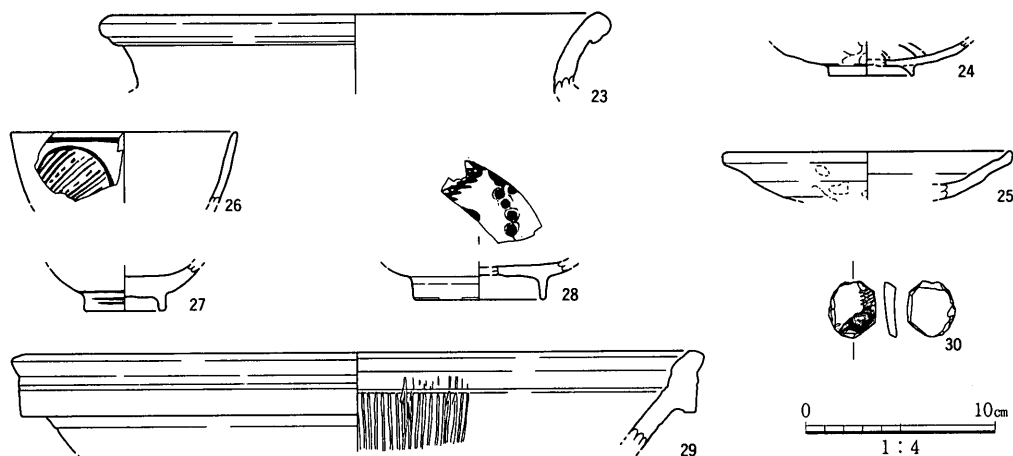


図11 SD101出土遺物

東群は標高10.5～12.5mの高さで南から北に細長く延びる尾根状の高まりにある。この高地は北側を小谷によって分断され、半島状の地形となっている。図12に示したように、SP501の北方には建物1～10が存在する。[大阪市文化財協会2001b]は出土遺物からこれらの建物を1・2期に分けている。すなわち1期がTK209型式、2期がTK217型式に該当する。

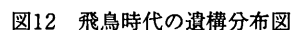
① 1 期：総柱建物 2 棟(建物 4・5)、側柱建物 3 棟(建物 8～10)、竪穴住居 1 棟(建物 7)である。建物 8・9 は建物 4・5 と並存したことも考えられる。

建物7は竈を有していることから簡易な構造の厨房であった可能性があり、建物8・9とは溝Dで区分されているから、空間的な機能分化を示す可能性がある。

また東西方向の溝Bより南に分布しており、これが建物群の北を区画するものであったことが考えられる。

②第2期：建物1～3が該当する。建物3は東面庇を有する総柱建物で、建物2とは近接しすぎているため同時存在しえないが、建物1とは共存しうる。

以上のように、建物群は1期のものが南半に、2期のものが北半にあることがわかる。SP501はTK209型式に属するから、1期の建物群がここまで広がることがわかった。



第2節 00-29次調査

1) 層序とその遺物

i) 層序(図13)

調査区南端は馬池北堤で、それから北に32mのSD106を境に地山が1mほど高くなる段があり、北区の地山面は中央から北西方向に徐々に高度を下げる。南区ではその大半を中世の灌漑用水路SD301が占め、その埋没後に田や畑として耕作され、畝間溝や犁溝群は都合4面6時期確認できた。北区は地山が高くなる南側の地山上面で、畝間溝や犁溝が同時に検出されるが、北側は地山面を含めた4面で、犁溝と人や偶蹄類の足跡と思われる踏込み跡を検出した。

第0層：現代盛土で、層厚は約1mである。

第1層：現代作土である。含粗粒砂オリーブ黒色(5Y3/2)シルトからなり、層厚は20cmである。

第2a層：南区では層厚10cmの含粗粒砂黄褐色(2.5Y5/4)粘土で、北区では層厚10cmの灰オリーブ色(5Y5/2)粗粒砂混りシルトである。本層上面ではおもに東西方向の犁溝を検出した。

第2b層：南区北端では層厚数cmで分布するが、南区のほとんどでは第2c層を畝とする畝間溝の埋土としてのみ存在する黄褐色(2.5Y5/3)粘土混り砂礫である。本層下面で2時期の畝と畝間溝を検出し、南北方向の畝が古い。

第2c層：南区では層厚10cmの含粗粒砂暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土質シルト層で、北区は層厚10cmの灰オリーブ色(5Y6/2)粗粒砂混りシルト層である。本層途中で南北方向の畝と畝間溝を見つけた。

第2d層：南区に分布する層厚10cmの灰白色(7.5Y7/1)粗粒砂混り粘土層である。本層上面で2時期の畝間溝を検出した。東西方向が古く、南北方向が新しい。

第2e層：南区に分布する層厚10～20cmの含粗粒砂黄褐色(10YR5/6)シルト層である。第2a層から本層まで肥前陶磁器が含まれ、長原2層に相当すると考えられる。

第3a層：南区では層厚10～30cmの黄褐色(2.5Y5/3)粘土質細粒砂層、北区では層厚10cmの灰オリーブ色(5Y5/3)粘土質シルト層として分布し、土師器・須恵器・瓦質土器片を含む。北区では下面で犁溝を検出した。

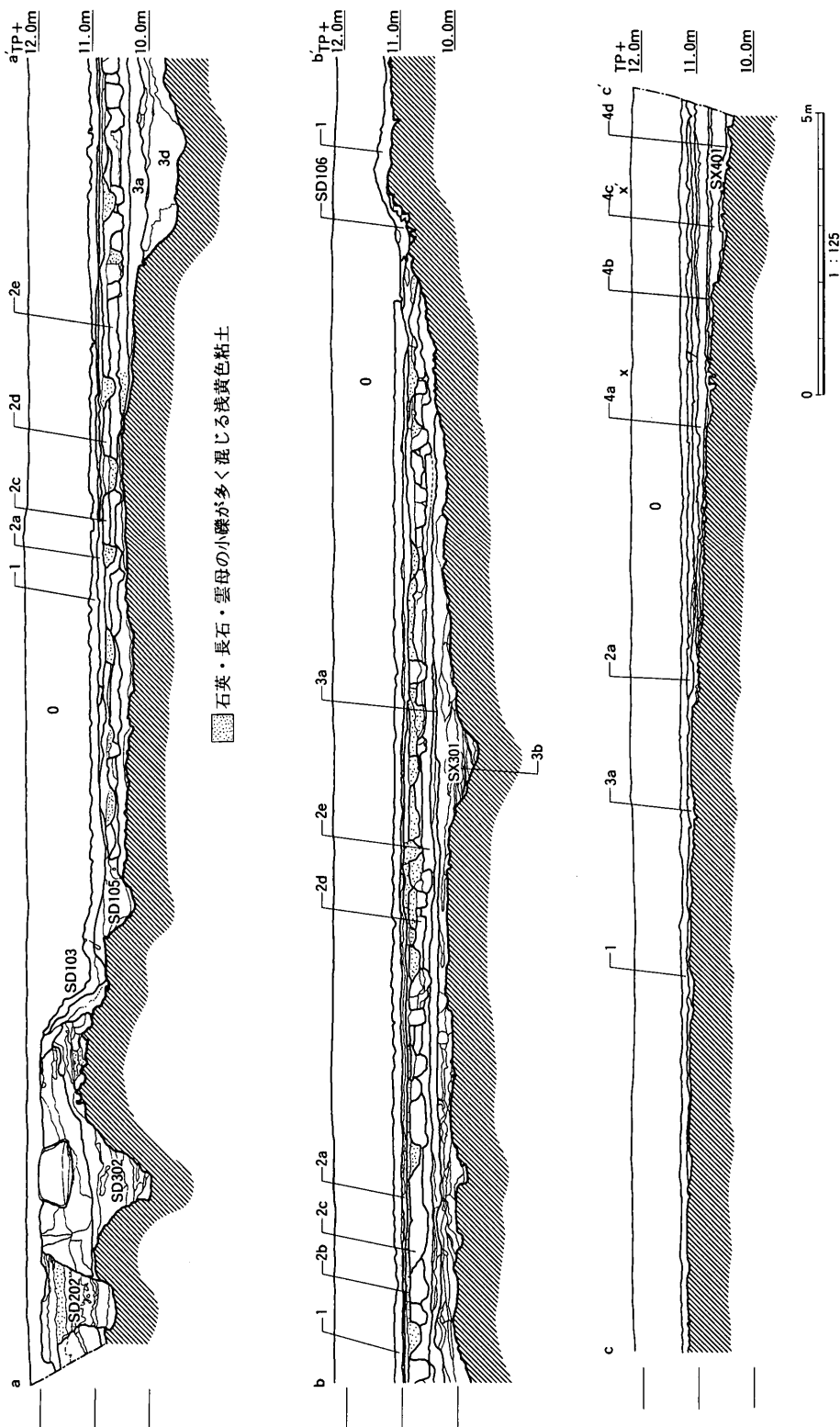


図13 00-29次調査区西壁断面図

第3b層：南区に分布する層厚20～70cmの黄褐色(2.5Y5/3)粘土質シルト～粗粒砂で、SX301内で厚く分布し、瓦質土器や青磁片などを含む。

第3c層：灌漑用水路SD301内に分布する、層厚30cmの水田耕土である。おもに灰オリーブ色(5Y5/2)粘土混り粗粒砂からなり、中世瓦、瓦質播鉢や同羽釜などを含む。

第3d層：上部はおもに暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土質シルトからなり、下部は灰オリーブ色(5Y5/2)粗粒砂混りシルトである。15世紀頃の瓦質の羽釜片を含む。SD301埋没過程の第Ⅲ期の埋土である。

第3e層：巨大な地山土の塊と砂礫層からなる。層厚は1.5m以上で、13世紀頃の瓦器碗を含む。第Ⅱ期の埋土である。

第3f層：灌漑用水路SD301を閉塞した堤SF301を構成している土層で、当時の地表土(粘土質土)を母材として厚さ10cmで水平に積まれた土層と、その前面に施された砂礫層からなる。SD301埋没過程の第Ⅰ期の埋土である。

第4a層：北区に分布する層厚15cmの灰オリーブ色(5Y6/2)粘土質シルト層である。

第4b層：北区に分布する層厚数cmの灰黄色(2.5Y6/2)粘土質細粒砂層で、12世紀頃の瓦器碗片を含む。

第4c層：北西隅のSX401に分布する層厚20cmの含粗粒砂灰白色(2.5Y7/4)粘土質シルト層で、埴輪や飛鳥時代の須恵器を含む。

第4d層：北西隅のSX401に分布する層厚10cmの含粗粒砂黄褐色(2.5Y5/3)粘土質シルト層で、基底面(第6層上面)に踏込み跡が見られる。第4a層から本層までが、長原4層に相当すると思われる。

第5層：NR501の埋土としてのみ存在する灰オリーブ色(5Y6/2)細礫混り粗粒砂～粘土混り粗粒砂である。長原15層に相当する。

第6層：層厚40～65cmの灰白色(5Y7/2)シルト質粘土層で、ベースの粘土層から吾彦火山灰層(8.7万年前)と北花田火山灰層(9.1万年前)に由来すると思われる石英や長石が抽出されたことから、本層は長原16A層に該当すると考えられる。

ii) 各層出土の遺物(図14～25、図版14～21)

第2a層出土遺物(図14・15、図版19・20)

須恵器は器台31、高杯32、杯身34、無頸壺35が出土した。31は断面がセピア色で、脚部端面は水平である。TK23型式と考えられる。ローリングによる磨滅が激しい。32は四方向に長方形スカシ孔をもつ脚部で、TK216型式に属する。34は復元口径14.0cmで、TK43

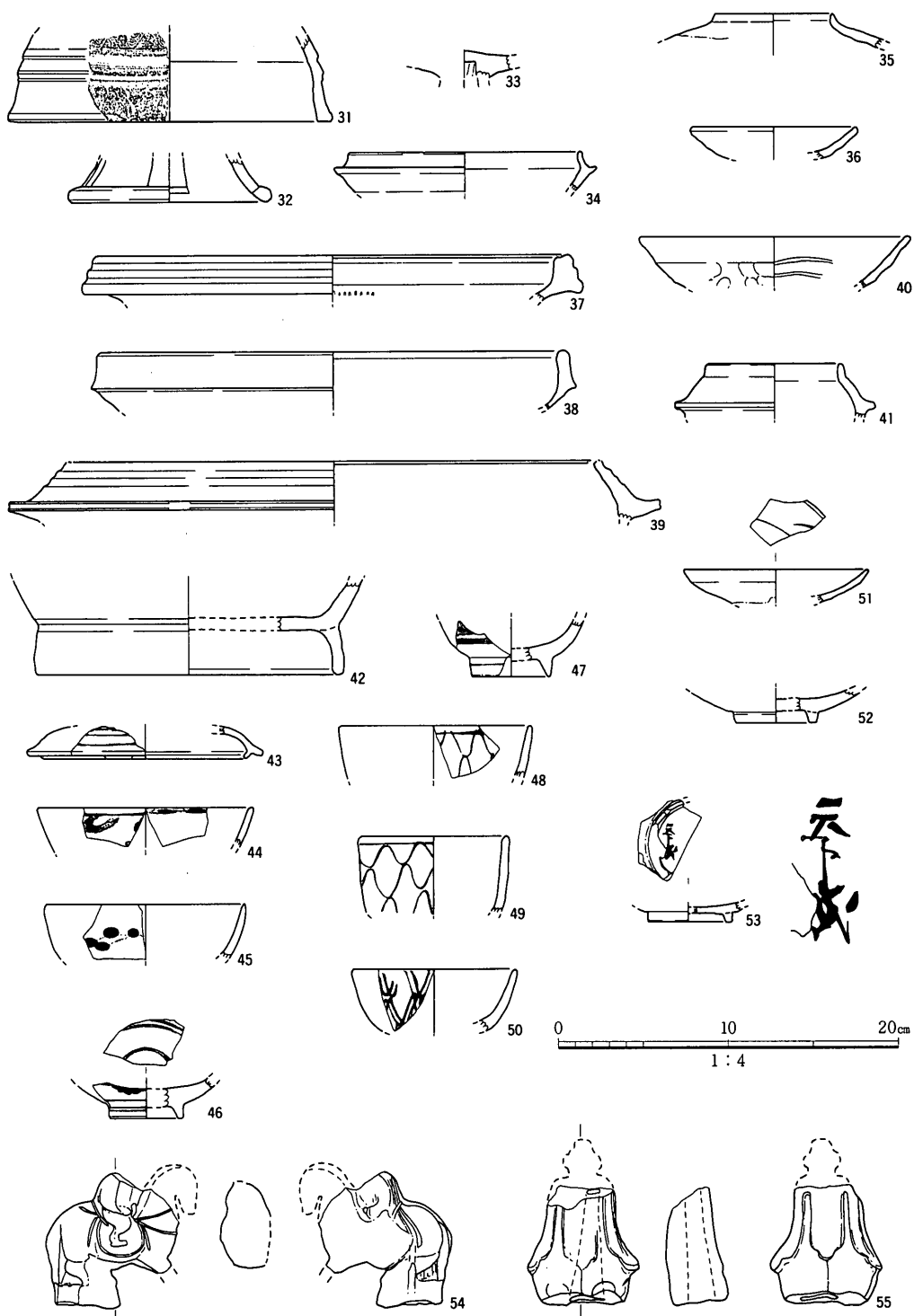


図14 第2a層出土遺物(54・55は縮尺1/2)

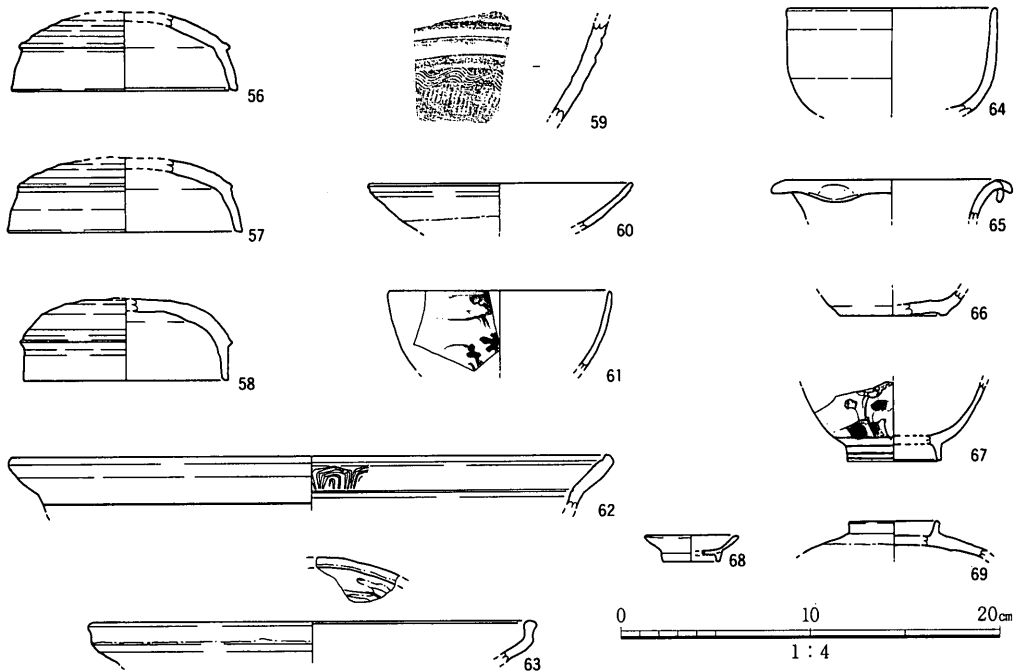


図15 第2a～2c層出土遺物
第2a層(62・69)、第2b層(59)、第2c層(56～58・60・61・63～68)

型式に属する。35は復元口径7.0cmを測り、焼成時に蓋を置いた痕跡があることから壺Aで、平城宮VI頃のものと思われる。土師器高杯33は杯部の底部である。5世紀代のものと思われる。

軟質施釉皿36は内面に鉛釉を施したもので、18～19世紀の関西産と思われる。

陶器擂鉢37は肥厚させた口縁部外面に凹線を巡らせる。

炮烙38は口縁部内外面にていねいなナデを施す。18世紀後半と思われる。

瓦質羽釜39は内傾する口縁部に凹線を用いて3条の段を表現している。口縁端部は丸みを残す。15世紀中葉に位置すると思われる。瓦器碗40は内面にラセン状暗文が見える。13世紀である。

土師質羽釜41は復元口径8.0cmのミニチュアで、17世紀前半のものと思われる。

瓦質火鉢42は高い高台をもつ。18世紀のものと思われる。

肥前磁器は碗蓋43、碗44～46・48～50・52が出土した。43は圈線を多用する。口縁端部から返しにかけて砂が付着する。Ⅲ～Ⅳ期前半のものと考えられる。44は口縁部直下に圈線を巡らせる。Ⅲ期のものである。45は体部外面に蔓草を描く。Ⅳ期である。46は内外面とも圈線を多用し、体部外面に菊花文を配する。畳付けは露胎で砂が付着する。Ⅲ期と

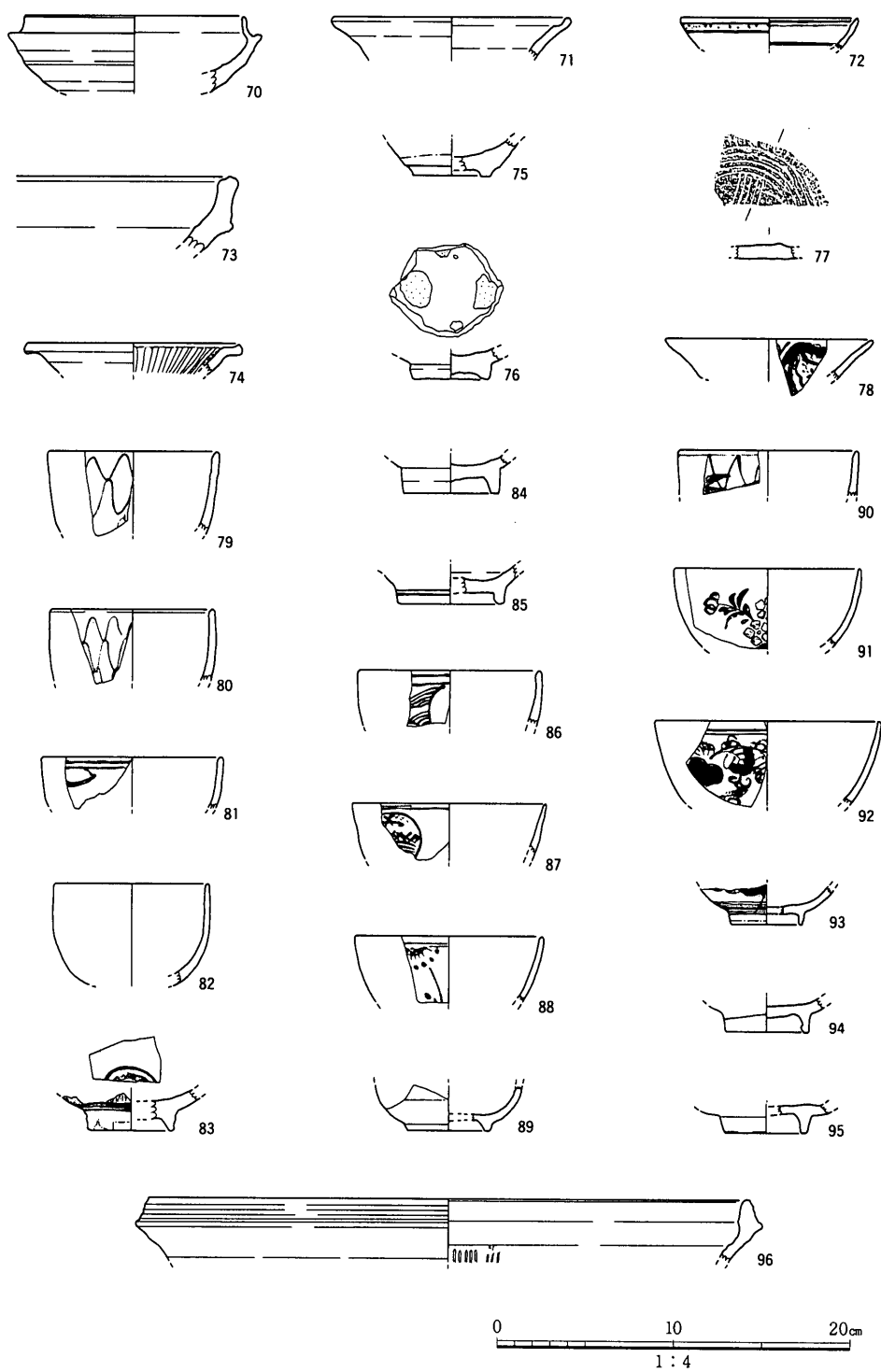


图16 第2c~2d層出土遺物

第2c層(72・78・85・92)、第2d層(70・71・73~77・79~84・86~91・93~96)

思われる。48・49は外面の口縁部下に圈線を巡らせ、一重の網目文を施す。Ⅲ期である。50は外面に二重の網目文を描く。Ⅳ期に属する。52は見込みは蛇目状に釉ハギし、高台は露胎である。Ⅳ期に属する。

肥前陶器碗47は内面は白化粧し、外面は圈線を描いた後、透明釉をかけている。畳付けは釉ハギしている。Ⅲ期に属する。唐津焼皿51は内面の2本の圈線間に笹葉様の絵を描く。Ⅲ期と思われる。

関西系陶器53は高台内に墨書「天ト□(賦カ)」をもつ。18世紀頃のものと思われる。

土製ミニチュアとして騎馬人形54、神像55がある。54は馬具を装備した馬にまたがる。55は中空に作られ、木靴を履いた神像を表している。

唐津焼大皿62は三島手で、白泥の充填が曖昧である。Ⅲ～Ⅳ期と思われる。

褐釉陶器蓋69は内面に灰釉、天井部外面に鉄釉を塗る。19世紀である。

以上の遺物から本層の形成は19世紀である。

第2b層出土遺物(図15、図版16)

須恵器器台59は断面セピア色の鉢部の破片である。細かい条線のタタキの後、波状文を施す。TK208型式と思われる。

第2c層出土遺物(図15・16、図版15・18・19)

須恵器は杯蓋56～58が出土した。56は復元口径11.8cmで、天井部との境の稜線から次第に開いて口縁部に達する。口縁端部は水平で、ヘラケズリは時計回りである。57は復元口径12.2cmで、口縁部に向って開いている。口縁端部は水平で、ヘラケズリは時計回りである。58は外面がセピア色で、ヘラケズリは時計回りである。いずれもTK216型式である。

肥前陶器は皿60と碗92が出土した。60は外面に透明釉、内面に銅緑釉を掛け分けている。内野山の製品と思われる。92は口縁下に二重圈線と蔓草文を描く。いずれもⅢ期である。

肥前磁器は碗61・67、小皿68、瓶85が出土した。61は外面に菖蒲文を描く。Ⅳ期である。67は高台から底部外面にかけて4条の圈線を描き、体部外面に花卉文を描く。畳付けは露胎で、Ⅲ期に属する。68は型作りで、口縁端部は水平面をなす。Ⅳ期と思われる。85は畳付けは釉ハギし、高台付け根に圈線を2本描く。Ⅲ期と思われる。磁器皿78は内面の区画間に葉文を配する。肥前磁器と思われるが、青花の可能性もある。

唐津焼は水差63、碗64が出土した。63は口縁部がやや反る。Ⅱ～Ⅲ期と思われる。64はいわゆる御器手でⅢ期に属する。

関西系陶器鍋65は口縁部を「く」字形に下方へ強く折り曲げるが、折り曲げをやや抜けて

把手を作り出している。18世紀と考えられる。

瀬戸美濃皿66は、碁笥底内に別個体の溶着痕がある。16世紀後半に位置する。

青花皿72は粗製のもので、圈線を多用している。17世紀前半と思われる。

以上の遺物から本層の形成は18世紀後半である。

第2d層出土遺物(図16・17、図版18)

須恵器は杯身70と壺97が出土した。70はていねいな逆時計回りの回転ヘラケズリを施す。TK43型式である。97は波状文を描く。内外面に自然釉が付着し、TK208型式に属する。

備前焼播鉢73は口縁部の高さが2.8cmを測る。16世紀前半に位置する。

瀬戸美濃溝縁皿74は菊花を形作っている菊皿である。16世紀末である。

唐津焼は碗75・76・84、皿71・98、筒形碗100、鉢103が出土した。71は溝縁皿でⅡ期である。75は削り出し高台で、底部は露胎である。Ⅰ期に位置する。76は底部を糸切り後、高台内を削っている。見込みに練り砂目痕が見られる。Ⅰ期である。84は底部外面は露胎で、内面に灰釉を施す。Ⅳ期前半と思われる。98は外面底部は高台も含めて露胎で、見込みに粗い練り砂目が見られる。Ⅱ期である。100は灰白色釉を施す。Ⅱ期である。103は溝縁をもち、白色釉を施す。Ⅱ～Ⅲ期に属する。

丹波播鉢77は密にスリメを刻んでいる。17世紀である。

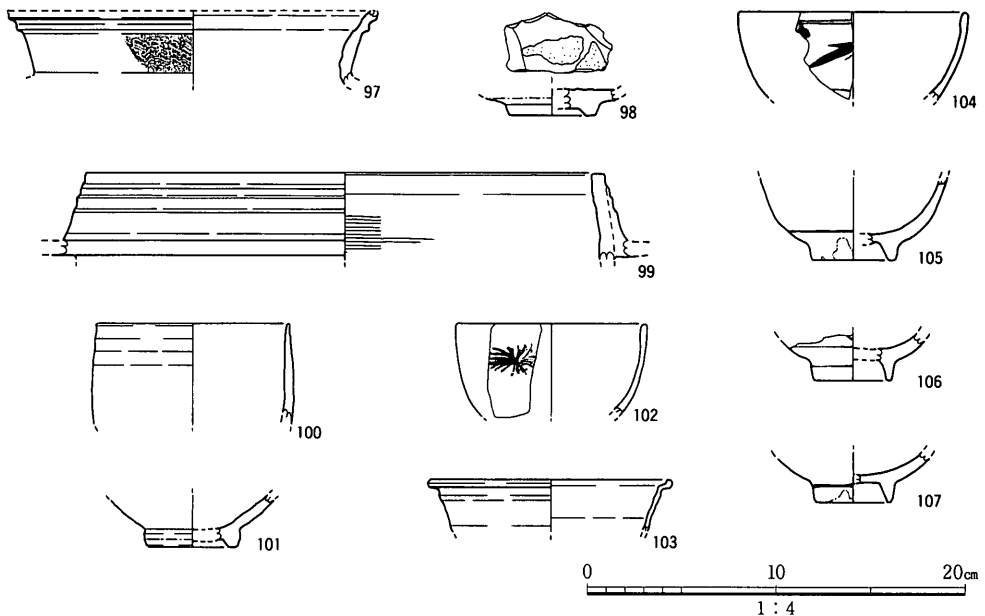


図17 第2d層出土遺物

肥前磁器は碗79・81・86・88・90・91・93・95・102・104・107、瓶89が出土した。79は一重の網目文で、Ⅱ～Ⅲ期に位置する。80は一重の網目文で、Ⅱ～Ⅲ期である。81は口縁外面に2本の圈線を巡らせる。Ⅱ～Ⅲ期である。86は口縁外面に2本の圈線を描き、放射状文を配する。Ⅱ～Ⅲ期に属する。87は透明釉を内外面で掛け分け、外面に檜垣文を内に描いた丸文を配する。Ⅲ期である。88は口縁下に2本接近して圈線を描き、草花文を配する。Ⅲ期に位置する。89は畳付けを釉ハギする。Ⅲ期である。90は草文の上に一重網目を描く。Ⅲ期に属する。91は型紙刷りで桔梗文を配する。Ⅳ期前半である。93は底部外面に圈線を多用し、高台内にも1つ配する。Ⅳ期でも初期の作品と思われる。94は高台上部外面に圈線を描く。畳付けは露胎で、粗い長石砂が密に付着する。Ⅲ期に属する。95は高台内を深く削り、底部が薄くなっている。畳付けは露胎で砂目痕がある。Ⅲ期である。102は透明釉を器の内外で掛け分け、外面に菊文を描く。Ⅲ期である。104は高台の内外面に露胎部分があり、畳付けに粗い長石砂が付着する。体部下部に圈線が1本描かれている。Ⅲ期である。105は透明釉を内外面で掛け分け、外面の2本の圈線間に笹文を描く。Ⅲ期である。106は高台と底部外面に圈線が入り、露胎の畳付けに長石砂が付着する。Ⅲ期と思われる。107は畳付けから高台内面にかけて露胎で、高台外面に圈線を1本巡らせる。Ⅲ期と考えられる。

肥前青磁碗82は釉を掛け分けている。Ⅲ期に属する。

青花碗83は漳州窯の製品で、畳付けと高台内は露胎、見込みに丸文を描く。17世紀前半以前のものである。

信楽焼擂鉢96は鉄釉を施す。17世紀に位置する。

瓦質土器羽釜99は鐙部を欠失し、やや内傾する口縁部をもつ。口縁端部は水平である。15世紀後半に位置する。

軟質白磁碗101は内野山系で、畳付けから高台内面にかけては露胎である。Ⅱ期に属する。

したがって本層の形成時期は18世紀前半である。

第2e層出土遺物(図18、図版18・19)

須恵器は壺108と甕109が出土した。108は口縁端部を上につまみ上げている。TK47型式とみられる。109は内面の当て具痕をていねいにナデ消している。TK47型式以前のものである。

青花は皿111と碗114が出土した。111は内外面とも圈線を多用し、見込みに牡丹文を配する。17世紀前半と考えられる。114は外面に芭蕉葉文、見込みに二重圈線からなる丸文

をもつレンツー碗で、16世紀前半のものである。

肥前磁器碗112は口縁外面に圈線を引き、遠山を描く。Ⅱ期である。唐津焼碗113は溝縁をもつ。Ⅱ～Ⅲ期とみられる。

以上の遺物から本層の形成は17世紀後半である。

第3a層出土遺物(図18・19、図版16・17)

須恵器は壺110、高杯115・116、器台119が出土した。110は口縁端部に稜線を有する。TK23型式と思われる。115は長方形のスカシ孔をもつ。2本の突帯はするどい稜線をもつ。TK73型式である。116は長方形のスカシ孔を四方に配したとみられる。TK216型式と思われる。119は2条ずつの突帯間に波状文を描き、三角形のスカシ孔を一段ごとに交互に配している。TK23型式に位置する。

瓦質土器羽釜121は内傾する口縁部をもち、口縁端部は丸みを残す。鋳部の下面からヨコ方向のヘラケズリが体部に及んでいる。15世紀前半に位置する。

弥生土器甕124は体部上端を直角に近く折り曲げて、口縁部を成形する。畿内第Ⅲ様式の土器である。須恵器杯蓋125は復元径15.0cmで、杯BⅢ蓋に属し、平城宮Ⅱである。

瓦質土器は羽釜126と播鉢127が出土した。126は内傾する口縁部と鋳の境に直径5mmの円孔を穿っている。15世紀前半に属する。127は口縁端部の断面が三角形を呈する。15世紀前半に位置する。

第3b層出土遺物(図19・21、図版14・17)

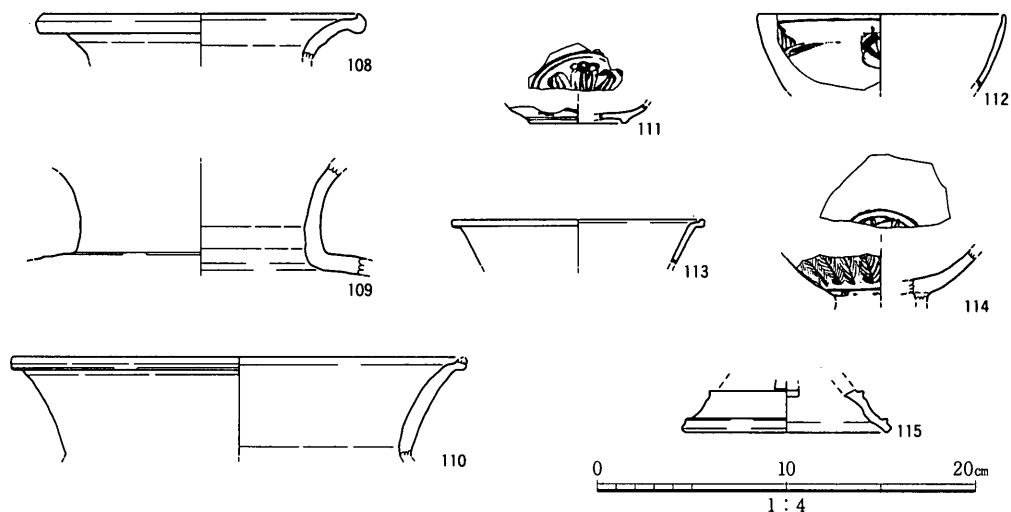


図18 第2e～3a層出土遺物
第2e層(108・109・111～114)、第3a層(110・115)

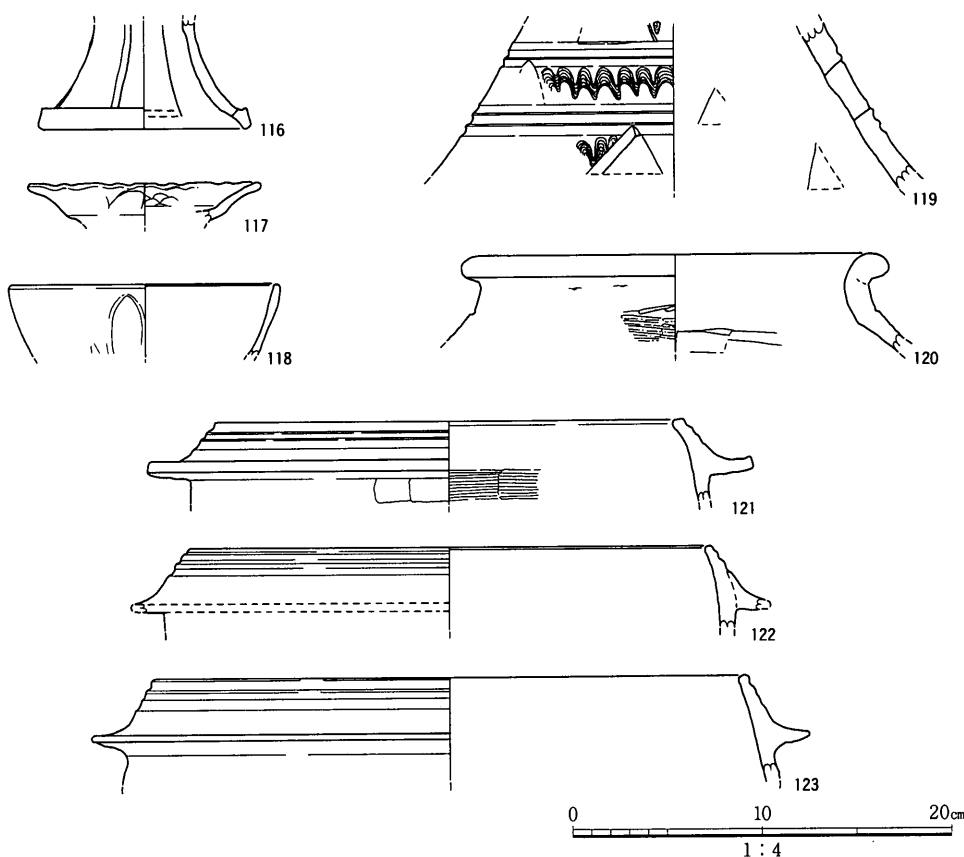


図19 第3a～3b層出土遺物
第3a層(116・119・121)、第3b層(117・118・120・122・123)

青磁は輪花皿117と碗118が出土した。117は端反で、外面に蓮弁を内面に連続する弧線を線刻で描く。16世紀のものである。118は外面蓮弁文で、14世紀に位置する。

瓦質甕120は体部をタタキ成形している。14世紀後半～15世紀前半に位置する。

土師質羽釜は122と123が出土した。122は火中して明褐色を呈する。口縁部に3条の凹線で段を表わす。123は内傾する口縁部に3条の凹線で段を表現する。いずれも15世紀前半と考えられる。

石器遺物141はサヌカイト製のクサビで、上下両端に敲打により生じた剥離痕が表裏両面に見られる。また表面右側縁には截断面も認められる。

本層の形成は16世紀と考えられる。

(第3c～3e層出土遺物については、SD301の項で述べる。)

第4a層出土遺物(図20、図版15)

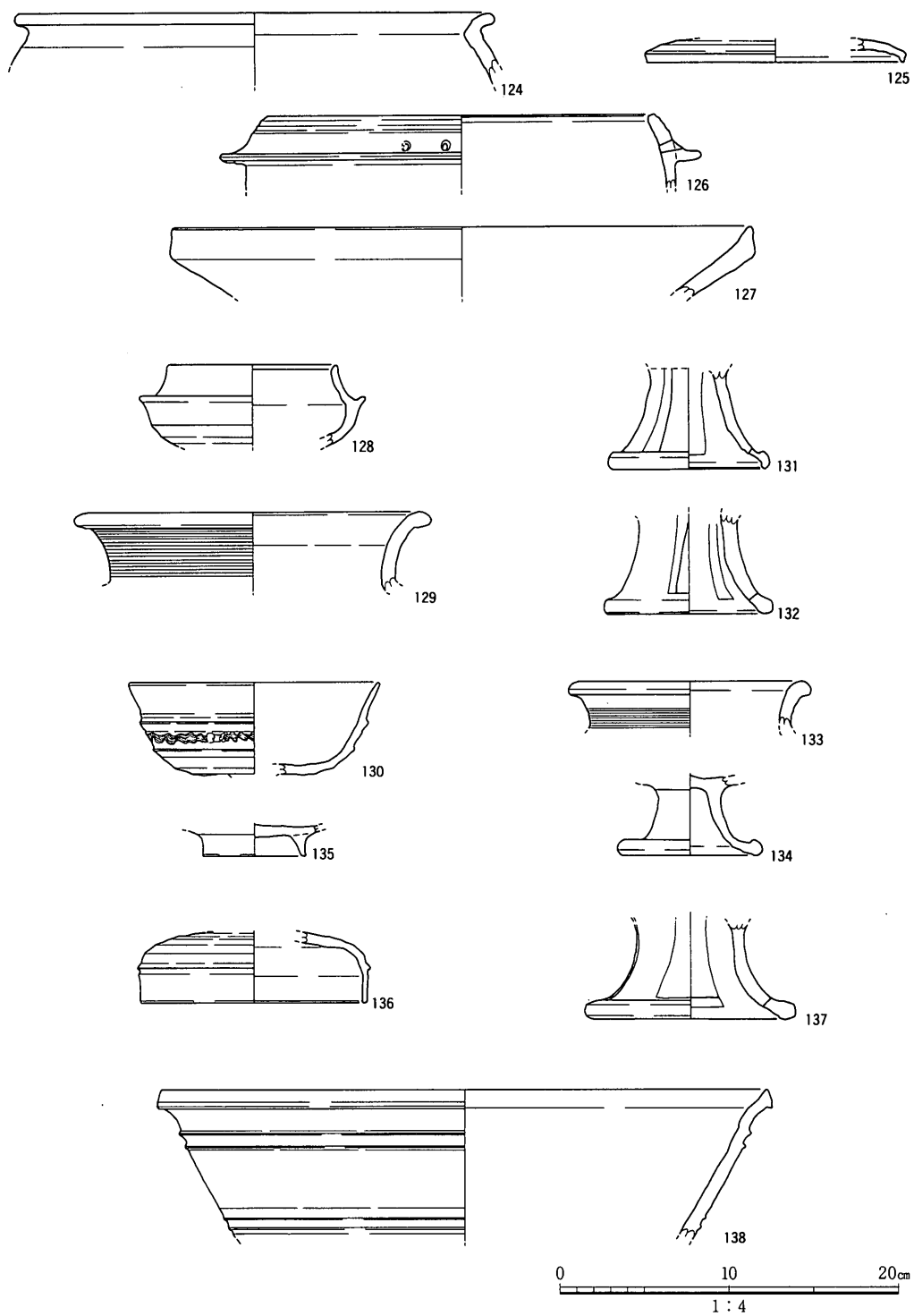


図20 第3a・4a～4b層出土遺物
 第3a層(124～127)、第4a層(128・129・131・132)、第4b層(130・133～138)

須恵器は杯身128、甕129、高杯131・132が出土した。128は断面はセピア色で、時計回りのヘラケズリを施す。ON46型式である。129は丸くおさまる口縁端部と、頸部にカキメをもつ。TK10型式と考えられる。131は長方形のスカシ孔を四方に穿つ。TK208型式である。132は長方形のスカシ孔を三方に配する。TK216型式と思われる。

第4b層出土遺物(図20・21、図版14～16)

須恵器は無蓋高杯130、甕133、高杯134・137、椀135、杯蓋136、器台138が出土した。130は杯部の破片である。ヘラケズリは時計回りで、突帯の間に波状文を施す。TK216型式である。133は口縁端部を丸くおさめ、頸部にカキメをもつ。TK10型式に属する。134は低い脚部でスカシ孔はない。TK208型式と考えられる。135は高さ1.1cmの付け高台を有する。11世紀前半のものと思われる。136は復元口径13.2cmで、時計回りのヘラケズリをていねいに施している。口縁端部は水平である。ON46型式である。137は脚部の破片で、四方に長方形スカシ孔をもつ。端部は丸くおさめられる。TK216型式である。138は脚端縁は上方へつまみ上げられ、端部は平坦におさめられる。波状文施文前のヨコハケによる条線が残る。TK73型式に位置する。

石器遺物139・140はいずれもサヌカイト製である。石鏃139は凹基無茎式、石匙140は表面の下半部が大きく欠損している。つまみ部から側縁にかけてていねいに細部調整が施されている。

各層出土瓦類(図22～25、図版20～22)

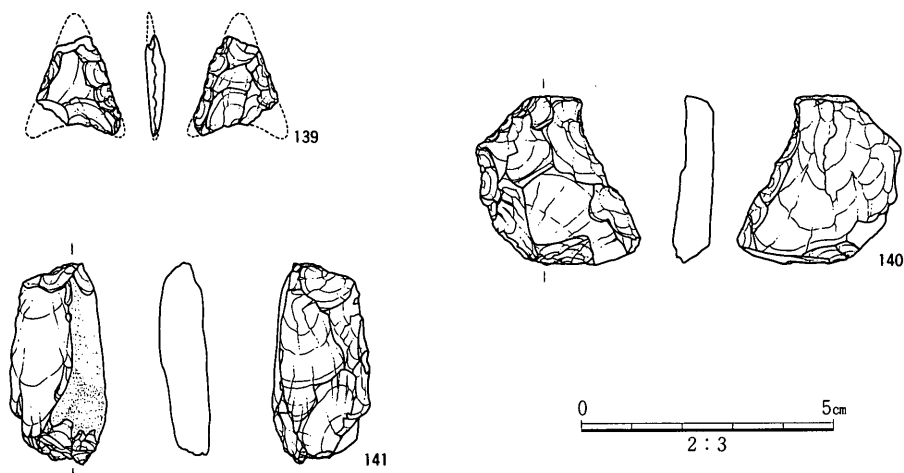


図21 石器遺物

第3b層(141)、第4b層(139・140)

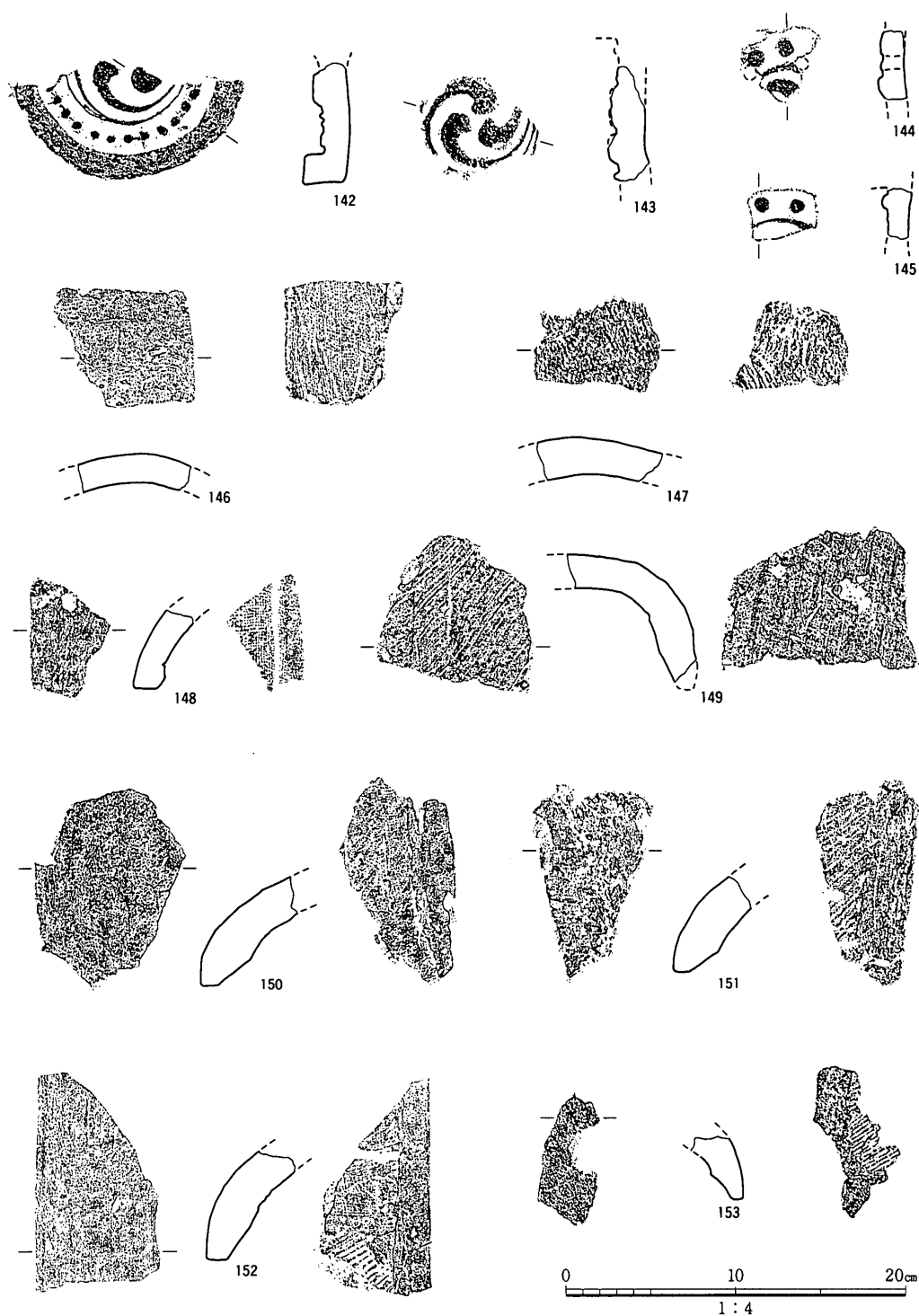


图22 軒瓦・丸瓦

第1層(149)、第2a層(144・151)、第2d層(143・145・147・153)、
第3a層(152)、第3b層(148)、第3d層(142・150)、第4c層(146)

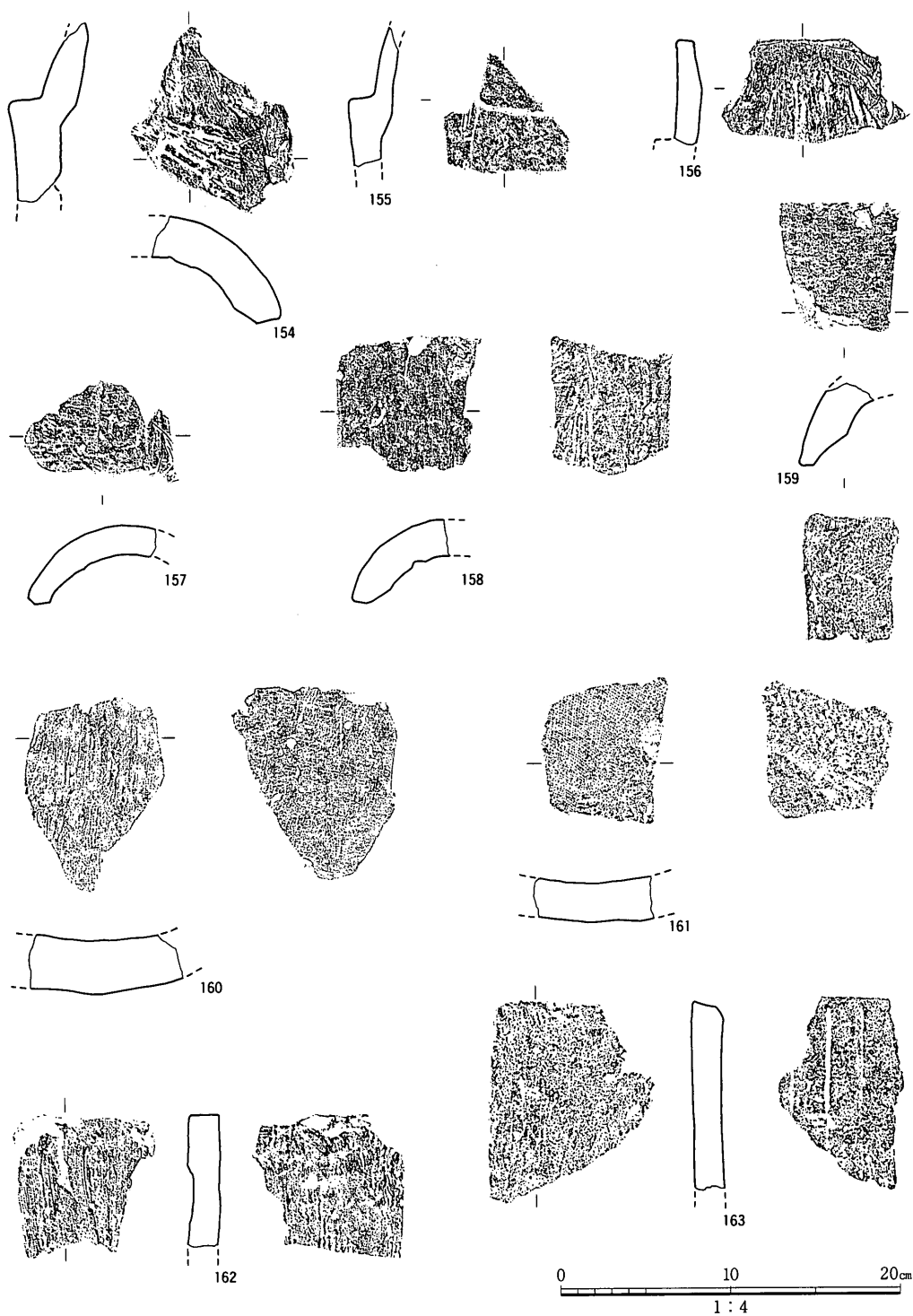


图23 丸瓦・平瓦

第1層(157)、第2d層(159・161・163)、第3c層(155・156・162)、第3d層(154・158)、第4c層(160)

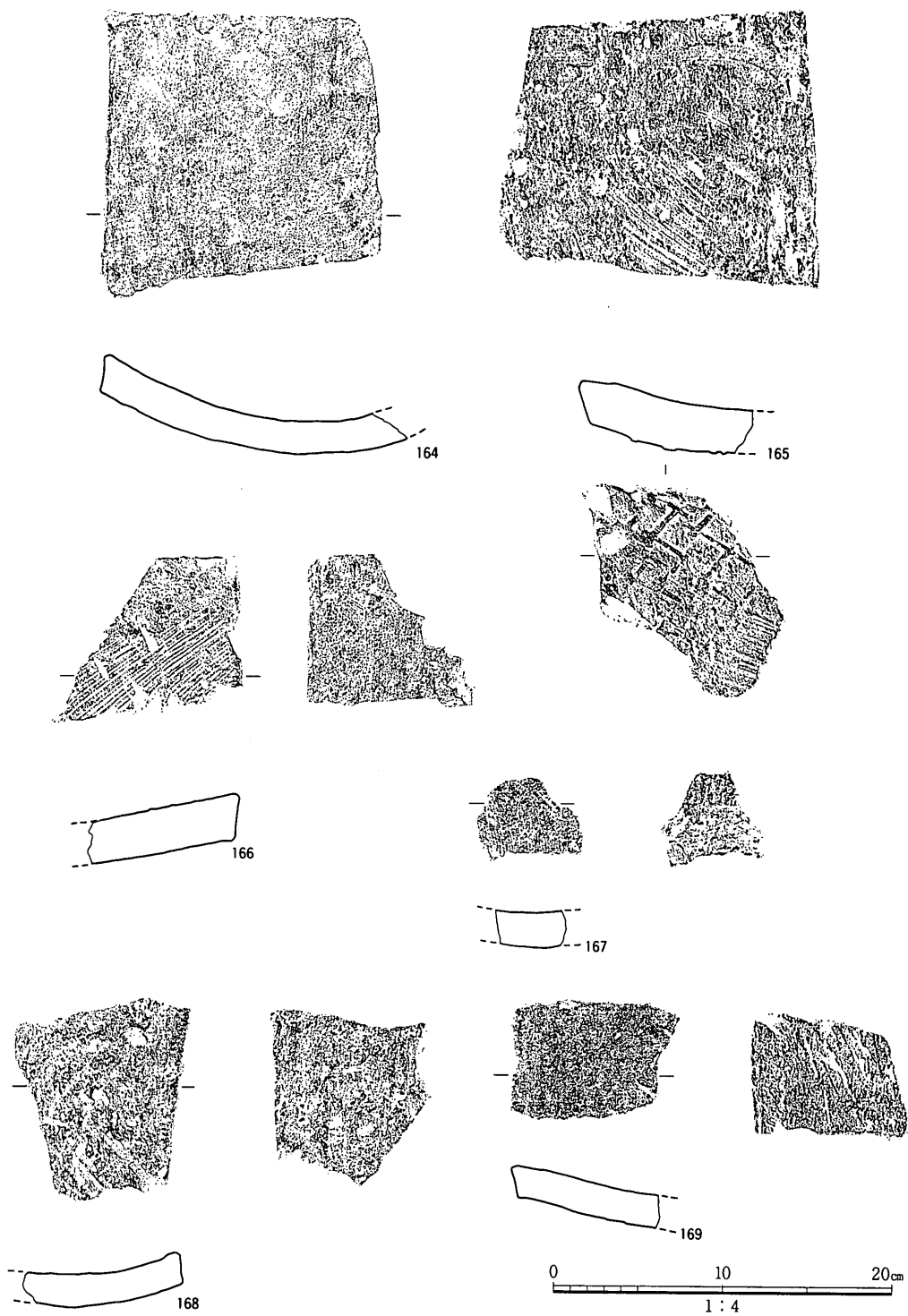


图24 平瓦

第2d層(167)、第3a層(165)、第3b層(169)、第3c層(164·166·168)

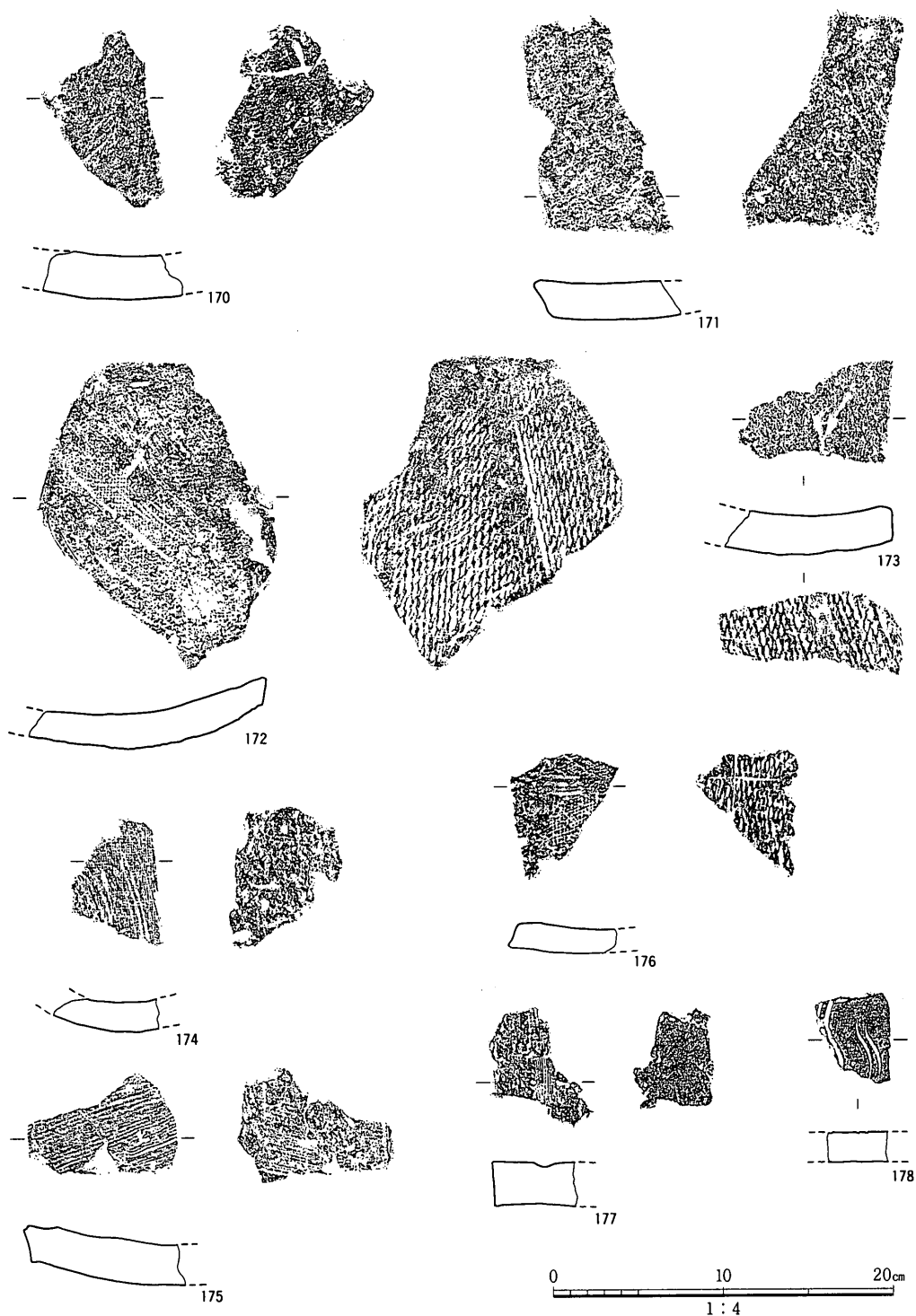


图25 平瓦

第1層(170·177)、第2c層(174)、第2d層(173)、第3c層(172·175·176)、第3d層(171)、SD201(178)

瓦類の焼成は、断わらない限り断面が灰白色で表面が燻しのため暗灰色を呈する「瓦質」である。

第1層出土瓦類

丸瓦は149と157が出土した。149は凸面は縄目タタキ後、ていねいなタテ方向のナデで、凹面にコビキAと細かい布目痕と側縁際に幅広い面取りがみられる。高温焼成で須恵質を呈する。鎌倉時代の瓦と考えられる。157は軒丸瓦の瓦当がはずれたもので、凹面に細かい布目痕がみられる。江戸時代の瓦である。

平瓦は170と177が出土した。170は凸面に格子状のものをヘラ描きし、凹面をていねいにナデ調整した中近世の瓦である。177はほとんど湾曲しない分厚いもので、凹面にタタキ原体の小口で叩いた痕跡がある。側面は凸面に対して、ほぼ直角にヘラ切りしている。近世の瓦である。

第2a層出土瓦類

軒丸瓦144は巴頭から尾への方向が左回りの三つ巴文で、珠文も大粒である。瓦当裏面に丸瓦接合用のカキヤブリを有するが、巴と珠文間に2.2cmの間隔をあけて、焼成前に直径0.8cmの円形に穿孔している。近世初頭の瓦と思われる。

丸瓦151は凹面にコビキAと細かい布目痕、側縁に幅広い面取りがみられる。

第2c層出土瓦類

平瓦174は凸面に長石・石英・チャートからなる離れ砂が付着し、凹面に細かい布目痕がある。古代の瓦である

第2d層出土瓦類

軒丸瓦は143と145が出土した。143は左回り三つ巴文で、長い巴尾をもつ。瓦質を呈するが、高温焼成である。中世の瓦である。145は左回り三つ巴文と思われ、細い巴尾と大粒の珠文がみられる。近世初頭の瓦である。

丸瓦は147・153・159が出土した。147は凹面に粗い離れ砂が付着する。153は凹面にコビキAと側縁の面取りがある。159は凹面に布目痕と深い面取りがある。いずれも中世の瓦である。

平瓦は161・163・167・173が出土した。161は砂を多く含む胎土で、凸面に縄目タタキ痕と長石・石英・チャートの粗粒の離れ砂がみられ、凹面に布目痕がある。須恵質を呈し、中世以前の瓦である。163は凸面は長石・石英の粗粒砂からなる離れ砂が付着し、凹面には布目痕がみられる。凹面側端縁を軽く面取りする。中世の瓦である。167は凸面に縄目タタ

キ痕、凹面に布目痕がみられ、凹凸両面に細かい離れ砂が付着する。須恵質に焼成されている。古代の瓦である。173は凸面に縄目タタキ痕と長石・石英の離れ砂が、凹面に布目痕がみられる。古代の瓦である。

第3a層出土瓦類

丸瓦152は凸面に幅1cmと密なタテ方向のナデがみられ、凹面にコビキAと細かい布目痕、幅広い側縁の面取り、吊り紐痕がある。中世の瓦である。

平瓦165は凸面に大柄な正格子のタタキ痕があり、凹凸両面に長石・石英・雲母からなる離れ砂が付着する。中世以前の瓦である。

第3b層出土瓦類

丸瓦148は凹面に布目痕と側縁の軽い面取りをもつ。中世の瓦である。

平瓦169はほとんど湾曲をもたず、凸面は未調整で煤が付着し、凹面は平滑である。中世の瓦である。

第3c層出土瓦類

丸瓦は155と156が出土した。155は玉縁接合部の破片で、玉縁部凹面から丸瓦部凹面の側縁際に加えられた深い面取りのため、丸瓦部凹面は浅い箱形を呈する。鎌倉時代のものと思われる。156は玉縁部のみの破片で、凹面の三方に深い面取りがみられる。中世の瓦である。

平瓦は162・164・166・168・172・175・176が出土した。162は凸面に縄目タタキ痕が、凹面に布目痕が見られる。古代の瓦である。164は凸面はハケ状の工具でナナメ方向のナデで、凹面は付着した離れ砂をていねいなタテ方向のナデで、沈めている。室町時代以降の瓦である。166はほとんど湾曲をもたず、凸面は平滑、凹面にハケ調整が見られる中世の瓦である。168は凸面にチャートを含む離れ砂、凹面に凸面台の縁と布目の痕跡がみえる。中世の瓦である。172は凸面に縄目タタキ痕が、凹面に粗い布目痕がみられる。高温で焼成している。古代の瓦である。175は凸面に縄目タタキ痕が、凹面に布目痕がある。断面は外側が白く、内側が黒い、いわゆるアンコ状になっている。古代の瓦である。176は凹面台で成形したようで、側面のヘラ切りに伴い粘土カスが凸面側に飛出している。凸面は未調整、凹面はハケ調整されている。中世の瓦である。

第3d層出土瓦類

軒丸瓦142は左回りの三つ巴文で、巴頭はトビロを呈し、巴尾は長く4分の3周して、次の巴尾に連結する。復元珠文数は約28個を数える。周縁部は高く歪みも少なく、瓦当厚は

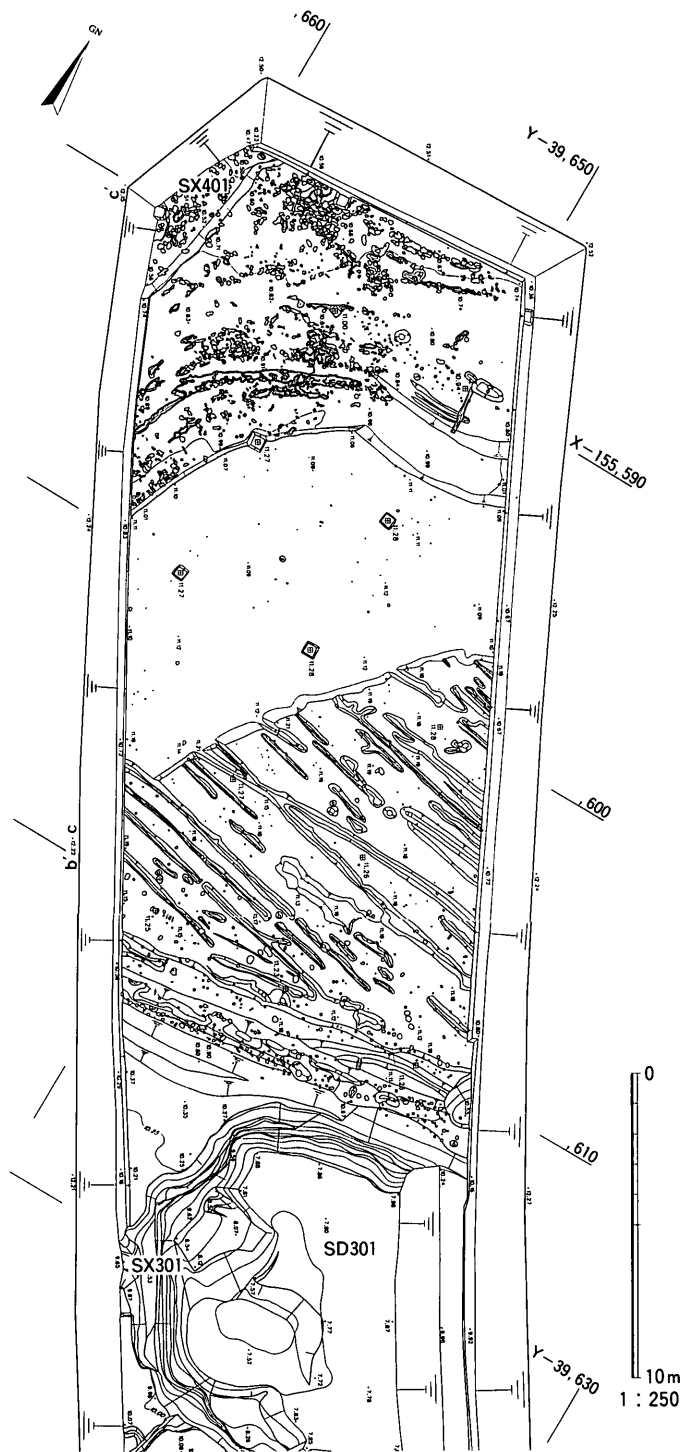


图26 地山上面遺構平面図(1)

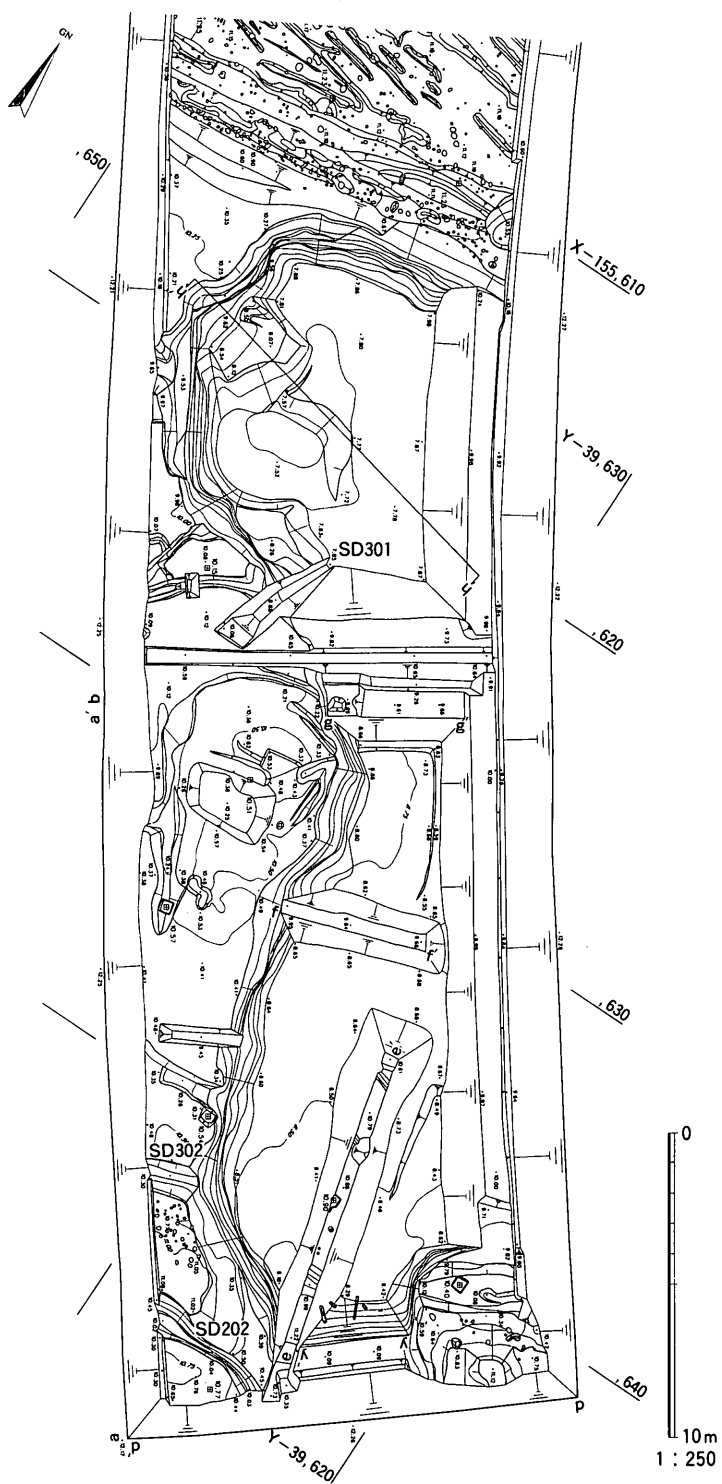


图27 地山上面遺構平面图(2)

大きい。瓦当裏面周縁に范に押し込んだ際の凹みがある。鎌倉時代の瓦と思われる。

丸瓦は150・154・158が出土した。150は凸面にタテ方向のていねいなナデ、凹面にコビキAと細かい布目痕と、幅が広く深い側縁の面取りがみられ、高温焼成の瓦質を呈する。154は丸瓦部凸面の縄目タタキはスリ消され、玉縁部凸面にはヨコナデがみられる。凹面はコビキAと布目痕、側縁の深い面取りがある。玉縁部が長いことから、鎌倉時代の瓦と考えられる。158は凸面はていねいなタテ方向のナデ調整、凹面は布の重ね目をもつ細かい布目痕が見られる。高温焼成で須恵質を呈する。鎌倉時代の瓦と思われる。

平瓦171は凹面をていねいにナデ調整した中世の瓦である。

第4c層出土瓦類

丸瓦146は凹面に布目痕があり、須恵質である。奈良時代以前の瓦である。

平瓦160は広端部に向って厚みを増すことから、軒平瓦の一部と考えられる。凹凸両面とも、タテ方向のヘラケズリで調整する。須恵質で、奈良時代以前の瓦である。

以上のように古代から近世初頭にいたる瓦が包含層から出土している。近辺には古代寺院として瓜破廃寺[大阪市文化財協会1992b]と成本廃寺[大阪市文化財協会2000b]が知られ、中世寺院として瓜破東3丁目(字「光流寺」)のUR83-3次調査[大阪市文化財協会2000b]があるが、いずれも客土として運搬するには遠隔でありすぎる。本書図44を見ると、馬池の西に接して字「寺池」があり、近辺に古代以来の寺院が存在した可能性が考えられる。

2) 遺構とその遺物

i) 鎌倉時代

SX401(図28) 北区北西隅で検出した南北6m、東西2m以上の耕作地と思われる落込みで、基底面に耕作痕跡や踏込みが見られる。この落込みに分布する第4c・d層は奈良時代までの遺物しか出土しなかったが、周辺の状況から長原4層相当の遺構の可能性が高い。

ii) 室町時代

SD301(図29～34、図版6・7) 人工的に掘られた灌漑用水路で、地山を深さ2.5m以上掘込んで作られている。近世馬池北堤の下層でポト

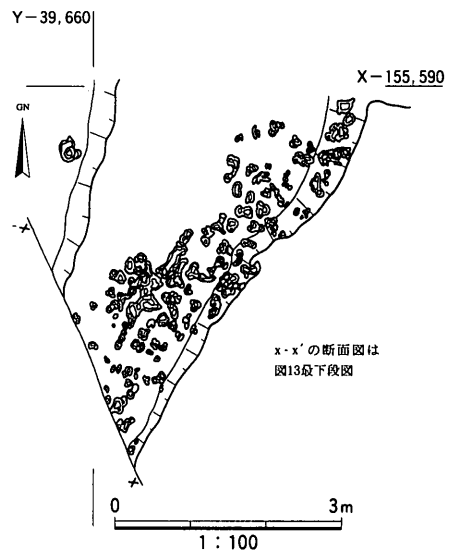


図28 SX401実測図

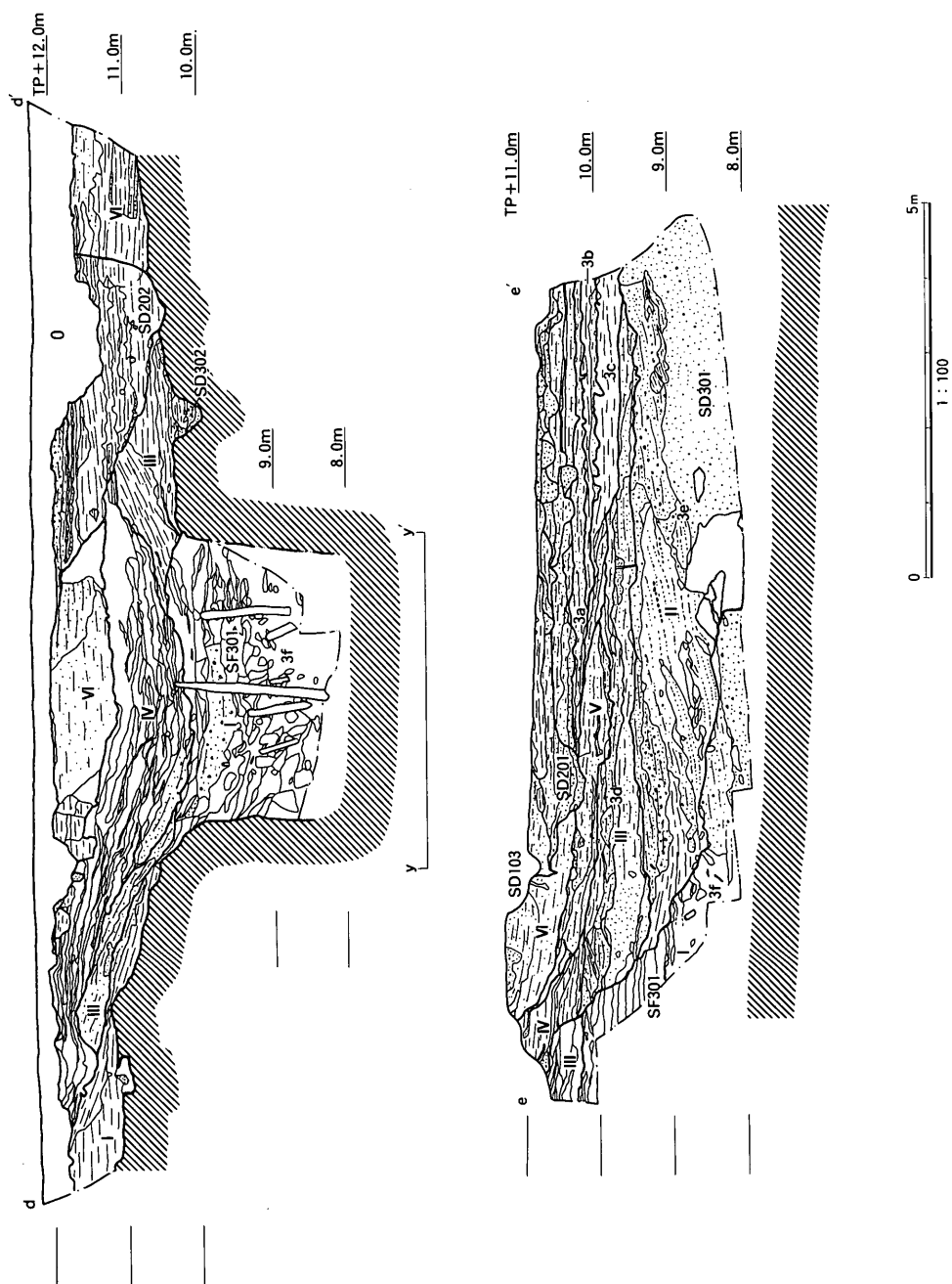


图29 SD301 · SF301断面图

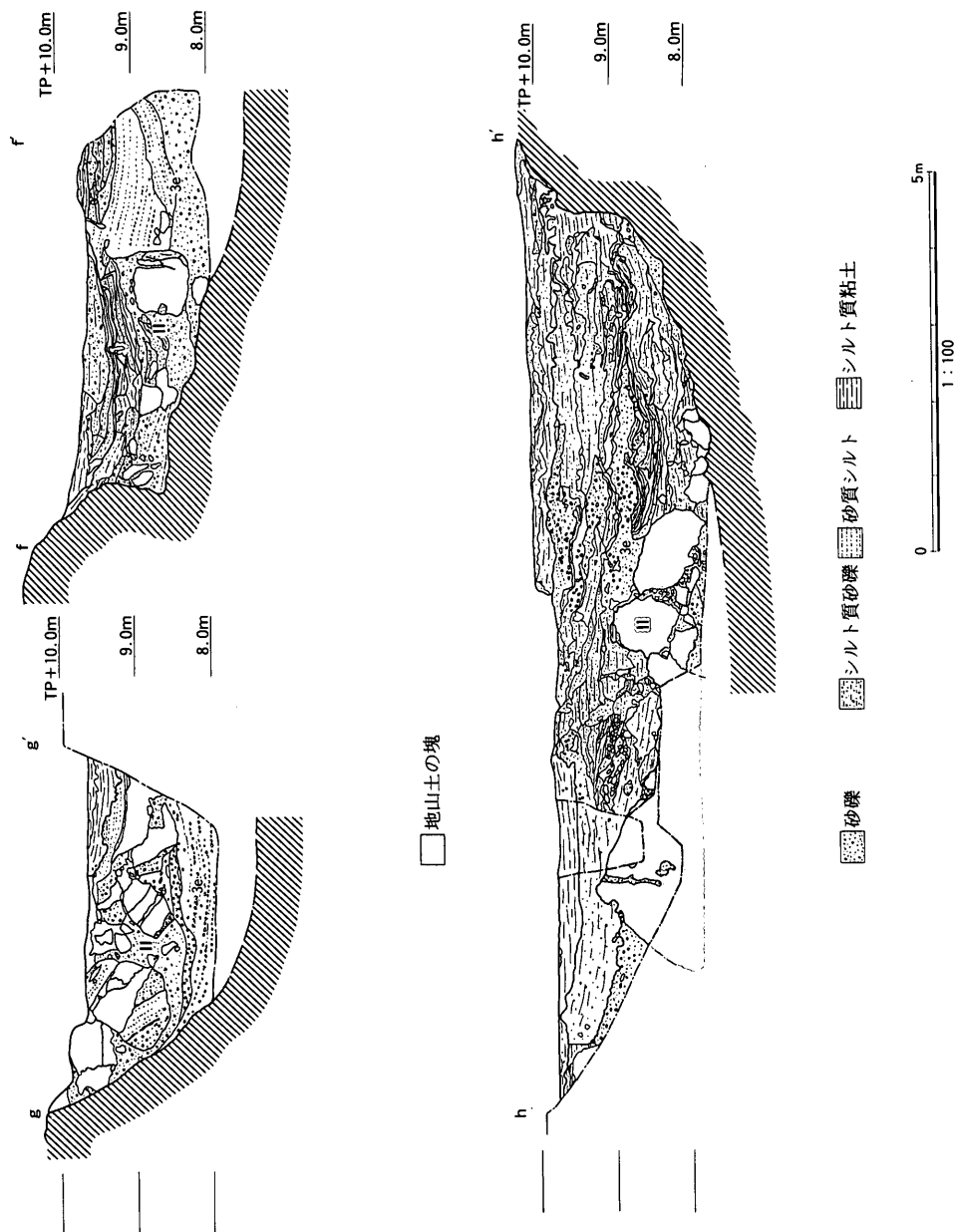


図30 SD301断面図

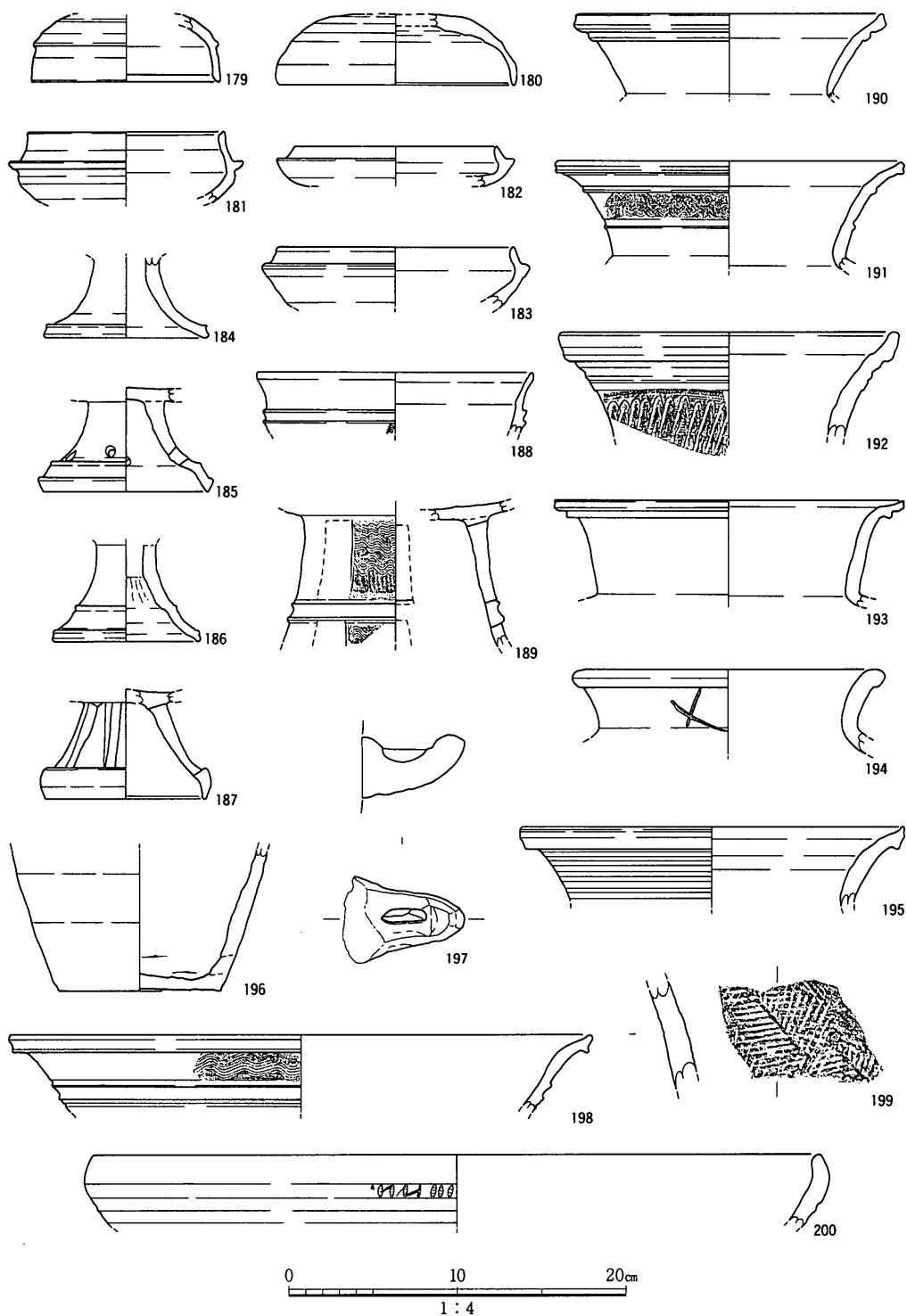


圖31 SD301出土須惠器・土師器

第3c層(180・181・183・184・186・188・192・195)、第3d層(179・182・185・187・189・191・193・194・196~200)

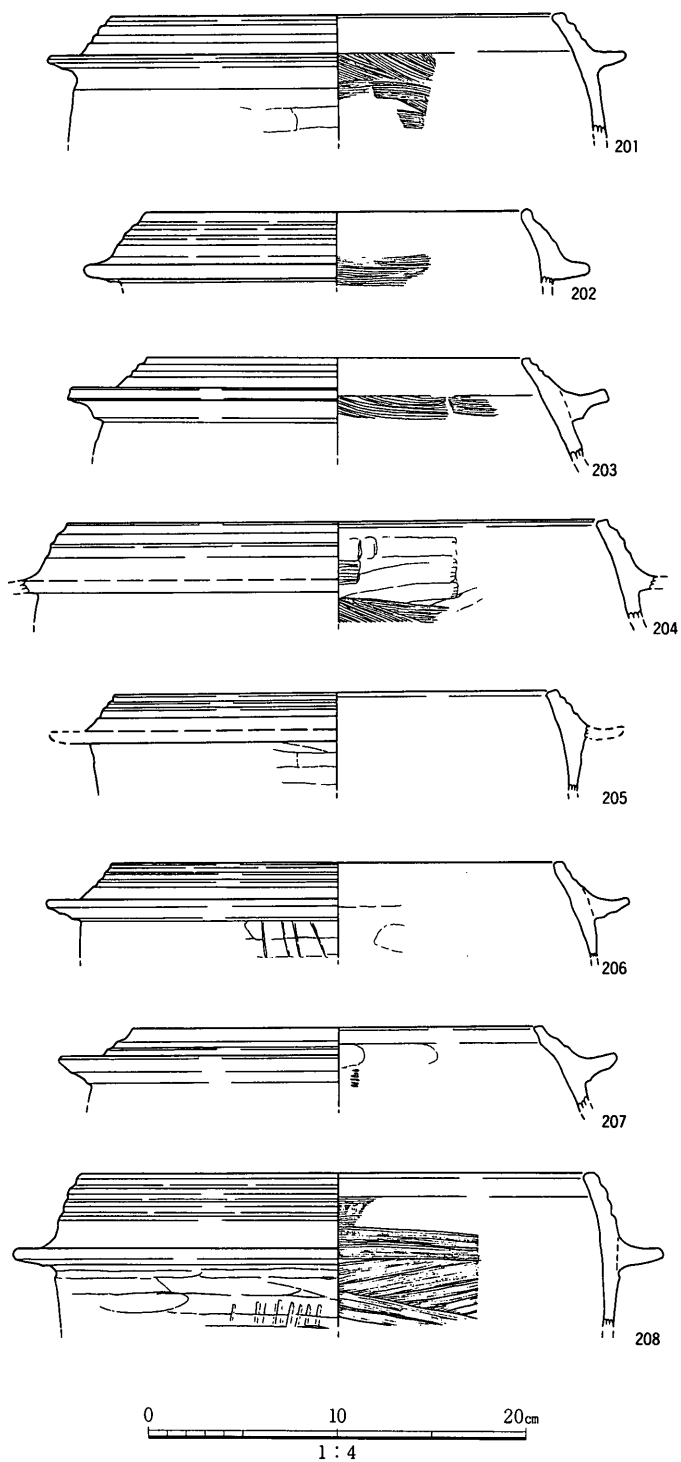


図32 SD301出土羽釜

第3c層(202・203・205・206・208)、第3d層(201・204・207) 201は土師質、それ以外は瓦質

ル・ネック状に幅3.7mと細くなるほかは、幅10m以上に広がっている。この狭くなった部分は樋口と考えられる。この部分に閉塞用の堤SF301を構築し、水流を止めてから水路全域を埋めている。埋土には5世紀代の須恵器など古いものが多いが、瓦質羽釜が示す15世紀前半頃の廃棄と思われる。掘削は底面直上の第3e層で検出された瓦器碗209の13世紀頃の可能性がある。当水路を埋める過程は、次の第Ⅰ～Ⅵ期が考えられる。

第Ⅰ期 SF301を構築する。

第Ⅱ期 SF301の北側に地山土を東・西両岸から掘削したりなどして、層厚1.5mの土砂を入れる。

第Ⅲ期 SF301の両脇と第Ⅱ期の土砂上に、層厚1mほどの新たな土砂を入れる。埋土から15世紀頃の瓦質羽釜が検出された。この土砂によってSD302は埋められる。

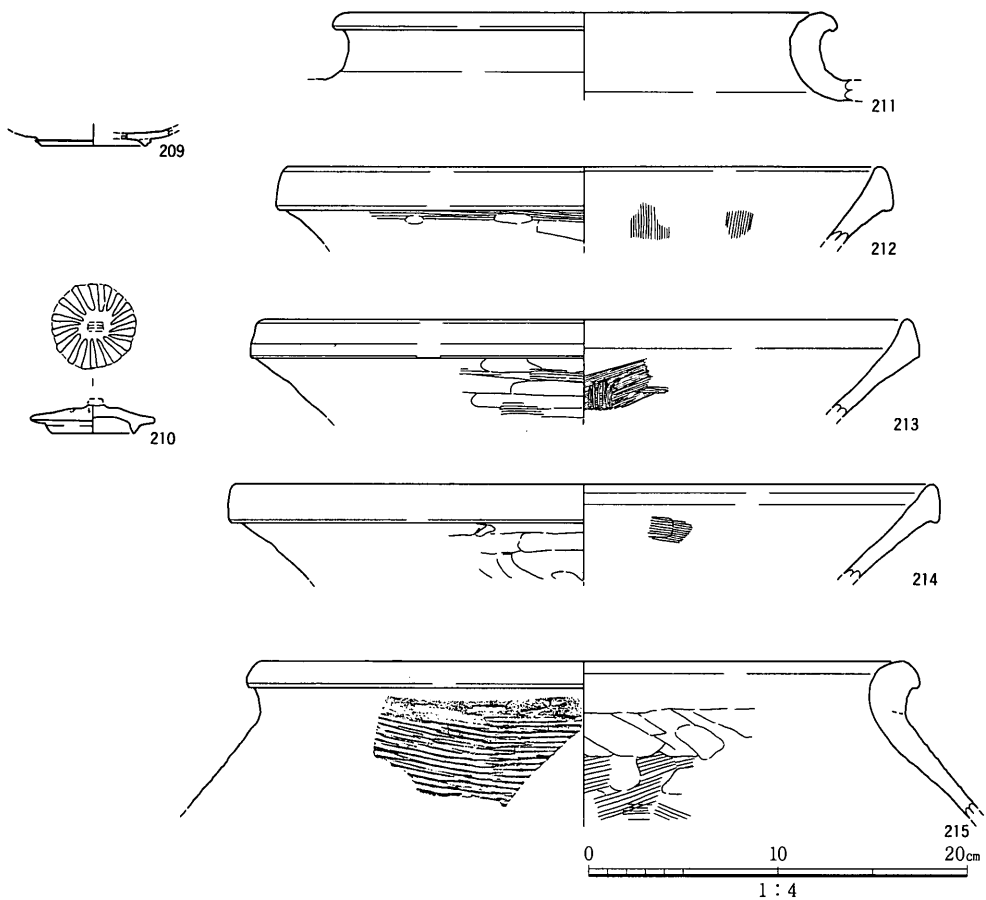


図33 SD301出土遺物

第3c層(210・212・214・215)、第3d層(211・213)、第3e層(209)

第Ⅳ期 SF301直上の凹地に厚さ7cmほどの薄層を密に積んで、谷間を埋める。

第Ⅴ期 SF301の北面に厚さ数十cmの土を入れ、第3c層を作土とする水田耕作を開始する。

第Ⅵ期 第Ⅳ期の土砂上や地山上に厚さ1m前後の盛土を施し、馬池北堤を築く。堤上に溝SD202を掘る。

SD301出土の遺物

上下3層(第3c・3d・3e層)に分けられる。

第3c層出土遺物

須恵器は杯蓋180、杯身181・183、高杯184・186、無蓋高杯188、甕192・195が出土した。180は復元口径14.0cmで、体部・天井部の境の稜線は失われている。TK43型式に属する。181は外面がセピア色で、ヘラケズリは時計回りである。TK208型式である。183は酸化炎焼成で、橙色を呈する。関東系土器とみられTK43型式併行であろう。184は脚部の破片で、ON46型式と思われる。186は脚部の破片で、断面はセピア色を呈する。TK208型式と思われる。188は杯部に2条の突帯と波状文をもつ。TK23型式に属する。192は断面セピア色で、凹線の下方に縦長の波状文を施す。TK47型式である。195は頸部にカキメが見られる。TK10型式である。

瓦質土器は羽釜202・203・205・206・208、播鉢212・214、甕215が出土した。202は口縁部外面やや下方に2段の低い段を作る。15世紀後半である。203は口縁部外面は3本の凹線で3つの段を表現する。15世紀中葉に位置する。205は口縁部外面は3本の凹線で3つの段を作る。15世紀中葉である。206は炭素を失い全体に灰白色を呈するが、口縁部外面に弱い3本の凹線で、3つの段を表わす。15世紀中葉である。208は口縁部外面は3本の凹線で3つの段を表現する。15世紀中葉に位置する。212は口縁部断面は三角形で、内外ともていねいなナデ調整が施されるが、外面の口縁部と体部との境にハケ調整が残る。内面は原体7本の櫛で、2.5cmの間隔をあけてスリメが施される。15世紀前半とみ

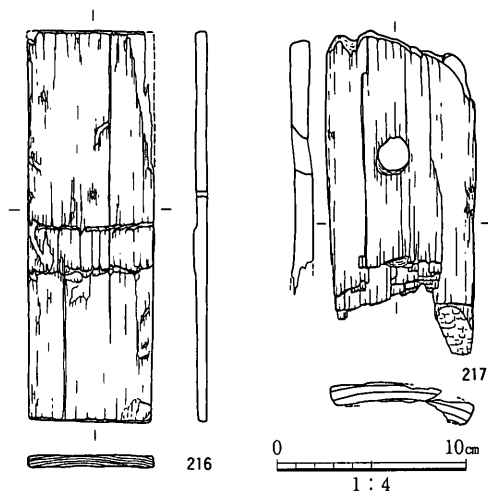


図34 SD301出土木製品
第3e層(216・217)

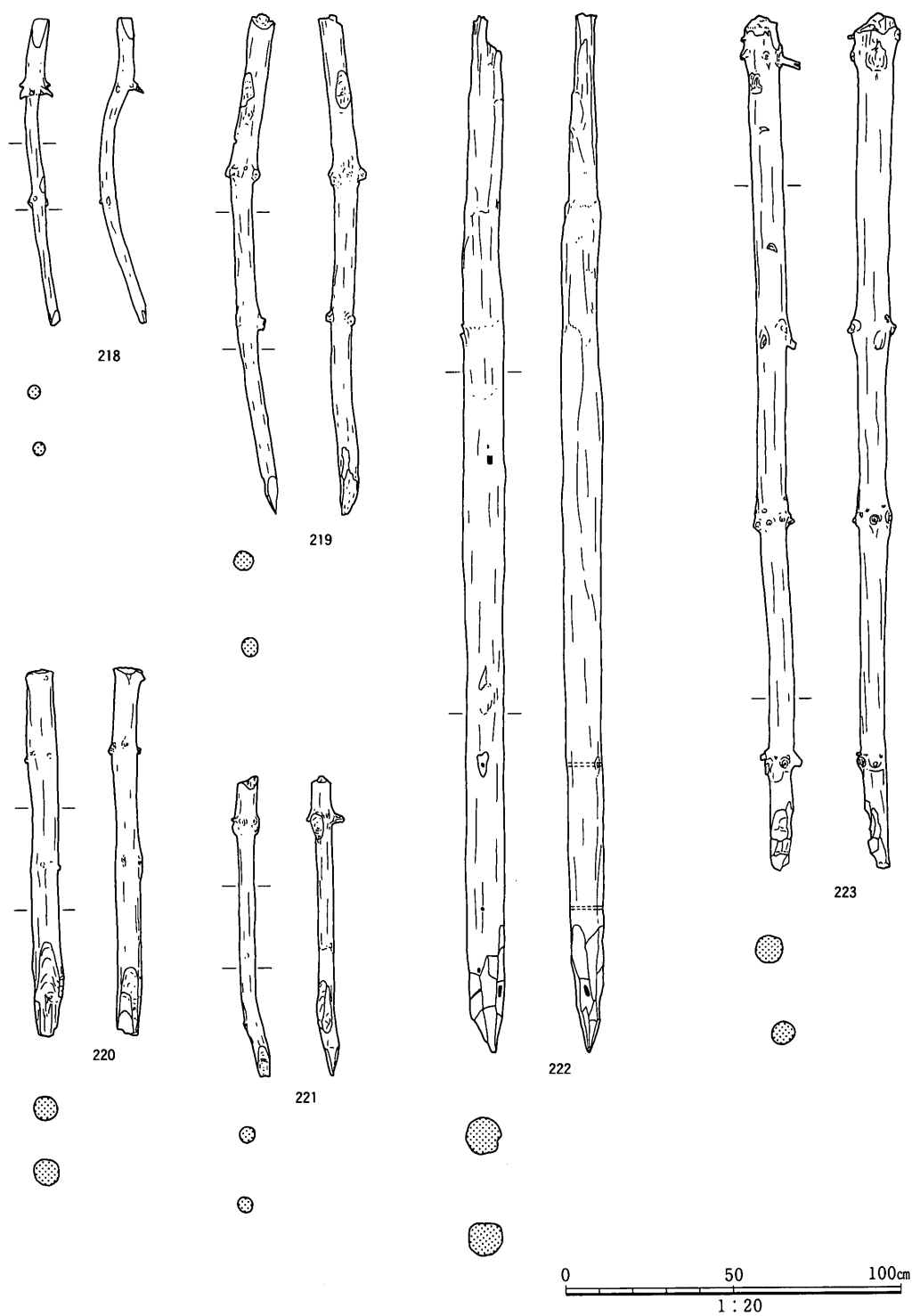


図35 SF301に伴う杭

られる。214は復元口径36.8cmで、口縁部断面は三角形を呈し、内外面を細かいハケ調整後、ヨコナデする。15世紀前半のものと思われる。215は復元口径34.0cmで、短い頸部をもつ。外面はタタキ痕、内面はハケ調整後、ナデを施す。15世紀前半である。

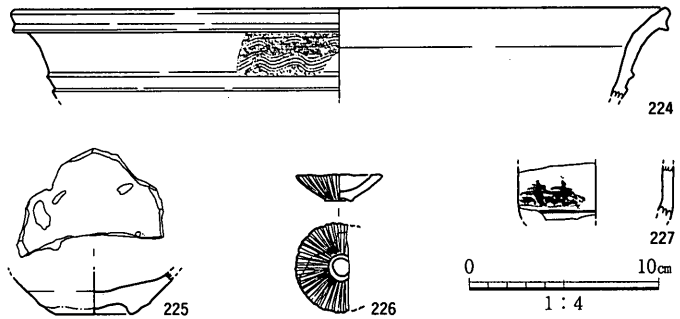


図36 SD201出土遺物

青白磁合子蓋210は中国製で、つまみの周囲に十六弁の菊花を浮文で表現し、上面のみ施釉する。13世紀後半と思われる。

第3d層出土遺物

須恵器は杯蓋179、杯身182、高杯185・187、器台189、甕190・191・193・194・198～200、壺196が出土した。179は体部・天井部境の稜線は突出し、天井部は高い。TK47型式である。182は復元口径12.2cmで、TK209型式と思われる。185は脚部の破片で、円形のスカシ孔を4つ不等間隔で配する。TK208型式である。187は脚部の破片で、三方に長方形のスカシ孔をもつ。TK47型式である。189は脚部の破片で、長方形のスカシ孔は五方向にあいていると思われる。原体6本による波状文は不規則な施文である。ON46型式に位置する。190は口縁部直下に幅広い突帯を付ける。MT15型式に属する。191は全体にセピア色を呈し、突帯間に波状文を施す。TK208型式である。193は口縁部下に高い突帯をもつ。TK216型式と考えられる。194は口縁端部を丸くおさめ、頸部に「×」印のヘラ記号をもつ。TK10型式と思われる。196は平底の壺の体部破片で、平城宮Ⅲの壺Nに底部が似ている。198は断面がセピア色で、突帯間に波状文を施す。ON46型式である。199は焼成温度が低く、第二酸化鉄のため明褐色を呈する。外面に綾杉文のタタキ痕、内面にていねいなナデを施されている。200は内傾する口縁部をもち、外面に原体3本の櫛でキザミメを施している。TK47型式である。

土師器把手197は甑か鍋に伴うものと考えられ、上部中央にヘラによる切込みをもつ。TK216～208型式併行とみられる[京嶋覚1992]。

土師質羽釜201は外面に炭素が吸着している。口縁部は凹線3本によって3つの段を作っている。15世紀前半と思われる。



写真1 SD302断面

元口径34.0cmで、口縁部断面は三角形を呈する。内外面ハケ調整後、ナデを加え、内面には疎らにスリメを施す。15世紀前半に位置する。

第3e層出土遺物

瓦器碗209はやや退化した高台をもつ。13世紀に位置する。

木製板材216は桶の材と思われ、板目取りされている。タガの当たった部分が痩せないで、帯状に高く残っている。中央に釘穴がある。

木製部材217は断面が丸く弧を描くように板目取りされている。上下が欠損しているが、残存中央部近くに直径1.6cmの円形孔が穿たれている。

SD302(写真1) 幅0.6~2.0m、深さ0.5~1.0m、長さ5.0m以上の溝で、第Ⅲ期に埋められている。馬池が満水になった際の水抜きのために設けられた溝と思われる。

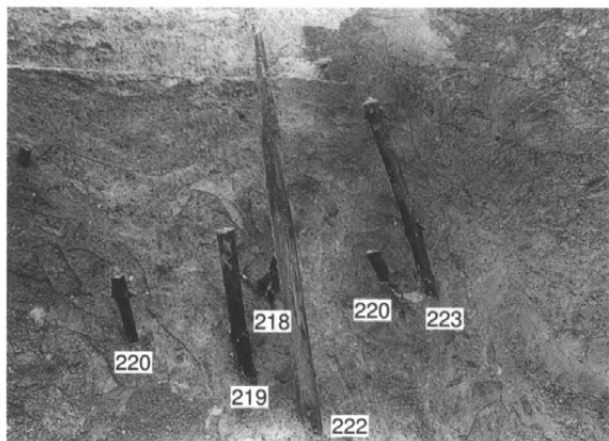


写真2 SF301杭出土状況

瓦質土器は羽釜204・207、甕211、播鉢213が出土した。204は口縁部は凹線3本によって3つの段を作る。15世紀前半である。207は口縁部外面やや下方に2本の凹線で2段を表現する。15世紀前半に位置する。211は表面の炭素を失っている。口縁部から体部にかけての断面はU字形を呈する。14世紀後半である。213は復

SF301(図29・35、写真2・3)

上辺の幅1.2m、下辺の幅3.5m以上の断面形が台形を呈する、SD301を閉塞するために第3f層で構築された堤である。北面には土留めのために、6本の杭が打設されていた。

杭218~223はSF301の北面に

打込まれた杭で、構築時の土留めのためのものと考えられる。SD301溝底部に刺さっていたのは222・223のみで、これらは支持杭と考えられ、ほかは補助用に用いられた。樹種は218～221・223のマツ属複維管束亜属(*Pinus subgen. Diploxylon* sp.)いわゆる二葉松類マツ科で、222のみヒノキ(*Chamaecyparis obtusa*)ヒノキ科であった。

218は全長89cmで曲った枝を用い、杭先の面取りは1面である。219は全長146cmで、杭先の面取りは3面である。220は全長108cmで、杭先の面取りは2面である。221は全長89cmで、杭先の面取りは2面である。223は全長250cmで、杭先の面取りは一方向から3回の切削で形成されている。

唯一ヒノキ材である222は、心材(赤身)を残すが、辺材(白太)は失われていた。遺存しているもっとも外側の年輪はA.D. 536か537年だが、伐採年代は+100～200年で考えるべきであろう。すなわち飛鳥から奈良時代にかけての伐採と考えられる。残存長304cm、最大径13cmで、杭先の面取りは6面の多面体ある。杭の先端から44cmと85cmの位置に、直径1cmで貫通した穴が見られ、先端から17cmと24cmと174cmの位置に貫通しない縦3cm、横1cmと直径1cmと縦2cm、横1cmの長方形や円形の穴が3個あり、これらは木舞や胴縁を差込んだ穴と思われることから、古代建築の柱材を転用して15世紀に杭として用いられたと思われる。

これらの杭はSF301構築時に横矢板と組合わせて壁面を養生したものと思われる。補助杭218・220のようにSF301の中途に打込まれたものは、中腹よりも上の壁面を支えたものであろうが、横矢板は除去されたのか、残っていなかった。

iii) 近世～近代

SD201(図36～38・41、図版4・16・18・19・22、写真1)

長原2層段階で、馬池堤の北裾に設けられた東西溝で、幅1.0m、深さ0.6mを測り、方位は東で北に約10度振る。

平瓦178は凹面に原体が2本の櫛でカキヤブリを入れている

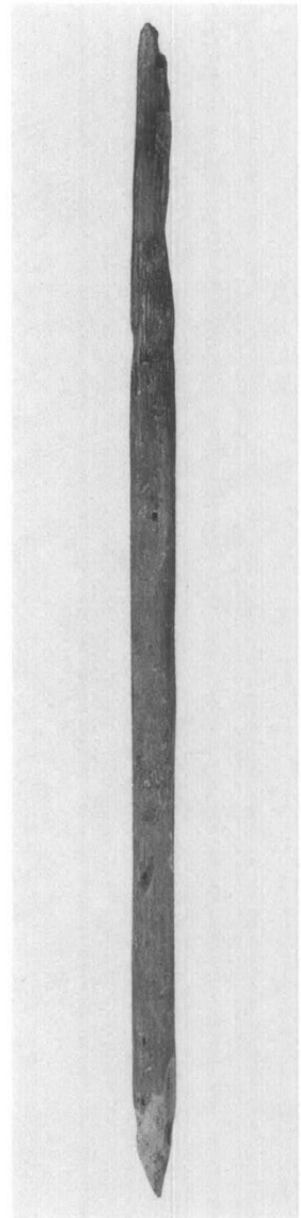


写真3 檜材の杭222
(縮尺1/20)

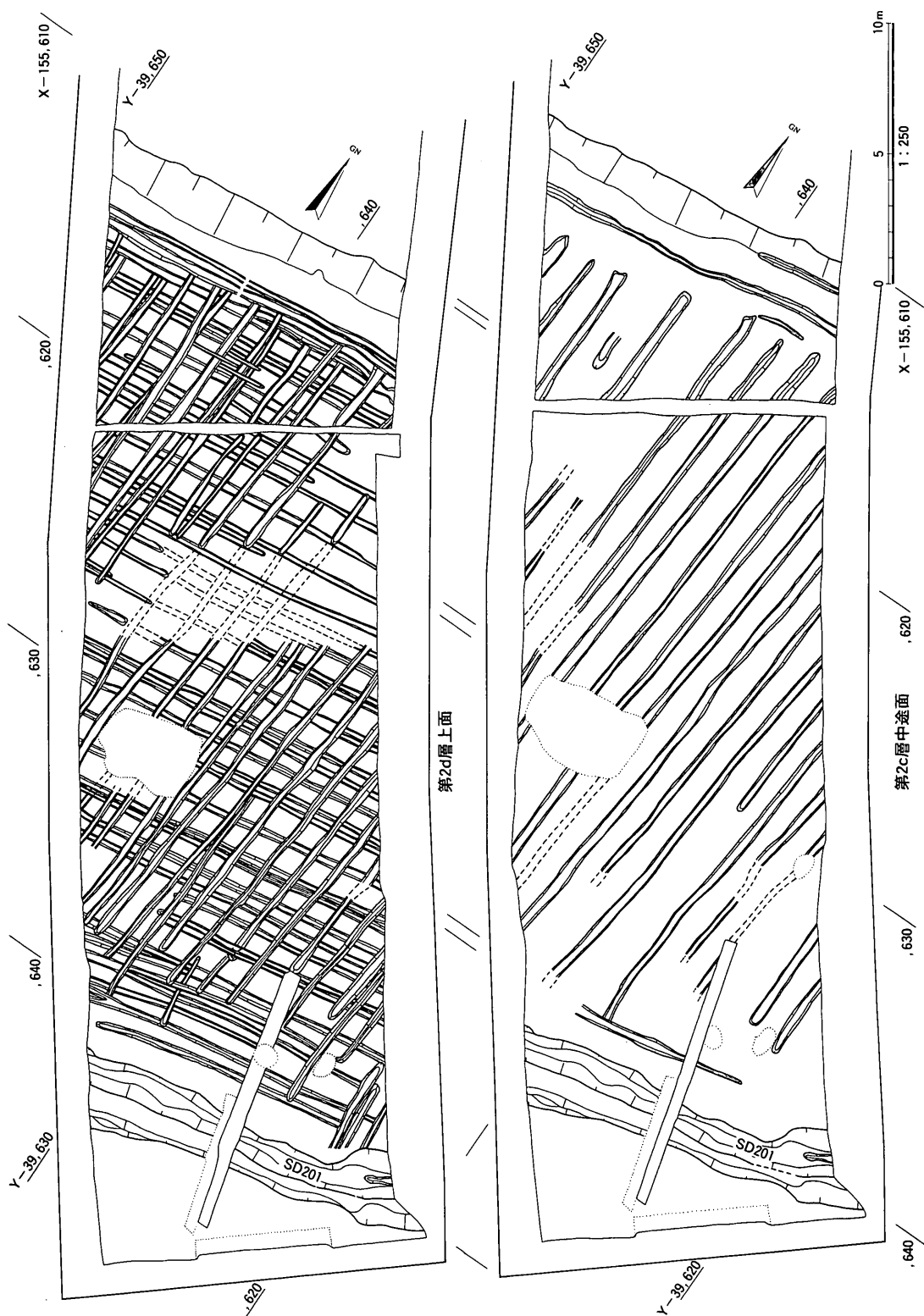


図37 近世の畑平面図

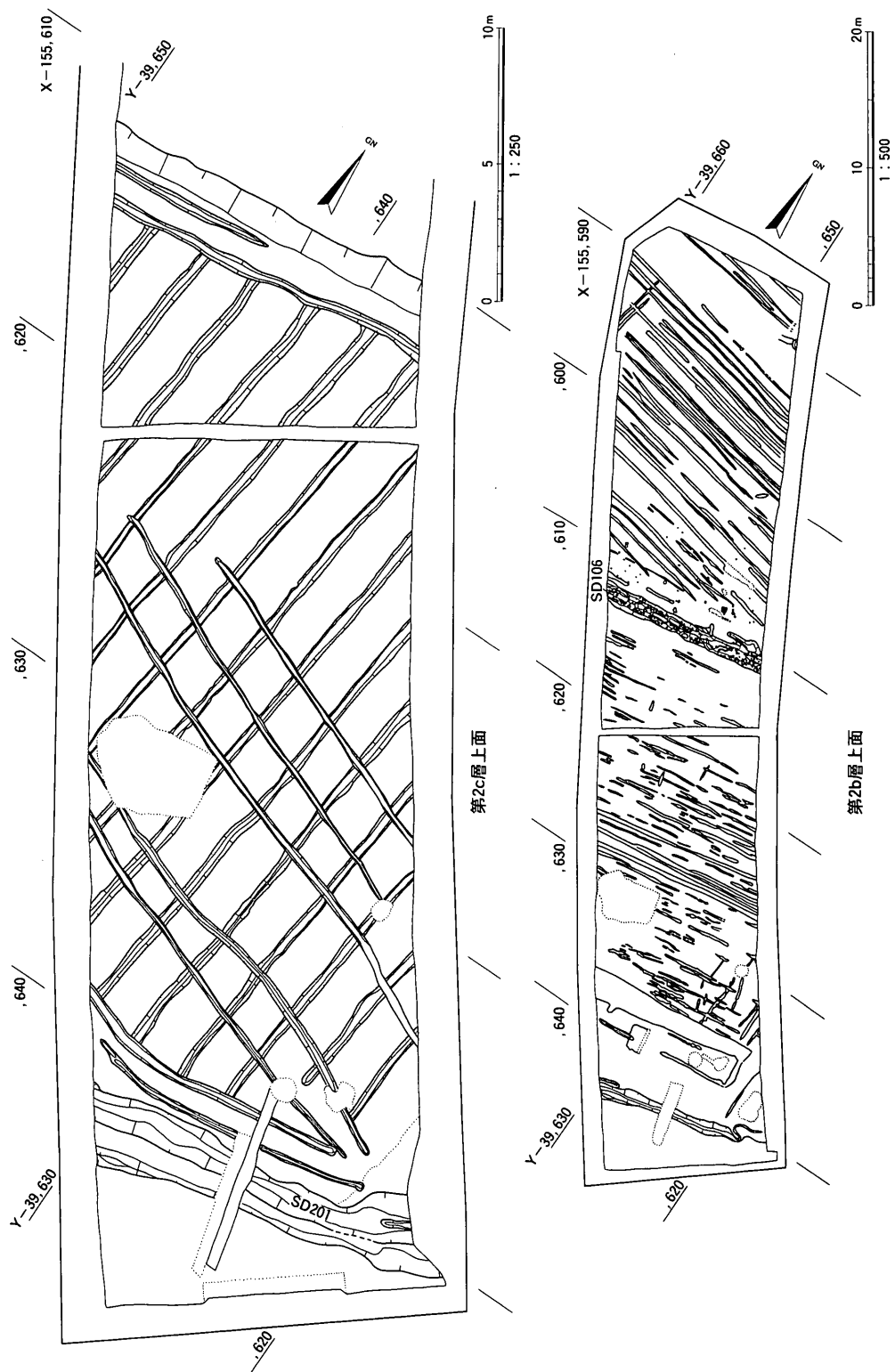


図38 近世の畑と犁溝痕跡

る。近世の瓦である。

須恵器甕224は口縁端部を丸くおさめ、突帯間に波状文を描く。ON46型式である。

唐津焼皿225は底部外面は碁笥底、見込みに胎土目が見られる。Ⅱ期だが、豊臣後期によくあるタイプである。肥前磁器は手塩皿226と筒形碗227が出土した。226は型打ち成形で放射線状に稜線を付け、口縁端部は水平に切る。Ⅲ期と考えられる。227は圈線の上に遠山を描く。Ⅱ期のものである。

237は胴部径16.0cm、同厚さ1.5～2.0cm、玉縁端部径11.5cm、全長28.4cmの瓦質土管である。最上部1.5cmが円錐形を呈する砲弾形の木型頂部に、幅4.0cmの粘土紐を巻き、粘土紐の下半を木型との間に巻込むようにして粘土板を木型に巻付け成形した。胴端部は別の土管玉縁部との擦り合わせのため、幅2.5cm、深さ1.0cmの時計回りのヘラケズリを加えている。

SD202 馬池北堤上に堤を横断して掘られた幅2.0m、深さ1.5mの溝で、水成堆積物で

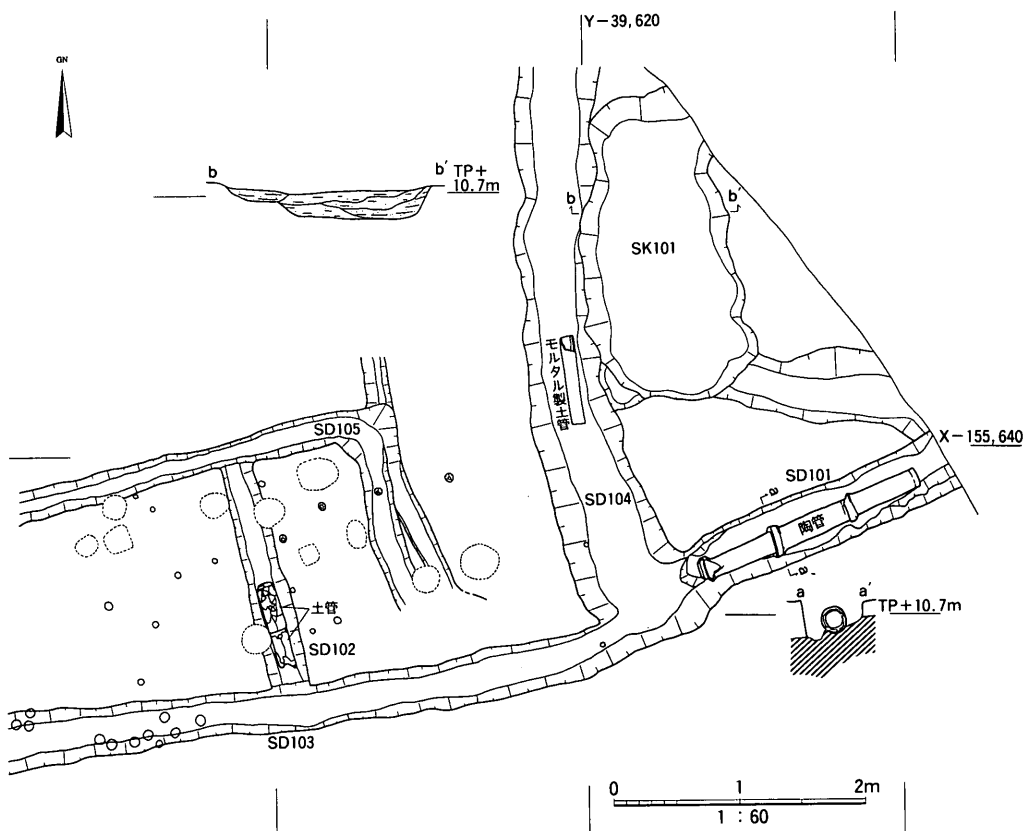


図39 近世～近代の溝平面図

埋没している。池満水時の放水路と思われる、遺物がないので時期は不明だが、中世にさかのぼる可能性も残る。

SD106よりも南側で、近世の畑を3面検出した。

第2d層上面検出畝群(図37)

東西方向と南北方向の畝間溝を同一面で検出した。切合い関係から前者のほうが古い。前者は東で北に8～9度振り、畝間溝の心々間は0.6～1.4m、後者は北で東に5度振り、畝間溝の心々間は0.5～1.6mである。第2c層で埋没する。18世紀前半から後半にかけての畑である。

第2c層中途面検出畝群(図37)

第2c層掘削中に検出した同層上面の畝間溝とは位置を異にする畝および畝間溝である。方位は南北方向で、北で東へ5度振り、溝の心々間は1.0～1.5mである。18世紀後半の畑である。

第2c層上面検出畝群(図38、図版5)

南北方向と東西方向の畝間溝を同一面で検出した。切合い関係から前者が古い。前者は北で東に5度振り、溝の心々間は2.0m前後で、後者は溝を5条検出したに過ぎないが、東で南に20度振り、心々間は1.3～2.1mである。18世紀後半から19世紀にかけての畑である。

第2b層上面検出犁溝群(図38、図版5)

基本的に東西方向の溝群だが、SD106を境にして方位を異にする。SD106の北側では東で南に11度振り、南

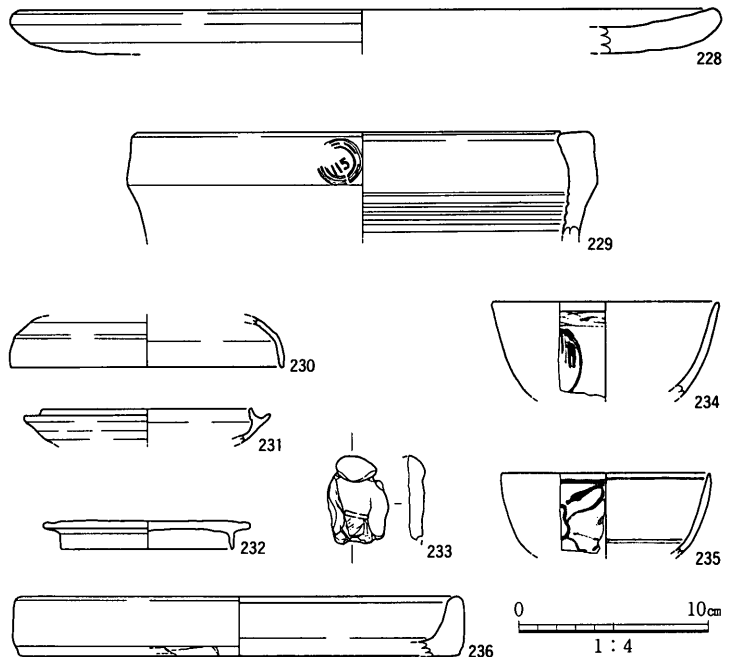


図40 近世以降の遺構出土遺物

SD101(228)、SD102(229)、SD104(230・231)、SD106(233・234)、SK101(232・235・236)

側では東で北に12度振る。方位的には南側の犁溝群は馬池北堤やSD106の方向に規定されたように見える。19世紀後半以降の犁溝群である。

以上のように各層の包含遺物は上層にいくほど新しくなっている。新しい畑の造成は客土を搬入しての床上げによることを示す。最初の畑である第2d層上面検出畝群の耕作開始が18世紀前半であり、その下層の第2e層の堆積が17世紀後半であることから、大和川開鑿以降、馬池堤を改修してのち、当地は畑地として耕作されるようになったと考えられる。

第2a層上面検出溝群(図39・40、図版4・19)

SD101～105、SK101は南区南部の馬池北堤北裾に位置する。

SD101(図39～41、図版13) 馬池北堤の北側を東西にはしる、長さ2.5m以上、幅0.5m、深さ0.3mの溝で、陶管3本がソケット部分を西に向けて連結した状態で検出された。陶管がある部分は暗渠であったと考えられる。南にやや屈折してSD103に繋がりと、一連の溝である。溝内と北岸に数多くの杭址が見られる。

土師質蓋228は内面と口縁部外面にていねいなナデ調整を施す。火消し壺の蓋と思われるが、年代不明である。

陶管240はSD101から3個体が連結して見つかったソケットタイプの陶管の一つで、胴部径20.0～20.5cm、同厚さ1.5cm、ソケット部径26.4cm、全長65.3cmを測る。ソケット部内面と胴端部外面に、幅32mmの小口が浅い櫛状になった板状工具で、4条の深さ1mmのカキヤブリを、口縁部に平行に施している。カキヤブリはソケット部を上にした時、一番上に位置する1条は幅1mmと細く、ほかの3条は幅4～5mmと広く、4条は5～7mmの間隔をとって配されている。ソケット部を上にして立て、内外面に鉄釉(失透釉)を施し、焼成が行われたようで、胴端部には施釉漏れした部分があり、胴部口縁端部に直径1.5cmの砂目痕がある。(註1)。

SD102(図39～41、図版22) SD103とSD105を繋ぐかたちで存在する、長さ1.9m、幅0.3mの南北溝だが、溝底がTP+10.7mと前2者よりも10cm以上高く、溝底に土管238・239の2つが玉縁部を北にして連結して置かれていた。近世の溝だが、土管229の出土から近代にも利用されたと考えられる。

土師質土管229は口縁部外面に三重圏線の内側にアラビア数字で「115」と書いた刻印を打つ、ソケットタイプの土管である。屈曲部内面に1条の幅1mmで、3mmの間隔をとる5条の沈線からなるカキヤブリを施している。

238は胴部径12.6～13.6cm、同厚さ0.8cm、玉縁端部径10.2cm、全長34.6cmの外面がプロ

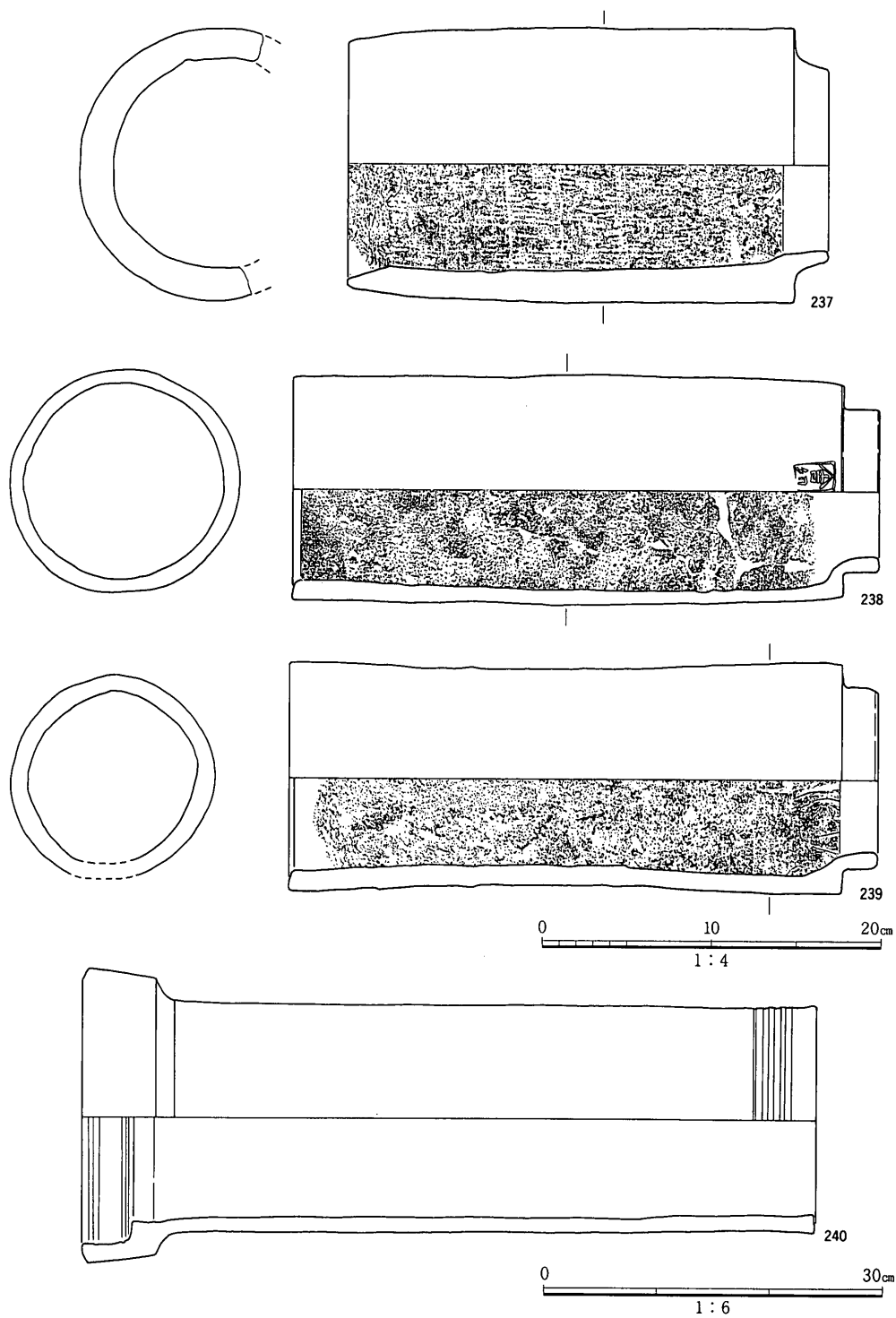


图41 溝出土土管
SD101(240)、SD102(238·239)、SD201(237)

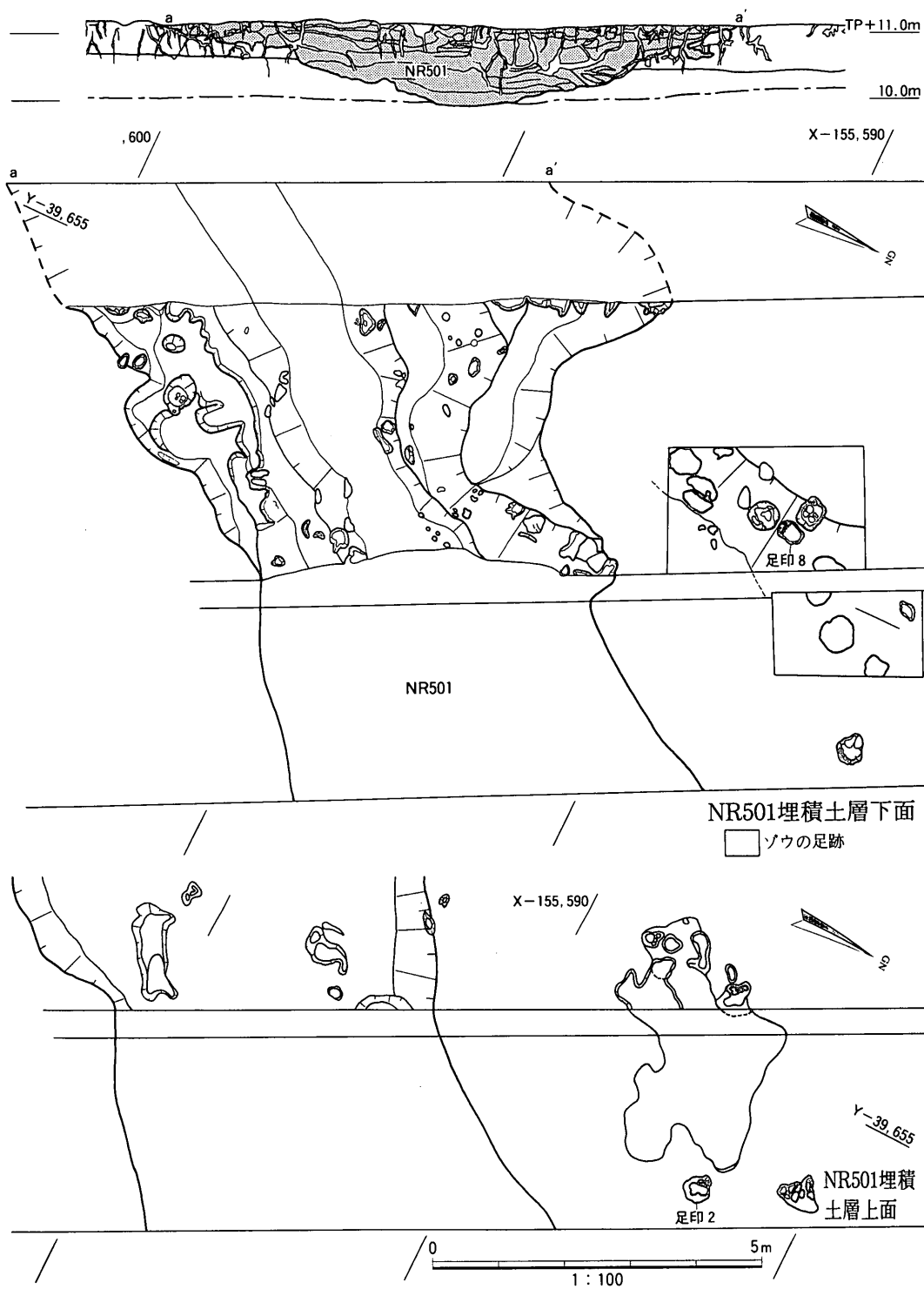


図42 NR501と足跡化石

ンズに近い光沢をもつ瓦質の土管である。きわめて薄く作られているのが特徴である。円筒形の型に粘土板を巻き付け、粘土板上端部を折り曲げて玉縁部を成形している。胴部内面は煤と鉄分の付着が顕著で、離型の方法を示す痕跡は不明である。胴端部内面には幅0.5cmほど面取りが加えられている。胴部玉縁際に「八吉印」の刻印をもつ。239は238と同形の土管で、表面吸着の炭素はかなり失われている。胴部径12.6~13.4cm、同厚さ1.0cm、玉縁端部径9.7cm、全長34.8cmで、胴部内面は煤・鉄分が付着し、離型の痕跡は不詳である。胴端部内面には幅0.3cmほどの面取りが施されている。

SD103 馬池北堤の北側の東西溝で、長さ5.0m以上、幅0.4m、深さ0.4mを測る。SD101と東で接する。

SD104 長さ5.5m以上、幅0.6~0.9m、深さ0.2mの南北溝で、SD101に合流する。モルタル製の土管が出土したことから、近代に暗渠として使われたことがわかった。

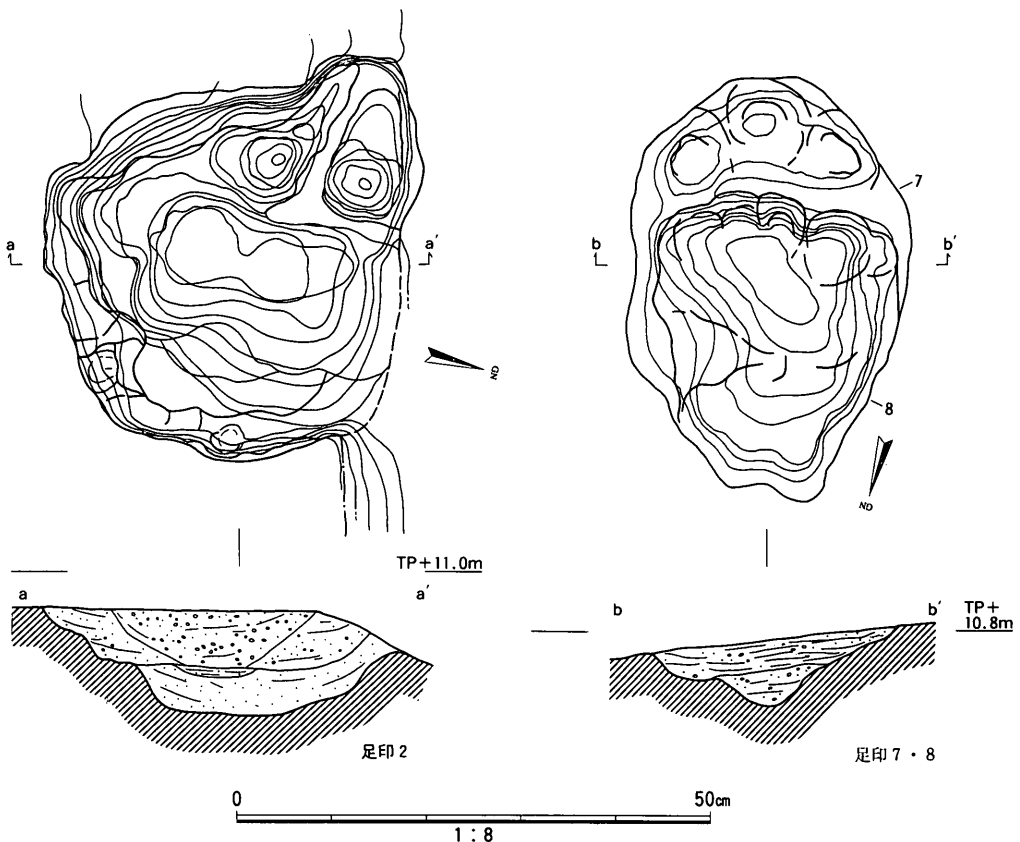


図43 足跡化石実測図

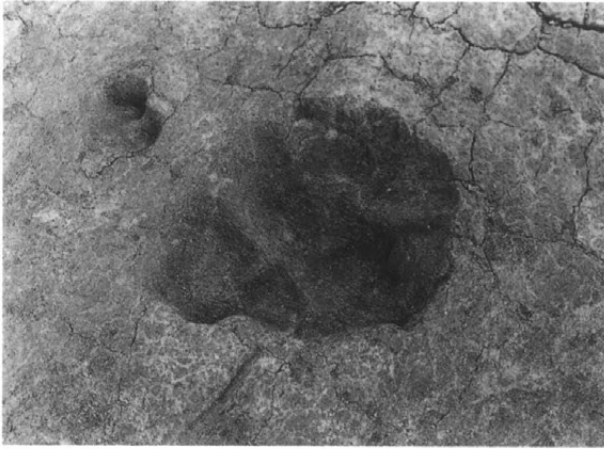


写真4 ナウマンゾウ足印2 (南から)

須恵器は杯蓋230と杯身231が出土した。230は復元口径14.5cmで、MT85型式に属する。231は復元口径11.4cmで、TK217型式に属する。

SD105 全長11.5m以上、幅0.2m、深さ0.15mの北で西にくの字形に曲る南北・東西溝である。畝間溝からの排水溝である可能性もある。

SD106(図40、図版19) 北区南部に位置し、東で北に7度振る東西溝で、北側で高くなる段の南裾に沿って掘られている。長さ13.0m以上、幅1.0m、深さ0.2mである。

土製ミニチュア土人形233は虚無僧を形作る。

肥前磁器碗234は体部外面に丸文を配し、透明釉を掛け分けている。Ⅱ期に位置する。

SK101(図40) SD104に切られる南北2.5m、東西1.2mの不整楕円形を呈し、深さ0.25mを測る。近世の作土で埋没している。19世紀の土壌と考えられる。

関西系陶器蓋232は天井部のみ施釉する。18世紀末から19世紀前半のものとみられる。

青花碗235は内外面に圈線を多用し、透明釉が分厚い。16世紀のものである。

土師質土器大皿236は体部にていねいなヨコナデを施す。19世紀と思われる。

iv) 更新世

NR501とナウマンゾウの足跡化石(図42・43、図版10、写真4) NR501は東で北に40度振る幅4.5~8.0m、深さ0.6mの自然流路である。NR501の埋積土層が長原15層、NR501のベースになる層は直下に火山灰層があり、吾彦火山灰層(降灰時期は8.7万年前)に対比されるから、長原16A層と考えている。埋積土層上面とベースの層上面に長鼻類や偶蹄類の足跡化石が見られる。足跡化石は7~8万年前のものと思われ、長鼻類のものを前者で3個、後者で13個検出した。長鼻類は、当時日本に生育していた長鼻類の化石骨がすべてナウマンゾウであることから、それら足跡化石はナウマンゾウのものと判断した。偶蹄類はオオツノジカと推定される。

以下の記述は、『ゾウの足跡調査法』編集委員会1994]が定義した用語を用いた。図43の等深線は1cmである。

足印2 NR501の北側、埋積土層上面で検出され、左前足の足印と考えられる。第3・4指印が残存しており、指先は西を向いていた。足印口の長径は45cm、短径は41cmである。

足印7・8 NR501の北側、埋積土層下面で検出され、左前・後足の足印と考えられる。左前足印(足印7)の後方を左後足印(足印8)が踏んだようで、前足の第2・3・4指印と後足の第2・3・4・5指印と思われるものが残存している。指先は南を向いており、足印8の足印口の長径は33cm、短径は26cmである。

3)小結

今回の調査では次のような成果を得ることができた。

1、中世の灌漑用水路を検出できた。馬池北堤は中世も同じ位置に存在し、現、馬池北堤の下層で灌漑用水路がボトル・ネック状に狭くなっている状態から樋口と判断した。ここで水量を調整したと考えられる。水路を放棄するに当って、樋口を閉塞している。

2、水路を埋めて水田にしているが、耕作開始も長原3層の時期と考えられる。

3、馬池北堤の構築の時期は不明だが、樋口閉塞の時期が15世紀中葉頃であることから、中世までさかのぼることがわかった。

4、調査地北区で、長原4層段階の耕作痕跡を確認した。

5、古代の遺構は確認できなかったが、水路の埋土や包含層から古墳時代中期～飛鳥時代の須恵器・土師器・埴輪を採集できたことから、周囲に当該期の集落や古墳群が広がっていたと推測される。

6、馬池の北側では既調査で7万年前頃のナウマンゾウの足跡化石が確認されているが、当地でも同時期のものが見つかったことで、足跡化石の分布はかなりの広がりをもつことがわかった。

註)

- (1)土管に酸化鉄を施釉する始まりは不明だが、鉄釉を施した“赤瓦”を葺くことで著名な会津若松城では、地元伝わる『陶家先祖覚書』([会津本郷陶磁器業史編纂委員会1969]所収)から、慶安元年(1648)に、冬場の凍結による瓦破損を防止するため、赤瓦を焼き始めたようである。会津若松市教育委員会 近藤真佐夫氏の御教示を得た。

第Ⅲ章 遺構の検討

第1節 馬池と中世の灌漑用水路

馬池は大和川開鑿をさかのぼる中世から存在していた。最初の築堤時を限定することはできないが、今回、馬池北堤を発掘し(位置は近世の西口樋の東側、00-29次)、その下層の中世灌漑用水路と樋口の廃止が、15世紀中葉頃であることがわかった。それ以前から馬池は、北方に給水していたのである。

第Ⅱ章で述べたようにまず樋口を土砂で閉塞し、水路はおもに地山土を掘崩すことによって埋め、かさ上げて水田化した。江戸時代に北堤を横断するように掘られた水路SD202は満水時の放水路(常用洪水吐)である可能性もあるが、水路底の標高がTP+10.6mであるのに対して、中世の水路SD301底の標高は、樋口部分でTP+8.0mであるなど非常に低く、地山を深く掘下げるなどの地業を伴っている。中世の馬池灌漑用水の性格を考えてみた。

1) 中世の灌漑用水路の復元

馬池東堤の調査(99-42・43次)[大阪市文化財協会2003]から中世の堤の状況を復元すると、池底でTP+9.8~10.5m、堤の天端でTP+11.7m以上であった。北堤では中世樋口の横の地山高所でTP+11.3mであり、樋口閉塞と一連の地業と思われるⅥ期で築造された堤の最高所はTP+12.1mで、東堤よりもやや高いが、同時期の可能性がある。廃止直前の馬池堤の標高がTP+13.3m前後であるのに比して、中世の堤は簡単な造作

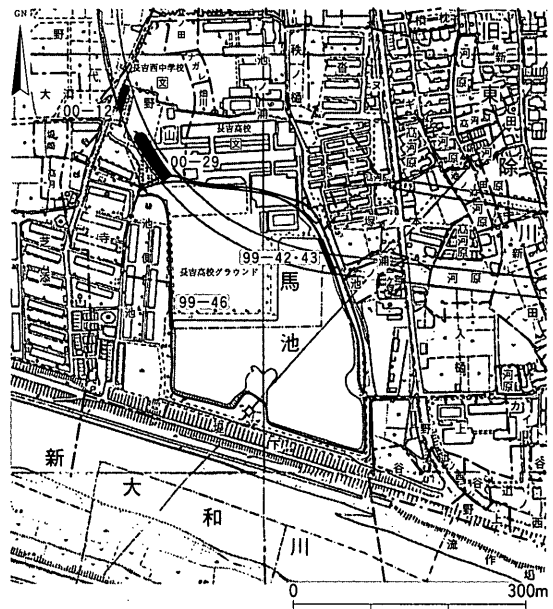


図44 馬池と調査地点

であったといえる。東堤中世堤の築造が、SD301開鑿時なのか、廃止後Ⅵ期なのかはにわかに判断できないが、SD301を閉塞したSF301天端の低所がTP+10.1mで、当時の馬池の水位がそれ以下と想像されるから、SD301は東堤築堤より一段階古い時期の水路と思われる。加えて、SD301の樋口部分底のTP+8.0mは、中世馬池の北端の池底標高を示すと思われるから、馬池内に谷筋がはしっていたとみて誤りなからう。

また今回検出のSD301の北端はTP+7.5mで、北方の喜連東遺跡の瓜破台地上の地山高がTP+7.8m前後あり、台地上への用水供給は無理であるから、馬池谷に沿った低地および喜連村と平野郷の低地方面への給水と考えられる。ただ96-71次調査[大阪市文化財協会2001a](図45)で明らかになったように、馬池谷は8世紀末の洪水層である長原5層の堆積で埋積し、台地部の標高とほとんど変らない平坦な状態になっている。長原3層段階では地表面はTP+9.2mほどであるから、この水路はやはり遠隔の低地への配水の可能性が高いと思われる。

さて馬池とSD301の結節点である樋口の構造はどのようなものであったのか。大阪狭山市の狭山池は古代から近代にいたる樋の構造を見るには好個の資料である[大阪府立狭山池博物館

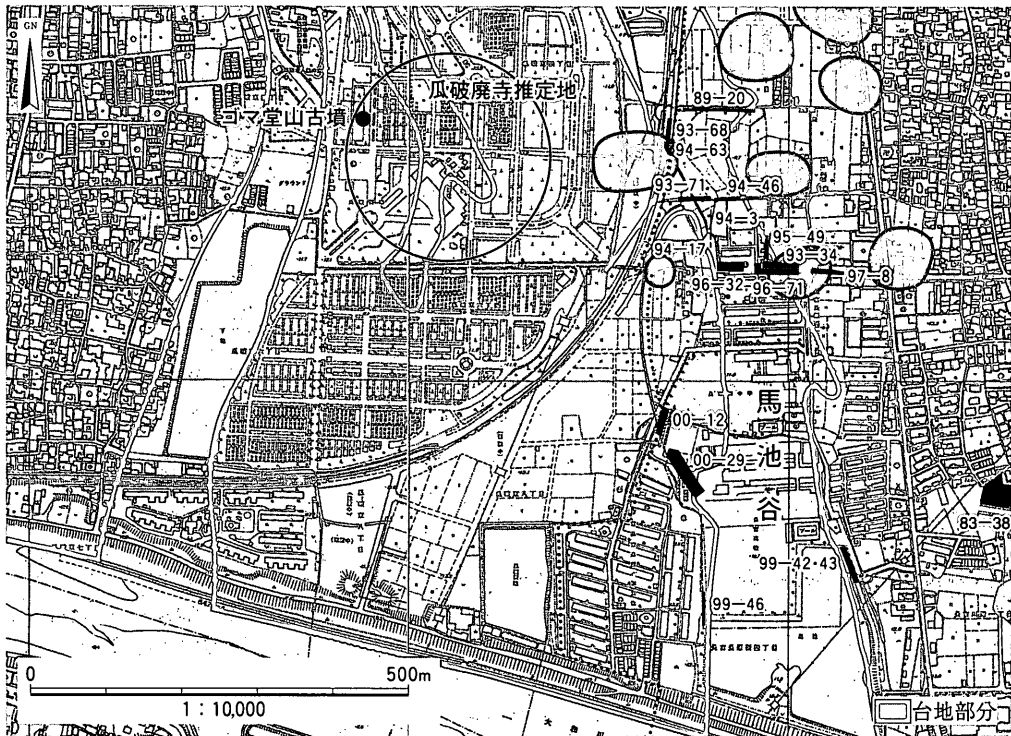
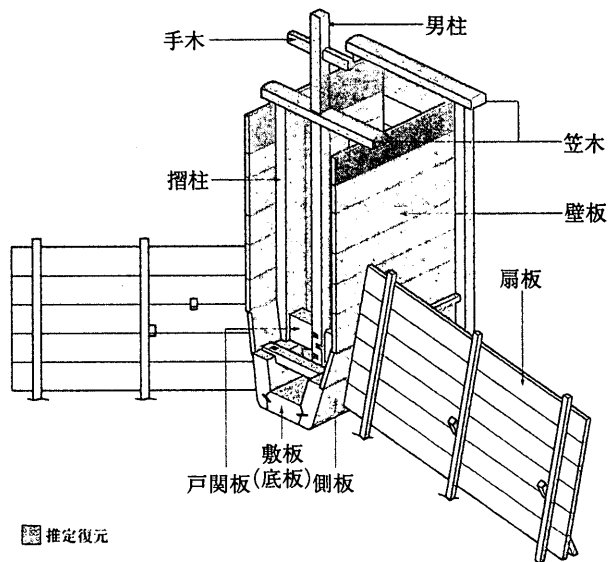


図45 馬池谷復元図([大阪市文化財協会2002]図2に加筆)

2001]。しかし幅20m以上の堤の地下に長さ数十mの木製樋管を横断させ、水温の高い上部水を供給するために四段構造をもつ尺八樋を設けた[大阪狭山市教育委員会1994]狭山池と、堤の幅数mで地山を素掘りしただけの樋口をもつ中世馬池では、比較にならないのも事実である。馬池の樋口は水路をせき止める堰に近い構造であったと思われる。



推定復元

図46 慶長13(1608)年製造、狭山池東樋復元図
([大阪府立狭山池博物館2001]に加筆)

次節で石原佳子氏が詳しく紹介するが、元禄9(1696)年に王水か

らの取水のため、川辺村と若林村が取り交した証文「為取替申立合戸関樋一札之事」の内に、「砂関」と「戸関(樋)」が見える。おそらく砂関は土嚢袋に砂を詰めて流れをせき止めただけのもので、戸関は狭山池の近世東樋[狭山池調査事務所1995]とも共通する、中央に男柱があり、手で戸関板を上下させて放水を調整できる樋口であったであろう。

今回の調査は池内の取水部ではなく、池外の排水部の発掘であったから馬池の樋口の構造を明らかにできなかったが、砂関・戸関の両方の可能性を考慮すべきと思われる。

2) 中世の灌漑用水路の廃止

馬池の東の台地部には東除川が大和川付替え(1704年)まで流れていた。東除川は西除川と並んで、狭山池からの灌漑用水路の役割を負ったが、当初、古代においては古市大溝を水源にしていたという説もある[原秀禎1977]。長吉川辺1丁目の調査(83-38次)で東除川本流を発掘し、第1期(8~10世紀)は幅8m、深さ2.5~3m、第2期(11~14世紀)は幅23m以上、深さ1.4~1.7m、第3期(15~18世紀初頭)幅40m以上の規模であったとしている。地山高所の標高はTP+11.1mである[大阪市文化財協会1983]。馬池北堤の地山高所でTP+11.2mであるからほとんど高低差は見られない。東除川から馬池への引水も考慮すべきであろう。

SD301は平野郷や喜連村などの低地部への給水を考えるべきだろう。何故水路を廃止し

たかは、第3c層の水田開発を理由とするには、その得られる水田面積からして根拠が薄い。水田はあくまで水路埋没後の土地利用という副次的事象として考えるべきである。

一つ水路廃止で考えられることは、15世紀中葉という時代相である。戦国時代の幕開けである応仁の乱は1467年に始まり、室町幕府管領を務めた畠山政長は平野区加美にあった河内正覚寺城で、明応2(1493)年、細川政元らに攻められて自刃する。すなわち当地、河内国丹北郡付近も中央の政争に巻き込まれた可能性が大なのである。平野郷周辺は摂津・河内の政治・経済的要衝であるから、敵方の灌漑体系の破壊という挙動は予想される。一つの可能性として提示しておきたい。

第2節 馬池と八箇用水ー近世大和川北岸地域の水利事情ー

大阪市史料調査会主任調査員 石原佳子

1)はじめに

馬池は現在埋立てられ、府立長吉高校のグラウンドにわずかにその跡をとどめている。近年区画整理などによって変貌する以前、馬池と周辺部がどのようなようであったか、明治18(1885)年実測の陸地測量部仮製地図からうかがい知ることができる(図47)。

大和国から流れてきた大和川は、河内国志紀郡船橋村・柏原村(現藤井寺市・柏原市)付近で石川をあわせ、大阪平野を西に横切る形で大阪湾に注ぎ込んでいる。馬池はこの大和川北岸に接し、東側に川辺村、北側に長原村、西側に東瓜破村の集落が存在、大和川岸からいく筋もの水路が開け、これらがまた馬池やそのほかの溜池と村々の田地に通じている。対岸には大堀村・別所村・三宅村(いずれも現松原市)の集落があり、大堀村集落の西側で東除川が大和川に流入している。地図上からみると、大和川にはりつくようにして馬池があり、その両岸に村々が展開している。

しかし、このような大和川を軸とする景観は、宝永元(1704)年に行われた大和川付替え工事の結果であり、以前のそれとは大きくことなっていた。

もともと大和川の流路は、石川と合流した後そこから北へ流れ、複雑に分流した後、大坂城の東部で淀川と合流していた。玉串川・長瀬川がそれである。付替え工事によって、こうした流路が西に大きく曲げられ堺港に注ぎ込むことになったのである。この大和川付替えは、農業生産や交通、村落連合など、近世大坂地域にさまざまな影響をもたらしたが、とりわけ直接河道となった沿岸村々では地域生活そのものが一変させられた。川辺村では「正保郷帳」(正保年間は1644～48年)による村高581石にたいして133石、東瓜破村・西瓜破村では、同じく村高が両村あわせて2813石あったところ、うち585石が河道となり、村内の往来も、田畑の用排水も川に分断されることになったのである(註1)。ここでは、馬池を中心とする長原・川辺・東瓜破地区の用水事情の変化を、地域に残された文書類から復元してみようと思う。なお、ここで引用もしくは参考にしたのは、おもに、川辺地区については辻岡千次氏所蔵文書、長原地区については城宏氏所蔵文書である。

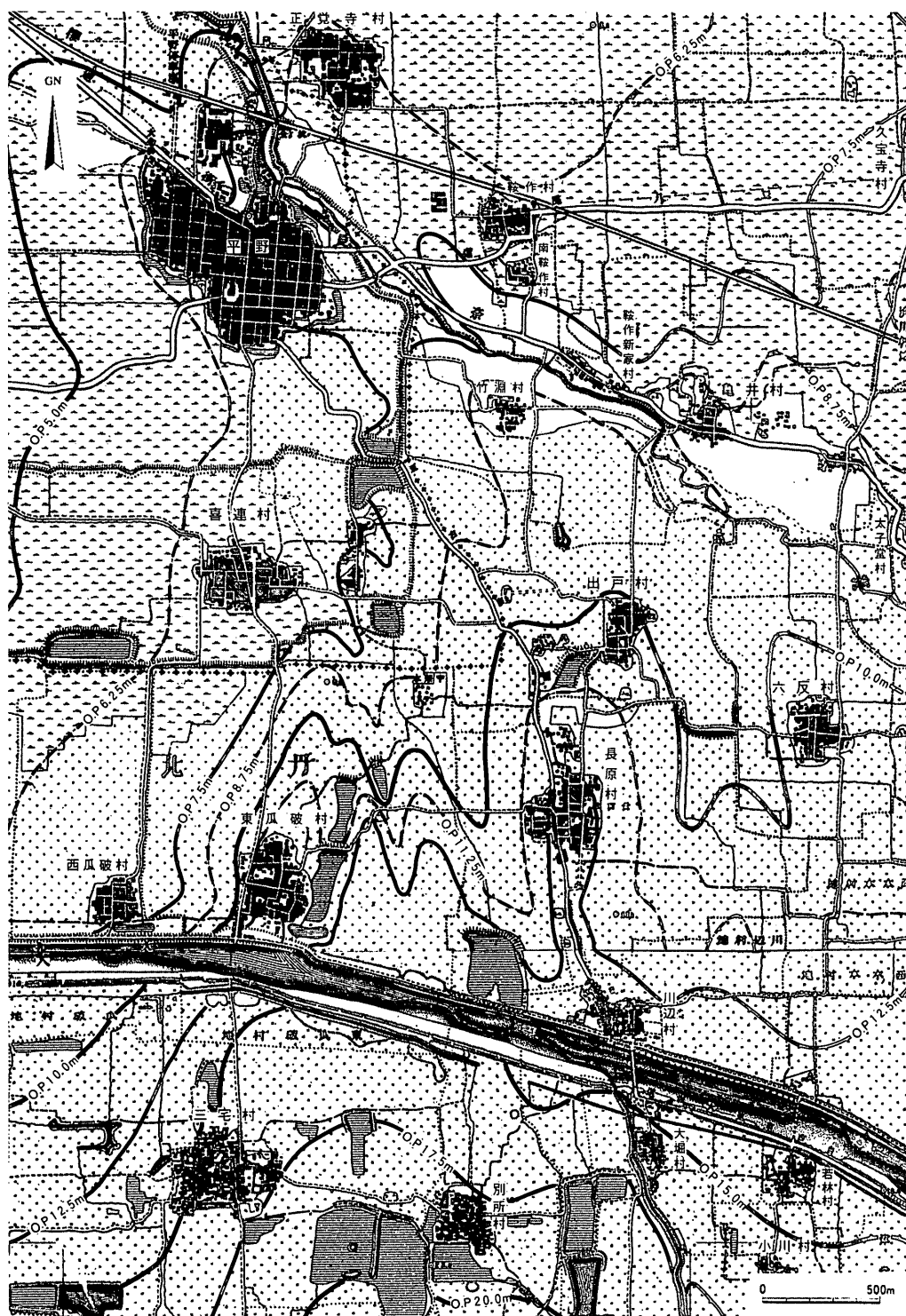


図47 大和川周辺等高線図[明治18(1885)年実測の陸地測量部仮製地図「天王寺村」「金田村」に加筆]



図48 狭山池分水図[福島雅蔵1960]

2)大和川付替え前

i)狭山池懸り

大和川がこの地域を横断する以前、大和川北岸のこれらの村々もおおむね狭山池からの配水にたよっていた。狭山池からの配水は池の北堤に設置された中樋と大樋により、中樋の水は太満池をへて東除川へ、大樋の水は西除川に流下、下流村々には規定の順序・時間によって分水されたのである。当地域は東除川からの配水を受けていた(図48)。

狭山池の池守田中家が所蔵する慶長17(1612)年「狭山池中樋水出ス割符帳」(註2)によると、東除川による水懸総高は2万3322石、これらのうちには川辺・瓜破村とその近村のほか、さらに北方の喜連村・平野郷も含まれていた。川辺村が581石・4時分、瓜破村が2313石・16時分、平野郷は3200石・22時分の配水であった。この瓜破村は後の東瓜破村の地域で、西瓜破村部は西除川筋にはいっていた。平野郷は東除・西除両川から用水を得ていた。喜連・若林・大堀・三宅・別所など周辺の村々もおなじ東除川筋に含まれていた(表2)。承応2(1653)年「狭山池懸御領私領高書帳」にも川辺村・瓜破村が含まれている。長原村はこの中に含まれていないが、馬池や川辺村を通じて間接的に用水を狭山池から得ていたようである。

表2 慶長17(1612)年 狭山池東除川
(中樋)筋の丹北郡・住吉郡村々

村名	水懸り高(石)	分水時間
川辺村	581.7	4.0
瓜破村	2313.6	16.0
大堀村	542.1	4.0
若林村	484.84	3.3
木本村	560.0	4.0
別所村	432.9	3.0
三宅村	1664.2	11.4
喜連村	1836.78	12.5
平野郷	3200.0	22.0

か、さらに北方の喜連村・平野郷も含まれていた。川辺村が581石・4時分、瓜破村が2313石・16時分、平野郷は3200石・22時分の配水であった。この瓜破村は後の東瓜破村の地域で、西瓜破村部は西除川筋にはいっていた。平野郷は東除・西除両川から用水を得ていた。喜連・若林・大堀・三宅・別所など周辺の村々もおなじ東除川筋に含まれていた(表2)。承応2(1653)年「狭山池懸御領私領高書帳」にも川辺村・瓜破村が含まれている。長原村はこの中に含まれていないが、馬池や川辺村を通じて間接的に用水を狭山池から得ていたようである。

ii)東瓜破村と狭山池用水

貞享5(1688)年の「東瓜破村明細帳」(註3)には、狭山池からの用水を村内田地に配水するについて、次のように記されている。

一、東瓜破村用水ハ三里井路上、北条伊勢守様御知行所狭山溜池より水取申候得共、此池水者村数八拾村余ニ而、高米四万八千石余江割符仕、時取を極、水取申時分者三里之間江大分人足を出シ水番為致、庄屋・年寄昼夜肝煎、水取申候得共、わつかならては水取不申候

一、同用水者拾三町井路上、森本惣兵衛様御下三宅村溜池水ニ而養申、田地高米貳百石程御座候

一、同用水ハ喜多見若狭守様御知行所長原村溜池水ニ而養申、田地高米貳百石程御座候、
井路上ハ領つゝ、きに而御座候

一、右長原村領内川水先例より東瓜破村下之池へ、長原村ニ余り申時分ほもらひ申候
村の用水はもっぱら三里上流の狭山池にたよっていて、池から村までの間たくさんの人
足を出し水掻きをして村内の田地へ引いた。しかし、80もの村が同池の用水を利用してお
り、川下の同村では充
分に用水を確保するこ
とが困難であった。池
水を村まで引くには、
東除川からいったん三
宅村溜池と長原村溜池
に移して、そこから取
水した。ここでいう長
原村溜池が馬池のこと
である。

そのほか、領続きの長原村の川水を村内の下ノ池に引き、同村の余水をもらっていた。ここで川水というのは馬池から延びる畑川（端川とも）のことをさしている。明細帳とともに作成されたとみなされる同年の東瓜破村下絵図(図49)には、三宅村の新池・寺池から、長原村馬池から、畑川や大小の井路を通じて村内田地に引水し

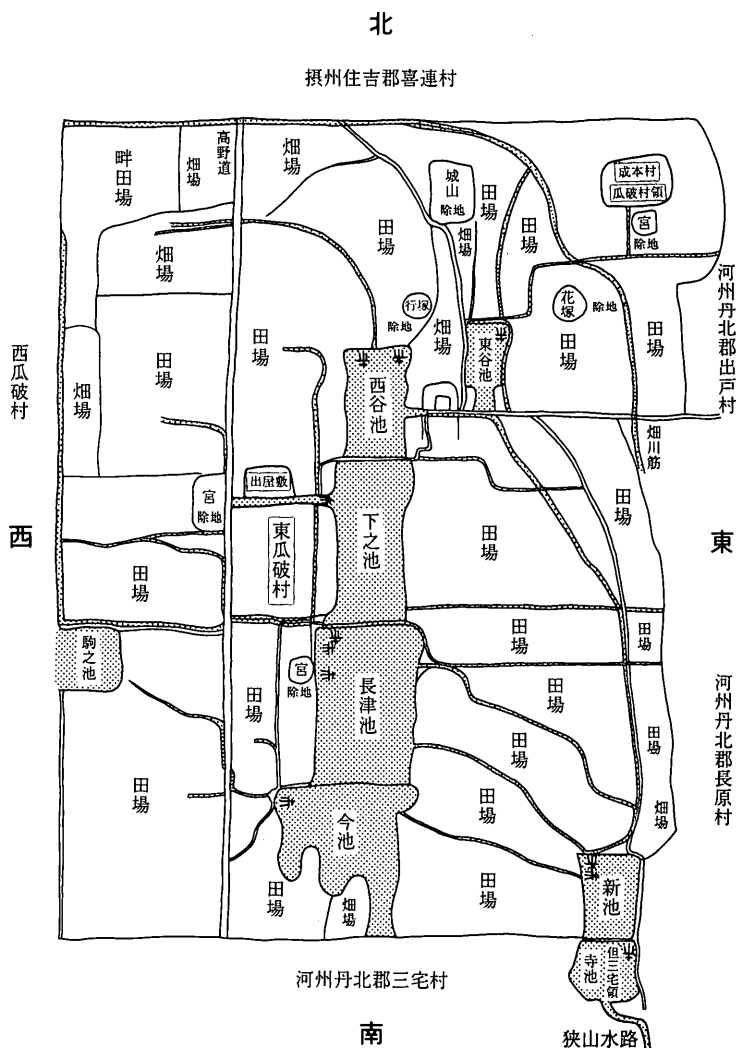


図49 東瓜破村下絵図 矢倉久嗣氏所蔵 貞享5(1688)年
[大阪市文化財協会1983]をトレース

iii) 馬池の利用

後年の史料であるが、享保2(1717)年、馬池用水をめぐる長原村の訴状に池の由来と、大和川開鑿前の利用が述べられている(註4)。

往古ハ氏神正一位日陰大明神と唱候、毎年五月五日之旱天ニくつぬぎと申所にてくつぬがせ、則此池ニ而馬の足をひやし、夫馬わたり候ニ付、馬池と名付候

日陰(蔭)大明神というのは、長吉長原3丁目所在の志紀長吉神社を指し、東除川及流路の東側、長原村集落の北端に位置している(『大阪府全志』4[井上正雄1922])。池に設置する樋支配も長原村、領地も長原村、「長原村高千三百二拾石余之御田地、此地ニ而そたて、外ニ池とて無御座候、則此池床七町九反八畝貳拾八歩」と、池が長原村にとってなくてはならない用水池であることを強調している。

池の面積は8町弱、大和川開鑿によって池面積が半減する前はこの地域ではもっとも大きな溜池であり、長原村田地1300石余をうるおしていたのである。池には何箇所も樋がもうけられ、そこから畑川や井路を通じて、長原村・東瓜破村・喜連村に用水を供給していた。各樋の名称と水懸り高は次のとおりである。

馬池用水之訳

馬池西口樋 長原村・瓜破村立合 昼夜用水搔入申候

内

水乗高拾三町四反九畝 瓜破村

是ハ野代筋御田地江入申候

水乗高貳町壹反余 長原村

是ハ野山筋御田地江入申候

同池ふたまた樋 此水乗高六拾壹町八反余 長原村

是ハ長原村東面御田地江昼夜搔入申候

同池 南山のはな樋・北山のはな樋・えいせい樋

此三ツ之樋上樋ハ次第第二抜、昼夜時割の水

享保8(1723)年に作成された「村絵図写」(図50)に各樋の位置・名称、水路との関係が記載されている。西口樋が東瓜破・長原両村に、二股樋は長原村に、えいせい(永世カ)樋・北山の花樋・南山の花樋3樋から、時割にして長原・東瓜破・喜連・出戸村に用水を供給した。分水時間は次のように定められていたという。

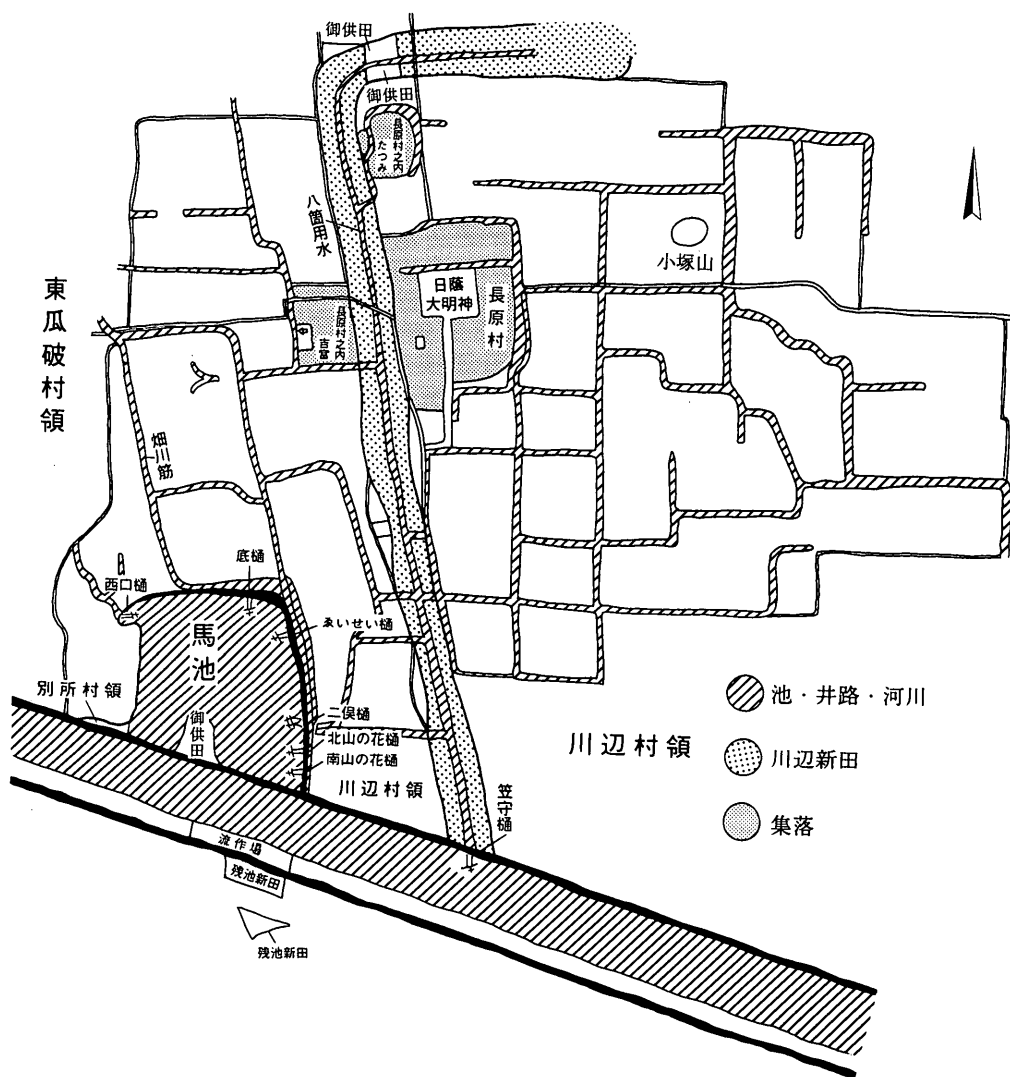


図50 村絵図写 享保8(1723)年、城宏氏所蔵(本書 原色図版)をトレース

往古時取之訳

内

昼六時	水乗高三拾壹町七反余	長原村
	是ハ吉留代御田地江入申候	
夜五時	水乗高五町四反	喜連三ヶ村
同	水乗高九畝	両出戸村
	是ハ西ノ戸之内しりはめ与申御田地江入被申候	

同 水乗高式町四反 瓜破村
 是ハ西戸之内なし本東方御田地江入被申候
 同七ツ壱時 水乗高式町七反 岡出戸村
 是ハ三わと申御田地江入被申候

iv) 東除川と村々溜池

馬池は川辺村領であつたが、同村の西端にあり、他の村域のほうが高所であるため利用せず、村南方の上流村々の溜池から川辺村溜池に用水をうつして、あるいは東除川から直接取水していた。延宝5(1677)年の川辺村絵図(写真5)から、村集落が村域の中央部にあり、その西側を南北に長原村に向つて東除川が流れ、南に張出す形で上池・福富池2池が存在、それらから水路が村内の田畑に通じており、東除川から東西兩岸の田畑に、また南

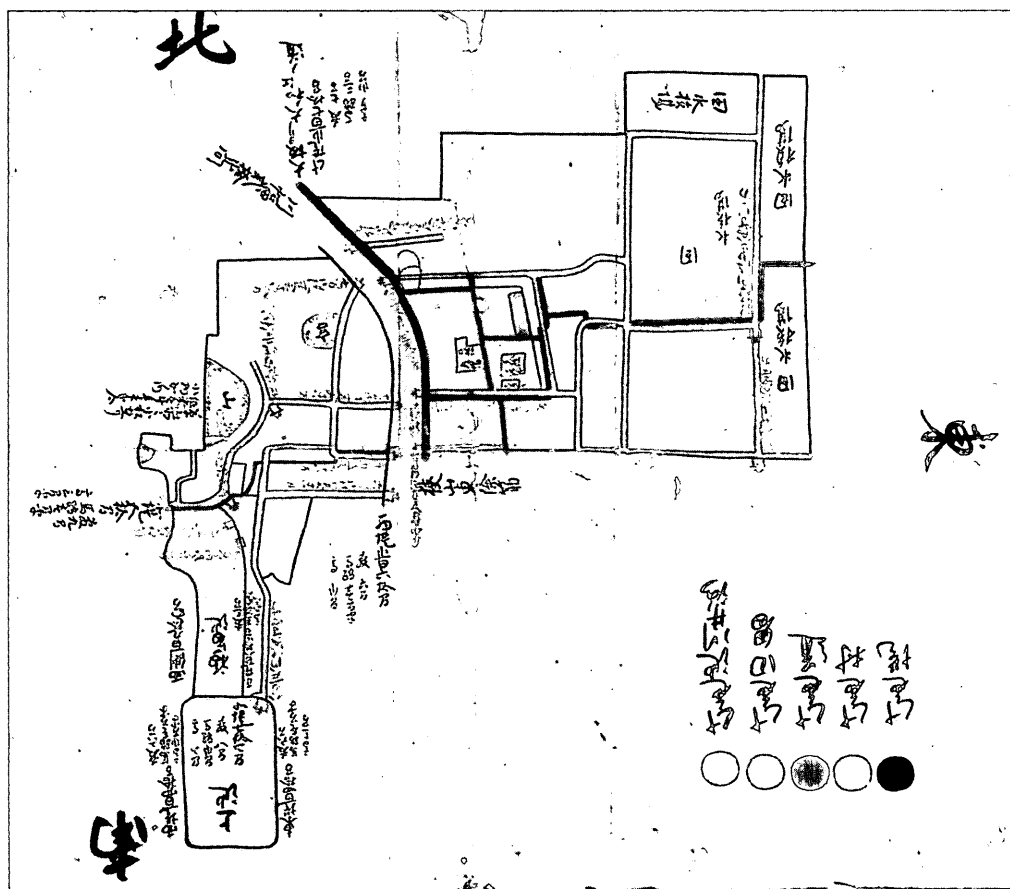


写真5 川辺村絵図 延宝5(1677)年、辻岡千次氏所蔵

部2池から北方の田畑に用水を供給していたことが読み取れる。

元禄5(1692)年に一津屋村升が池水をめぐって、周辺村々と争論が起ったが、そのときの別所村訴状に川辺村が当時どこから用水を得ていたか次のように述べられている(註5)。

一津屋村ますか池^ろ之除水別所村池々江入、夫^ろ大堀村池江入、夫^ろ川辺村池江入来候
(「乍恐返答」)

川辺村之池へハ小川村池之除水井ニ一ツ屋村東悪水大井路ニヶ所大堀村池へ懸り、夫^ろ
川辺村田地江込申候、其上狭山東除川之水并ニ大つい(王水)之水御田地へ入被申候、

殊ふくとミ(福富)池へハ狭山東除川之水込申大池ニ御座候 (「乍恐口上」)

上手の一津屋村升が池、あるいは隣接の小川村田地の悪水が川辺村の2池へ、加えて東除川と「王水」の水が川辺村の用水源となったこと、ことに福富池が東除川用水の移し池であったことが述べられている。そのことは村絵図に記される樋と水路の状況から読み取ることができる。明治18年実測の仮製地図記載の等高線によると、瓜破台地の尾根筋にのる村集落と東除川がほぼOP+15mから+12.5m(OP±0m=TP-1.3m、以下、+は省略)に位置し、上池・福富池の標高はOP17.5m付近、標高OP20mから22.5mの一津屋村升が池から下方の川辺村2池へ、また村内東除川から兩岸の田畑に用水が下ろされていたことが、地形上からもうかがえるのである(図47)。

v)川辺村と王水

狭山池用水のほかに、川辺村では若林村から王水といわれる用水を取っていた。これは、志紀郡碓井村から菅田八幡宮境内をへて王地丸井路によって石川左岸の村々を潤し、若林村で大乘川と落ち合う用水である[藤井寺市史編さん委員会1998]。元禄9(1696)年、王水を引水するための砂関を新たに戸関に替えるについての、樋元の若林村との取為替証文にその状況がうかがえる(註6)。

為取替申立合戸関樋一札之事

一、王水参候節者往古^ろ若林村御田地江水入済候上、川辺村江水指下シ申候、則若林村領字はかん田与申所ニ、川辺村^ろ砂関仕取来り申候付、王水参候節者、早速右之関川辺村^ろ築候節ニ者若林村^ろ毎度申遣、御普請川辺村^ろ相勤申来候、尤若林村ニ者右場所江中関ニ而水取来り候へ共、川辺村領者地形次第ニ高ク有之候付、若林村^ろ築候中関之上ヲ川辺村^ろ築上ケ水取来り申候、右井関高関ニ而度々切レ、大切之用水捨り申候付、川辺村者大分迷惑仕、若林村も迷惑仕候付、両村申合、立会之戸関ニ今度願上候事

一、右戸関樋、両村立会之上、渴水ニ及候共先年之通、若林村之溜り水川辺村江かき取申

間敷候事

一、右王水、若林村より川辺村へ指下し申候付、往古より年々五升捨壹勺、かます壺連、水銭平野札七匁、毎年八月朔日ニ川辺村より若林村江取来り申候、自今以後先規之通相勤可申候事

右之通両村相談之上証文取替し申候上者、互ニ違乱有之間敷候、為後日証文如件
元禄九年子十一月

若林村庄屋	三左衛門	川辺村庄屋	権左衛門
庄屋	三郎右衛門	同村年寄	七兵衛
年寄	甚兵衛	同	喜兵衛
同	仁兵衛	同	仁兵衛
		同	二郎右衛門
		同	武兵衛

大乗川に連なる王水井路が若林村まで通じており、この余水を川辺村が若林領内字はかん田に砂関を築いて取水したという。文書は、このたび戸関を仕立てて両村立会樋とするについての約定である。川辺村から若林村に水銭等を八朔時に差出していた。

3)大和川付替え後の変化

大和川付替え工事によるこれら地域の用水事情は、従来の南からの水系がすべて断たれ、かわりに南側を東から大和川が流れるようになったことで一変した。

i)瓜破台地と新大和川

河内南部から中部にかけての地勢は、おおざっぱに言って、南部が高く北部および北東部に向って低くなっている。狭山池からの用水はこうした地勢にそって東除川・西除川によって北部の下流域に流下してきたのであるが、その流れが大和川によって寸断されたのである。また、川辺から西側の河道地域は南北両岸とも瓜破台地上にあり、かなり地高になっていた。

図47の明治18年仮製地図から土地の高低を読むと、川南側大堀村集落から大和川、三宅村集落にかけてOP15m(以下すべてOP値)の等高線をえがき、東側の若林村集落はその外でそれより地低になっている。その北側を12.5m、10mの等高線が、川南の西瓜破村地・東瓜破村地から北側の東瓜破村集落、長原村集落の北側から東へ続いている。北側川辺村

集落は南東の若林村集落とほぼおなじ程度である。北に張出す瓜破台地の斜面を大和川が横切る形になったので、大和川を東から西の堺側に流すについては川底を深く掘り堤防を高く築くことになった。昭和61年測量の1万分1地形図によると、川辺村集落前の明治橋付近で、堤高は南北とも大体OPにして18.3m前後、河道内は9.2mである。堤外は北側で13.3m、南側で15.3mそこそこである。

そのため、大和川が村を横切ったとはいえ、北側村々田地に川から直接取水が困難な状況にあった。また、南側にとっては、高い堤防にさえぎられて用排水の吐け場がなくなったことになった。

ii) 落堀川開鑿

南岸東側の城連寺村でも状況は同じで、寛保3(1743)年「村方盛衰記」(註7)に、

本田川床残百五十石余之場所ハ大和川東西之堤ニせかれ、南表狭山西除川・東除川間凡一万八九千石程之悪水落込申候ニ付、御田畑者勿論、居村へ茂水入、不時之雨ニ茂御田畑・居屋舗一面ニ水付罷成申候

と、開鑿後の水難が記述されている。

東除川の流末には排水のための樋が設置されたが、それだけでは排水に不十分で、「宝永元申年、大和川違ニ付、当村領東西横堤御築立被遊候ニ付、南表之悪水落込、御田地・居村共、不時之雨ニ茂五日十日之間水吐不申候ニ付」と、水除堤が御普請として築かれたこと、それでも「右川筋下地高二御座候ニ付、毎度湛水御田地・居村共水付罷成」状況で、宝永5(1708)年に百姓自普請で「川下平均六尺、巾平均二間掘立申候」と、排水路として落堀川^{おとしほりかわ}が開鑿されたことが記述されている(「村方盛衰記」)。落堀川は石川と大和川合流部付近を起点に大和川南堤沿い西へ流れ、南からの悪水を集めた。

iii) 笥組と八箇用水

北側の村々にとって、大和川付替えによる最大の変化は、南からの用水路を断たれ、大和川取水による用水系統を形成しなければならないところにあった。

この地域の新しい水利系統の基幹になったのは笥組と八箇用水で、若林村の王地丸樋と川辺村笠守樋を元樋に大和川以北の旧東除川筋村々で結成され、東除川跡を八箇用水(八箇井路)として利用した(図50・51)。

明和3(1766)年、笥組7ヶ村が大井村領内に大和川新堰設置を願い出たときの訴状に、

大和川寛の由来が述べられている(註8)。

私共村々用水之儀、宝永元申年大和川川違已来、古来之用水、狭山東除川并溜池等、新川ニ隔り潰地等も有之、大和川ハ川床低く御田地ハ地高ニ御座候故、大和川之用水ハ一向用水ニ相成不申、用水不足仕候ニ付、道明寺森下之湧水并大乘川之余水を、大和川南方ニ御座候落堀川若林村領ニ而井関を立、大和川を寛ニ而川北へ用水引取御田地養来申候
また後年の史料であるが、天保9(1838)年に若林村・長原村・西出戸村から川辺村に差し入れた文書にも寛の利用が記載されている(註9)。

- 一、新大和川筋若林村領寛組与唱私共村々用水組、宝永元申年ノ組合相成、田畑相続仕罷在、然ル処年久敷罷成候ニ付忘却之向茂有之候而者、自然申分ニ相成候ニ付、今度一札相改、左之ヶ条之通、双方申分無御座一同承知仕候
- 一、若林村領落堀川江土俵井堰可申候事
- 一、王地丸元若林村・川辺村・長原村三ヶ組御座候処、宝永元申年ノ村々組合ニ相成候事
- 一、川中寛掛渡可申事 但彼岸迄

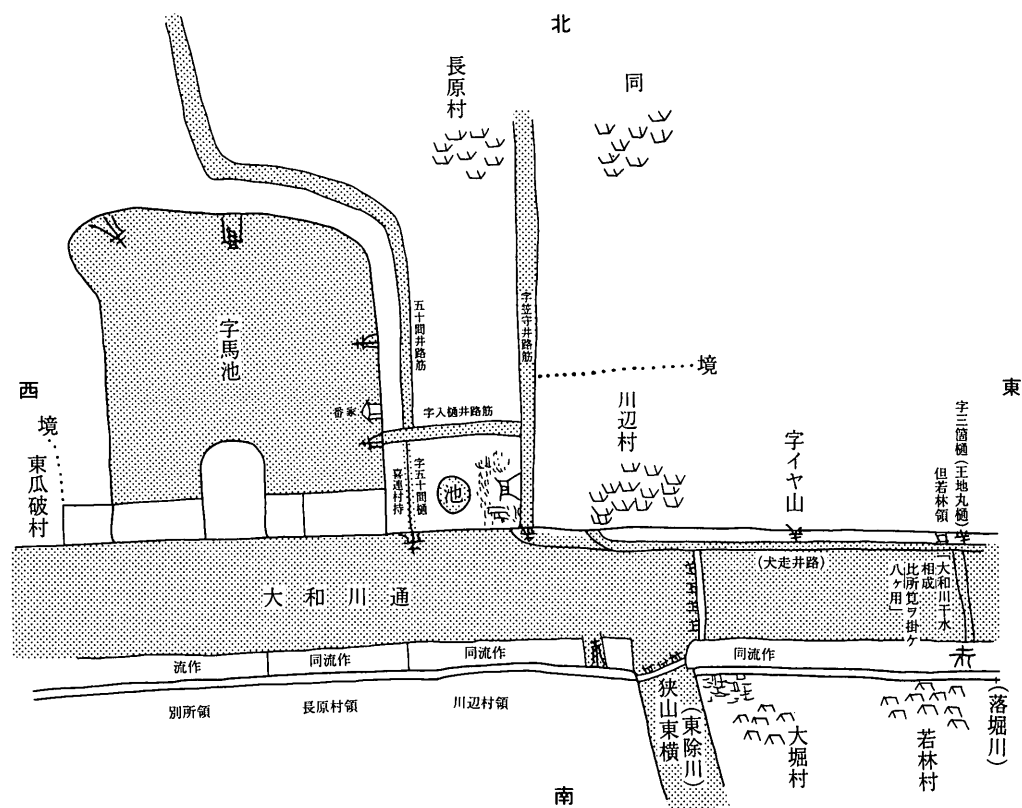


図51 王地丸樋・馬池間大和川堤樋絵図、城宏氏所蔵をトレース

笕というのは、『地方凡例録』[大石久敬1969]に、「掛渡井、笕とも云」とあり、「是は用水井路筋、川の上を横にして掛越にして用水を通す」、「柱を二本並べにもして、川幅次第第三、四箇処も柱を、下梁を柱毎に引き、桁木を引き、其上に笕を載る、道具建柱は川中に立て、梁木柱の上へ横に渡し」とあるもので、川中に柱を立て、枕木の上に樋管を載せ、川向こうから引水するための施設であった。

幕末ごろの樋絵図(図51)にも、大和川を挟み、若林村南岸と北岸の両樋間に「大和川渴水ニ相成候節、此所エ掛樋ヲ掛候テ、八箇ノ用水ヲ引申候」と、笕をかけて南岸から八箇用水として引水したことが注記されている(註10)。先に王水について述べたように、本来古市郡碓井村で石川から取水して、菅田八幡宮・道明寺村など石川の西側、志紀郡村々をへて若林村にいたる王水川(王水井路)で、大和川付替え後は大和川南岸沿いの落堀川に合流した。もともと、若林・川辺村がそこから取水していたところへ、大和川付替え後、新たな水源として八箇用水の元樋になったとみえる。

ただし笕は常時設置されていたのではなく渴水時だけであったが、樋組の名称はここからきていた。常日頃の用水は笕によるのではなく、図51にあるように、大和川堤の、王地丸樋(字三箇樋)と字いや山樋、笠守樋から直接大和川用水を取水、これを八箇井路によって北方に水を下し、あるいは馬池にうつして、長原村や東瓜破村田地へ、あるいは畑川筋を利用して東瓜破村、喜連村へ配水したものである。

iv) 大和川北岸諸樋

大和川開鑿時、北岸に新設した諸樋について、関係村から樋元若林村に宛てた文書が、宝永7(1710)年「一札」である(註11)。

一、川辺村領北堤字かさもり八ヶ村用水伏樋願上、従 御公儀様御伏被下候ニ付、三ヶ村井関へ加り申度義望申間鋪候得とも、新川掘申候故、八ヶ村立会樋江一所ニ頼申候、尤川上之悪水者川下之用水ニ成候儀者、川並何方も同前ニ御座候、然者三ヶ村用水之妨ニ成不申候間、井関一所ニ被成、普請・諸役・入用等八ヶ村同前ニ割符仕、井関下井路之諸役・入用銀者若林村江者少茂懸ケ間鋪候と、庄屋・年寄中江達而願申ニ付、御同心之上井関一所ニ罷成満足仕候、勿論洪水之節、堤危相見へ候時者、若林村領内・川辺村・長原村之通ニ相守可申候、為後日証文如件

(川辺・長原・出戸・竹渕・東喜連・中喜連・東瓜破村庄屋・年寄より若林村庄屋宛)
新規に字笠守樋八ヶ村立会用水伏樋が大和川北堤の川辺村内に設置されたこと、川辺・

若林・長原3ヶ村井関の王地丸樋に加入して、先の笠守樋と合わせ8ヶ村の水源とし、諸役8ヶ村同前に負担することが定められた。また、「八ヶ村」とは、ここで一札を差し入れた、川辺・長原・出戸・竹渕・東喜連・中喜連・東瓜破村に、樋元の若林村を加えたものである。

次の文書も同じく宝永7年のもので、笥をわたす若林村南岸字きせん樋から北岸王地丸樋(字竹河)の南北堤2箇所樋に長原村が加入することと、北堤の川辺村字いや山に樋を新設することを定めている(図51)。設置された北堤樋はいずれも公儀普請所であった。(註12)。

一札

一、若林村領南堤字きせん町ニ用水伏樋壺ヶ所、同村領北堤字竹河ニ用水伏樋壺ヶ所、右式ヶ所之用水樋者若林村・川辺村・長原村三ヶ村立会御願申上、従 御公儀様御伏替被下候事

一、新川ニ罷成候ニ付、右長原此方ニ交り申度由、若林村庄屋・年寄中へ願申候故、御同心ニ而三ヶ村立会樋罷成候、尤川上之悪水者川下之用水ニ成候義者、古来より川並何方茂同前之事ニ御座候ニ付、若林村御田地江入済、其次川辺村・長原村段々ニ取申候事
(中略)

一、川辺村いや山ニおゐて、川辺村・長原村両村立会用水樋願上、従 御公儀様御伏被下、大堀村領川之内ニ井関ヲ申候

図51にみえる若林村南北樋のほか、いや山にも樋を新設、これは対岸が東除川流末になり、大和川と落合い川水が多いところを、井関を立て川敷の北側に導水、東除川狭山用水にかわる水源としたのである。

v) 犬走り井路から八箇用水へ

同文書は、続いて、新しく川敷内北堤添いに犬走井路をもうけたことを述べる。

八ヶ村迄之用水ニ而候得者、流細ク届キ兼不申与存候所、殊八ヶ村内六ヶ村之義者、川内井関より下村々程遠ク候ゆへ、用水届キ申間敷候間、若林村領北堤犬走ニ井路口付候者、かさ水も弥多ク参り、川辺村・長原村之義者不及申、下六ヶ村迄快ク用水取可申候間、井路付させ給候

東除川跡が八箇用水になるのだが、王地丸樋やいや山樋から瓜破台地上まで直接導くのは無理だったために、大和川の河川敷内に新井路を掘立てることになった。これを犬走井

路といい、堤沿いに井路を掘るについて、新堤でまだ危ういとしぶる若林村を説得して付けたのである(図51)。この井路から笠守樋で北側に取水した。

vi)喜連3ヶ村の取水

この樋組について今に残るもっとも古い文書は、付替え工事完了直後の宝永元年11月に喜連3ヶ村から瓜破村に差し入れた一札で、大和川北堤に設置された五十間樋と八箇村立合樋からの取水についての記述がある(註13)。

一札

一、大和川筋北堤長原村領内字馬池之東表ニ喜連三ヶ村用水樋御願申上、被仰付、喜連三ヶ村用水入申候、東瓜破村領用水ハはた(畑)川筋川上したり水、川辺村領八ヶ村立合樋より御取被成候ニ付、右喜連村之樋ニハ御加り不被成、尤喜連三ヶ村茂川辺村領八ヶ村立合樋之用水取申候、右式ヶ所樋之用水はた川筋ニ而一所ニ落合、喜連三ヶ村取申候間、東瓜破村領右用水堰字鏡田すな原嶋之脇、三ヶ所戸建堰ヲ以、前々之通水御入可被成候、右用水入仕廻申候ハ、戸建堰ヲ取、喜連村三ヶ村へ水引下し可申事

一、右喜連村之樋よりはた川井路筋喜連三ヶ村へ水引申時分、岸崩等有之候ハ、喜連三ヶ村より普請為致可申事

右之通相究申上ハ少茂相違申間鋪候、為後日一札如此ニ御座候、以上

宝永元戊申年十一月

(西喜連村・中喜連村・東喜連村庄屋連印)

東瓜破村庄屋・年寄中

新大和川開鑿に及んで、新しい用水源として同川北堤の馬池東に喜連3ヶ村立合用水樋を設置、この五十間樋により大和川から取水することになった(図51)。この際、東瓜破村は畑川筋を通じて、「川辺村領八ヶ村立合樋」より取水するので、この樋には加わらないこと、また同用水が畑川筋で喜連3ヶ村の用水と一緒にになるので、この「八ヶ村立合樋」からの用水も、東瓜破村と同様受水していることを付け加えている。喜連村の用水と東瓜破村の用水とを分かつために東瓜破村領字鏡田砂原に戸建堰を設け、同村が取水したあと喜連3ヶ村へ用水を下すこと、3ヶ村が取水したために岸崩れなどあったばあい、普請の責任を負うことを長原村に対して約束した。

ここにみえる「八ヶ村立合樋」というのは、東除川流末の対岸、川辺村内大和川北堤に設置された笠守樋を指し、東除川からの用水にかわるものとして、宝永元年の大和川開鑿時に新設されたものとみられる。

vii) 長原村馬池から瓜破村下ノ池へ

この川辺村立会樋から取水した大和川用水を馬池に導き、さらに瓜破村下ノ池へ引水するについて、その利用を同村と長原村間で取決めたのが、次の宝永5(1708)年の文書である(註14)。

一札之事

一、川辺村領立会樋ニ瓜破村相加り、野代・成本表江ハ水入申候得共、瓜破村下之池江水込口無之候ニ付、長原村馬池之中ツ水通シ、右下之池江水込申様ニ此度願申候処、御同心被成被下辱存候事

一、馬池江水九分込り申候ハ、瓜破村下之池江水御下シ被下筈、尤下之池江水引候節者長原村・瓜破村庄屋年寄立会、分木ヲ立置、馬池之水減シ不申候様ニ可仕事

一、水込候儀、毎年冬春之中ニ込可申事

一、下之池江水引候内ハ、瓜破村ノ所々ニ番人ヲ付置、御田地ハ勿論、馬池堤并井路筋少茂損シ不申候様ニ可仕候、尤井路両脇へ随分水もり不申候様ニ可仕事

一、右下之池へ水七分目込り候者、馬池水十分ニ御込、其上少シ宛御下シ、下之池へ茂十分込候約束之事

一、下之池江水込候内茂長原村領御田地并野代・成本表へ茂何時茂御入可被成事

一、下之池ニ水十分込り候以上ニ而茂野山之樋ふさき置、やはり下之池へ請込除ヲ落シ、長原村領江悪水懸ケ申間鋪候、但野山井路筋に長原村ノせき上ケ申間敷候、尤野山之樋之上地形少茂取下ケ申間鋪候事

一、夏中ニ茂用水御田地江入仕廻、馬池江込り申候ハ、右之通ニ致シ、下之池へ茂御下シ被成候筈也

右之通互ニ違背仕間鋪候、若不念致シ井路筋損シ申候ハ、瓜破村ノ以前之ことく繕可申候、若御田地損亡仕候ハ、見分之上作主少茂損失無之様ニ瓜破村ノよなひ可申候、為後日証文仍件如

宝永五歳子七月十三日

(瓜破村庄屋・年寄から長原村庄屋・年寄宛)

川辺領立会樋に瓜破村が加入、瓜破村野代・成本に水を入れたいが、瓜破村下ノ池に水込口がないので「長原村馬池之中ツ水通シ、右下之池江水込申候」と長原村に申し入れ、利用にあたって長原村取水を優先するとして次のように約束した。

①下ノ池への引水は馬池に水9分入った後に下すこと、その際まず下ノ池は7分目にと

どめ、馬池に十分水込め終えて後に少しずつ十分目まで込めること。②引水時には長原・瓜破村の庄屋・年寄が立会、「分木ヲ立置、馬池之水減シ不申様ニ可仕事」。③水込めは毎年冬・春の内に限ること。④池引水中は瓜破村から番人を付け、長原村田地・馬池堤・井路筋とも「少茂損シ不申様ニ可仕候、尤井路両脇へ随分水もり不申候様ニ可仕事」に注意し、東瓜破村が修繕にあたること。⑤東瓜破村野代、成本へ水入れてよいこと。⑥下の池に水込め終えて後は長原村字野山の樋をふさぎ、「長原村領江悪水懸ケ申間敷候事」。⑦夏中について、用水が長原田地へ十分はいった後は瓜破村にも下されたいことを定めた。

ここにみえる「字野山」「字野代」は、「字野山」が馬池西隣の長原村田地、「字野代」がその西隣の東瓜破村田地、下ノ池はその西隣にあって、馬池西口樋から字野山・野代を通して下ノ池にいたる用水路を築いて引水、これが野代だけでなく東瓜破村南部の用水となった。北部については、笠守樋から八箇用水によって長原村を経て村内に、あるいは宝永元年の文書にみえる畑川を通じて八箇用水を引き入れたのである。

4) おわりに

写真6は天保14(1843)年の川辺村絵図で、新大和川が村内を横切るかたちで開鑿されて後の、川に分断された村のようすを示している。

居村部以南のかなりの田畑が新川床になり、濃色で表示される街道も川で途絶え、橋が掛けられた。居村部南の北堤には用水樋が設置(笠守樋)、北堤内側を東から来る井路と一所になって、そこから街道沿いに八箇用水が北の長原村にむかって流れる。八箇用水東側の旧東除川流路の大半は開発され川辺新田に、新川で村と分断された福富池は用水池としての存在意味を大きく減じ、西半分が開発され丑改新田となった。大和川付替え前の写真1と比較すると、新大和川と八箇用水で区切られる新しい景観とともに、東除川が大幅に縮小し、溜池も小さくなり、かわりに新田がうまれたようすがうかがえるのである。

宝暦10(1760)年の「川辺村明細帳」(註15)には、同村が「当村田畑旱損所ニ而御座候」と、同村が旱損場であること、「当村木綿作稲作隔年ニ仕付候」ことを記している。絵図に示す本田部でも隔年に木綿作が仕付けられていたと思われる。同じ瓜破丘陵上にあって大和川からも遠く、馬池と八箇用水に用水のほとんどを依存せざるを得ない長原村にとっては用水難はさらに深刻であったためか、同村の城家文書に次のような井戸掘り証文が多数残されている。

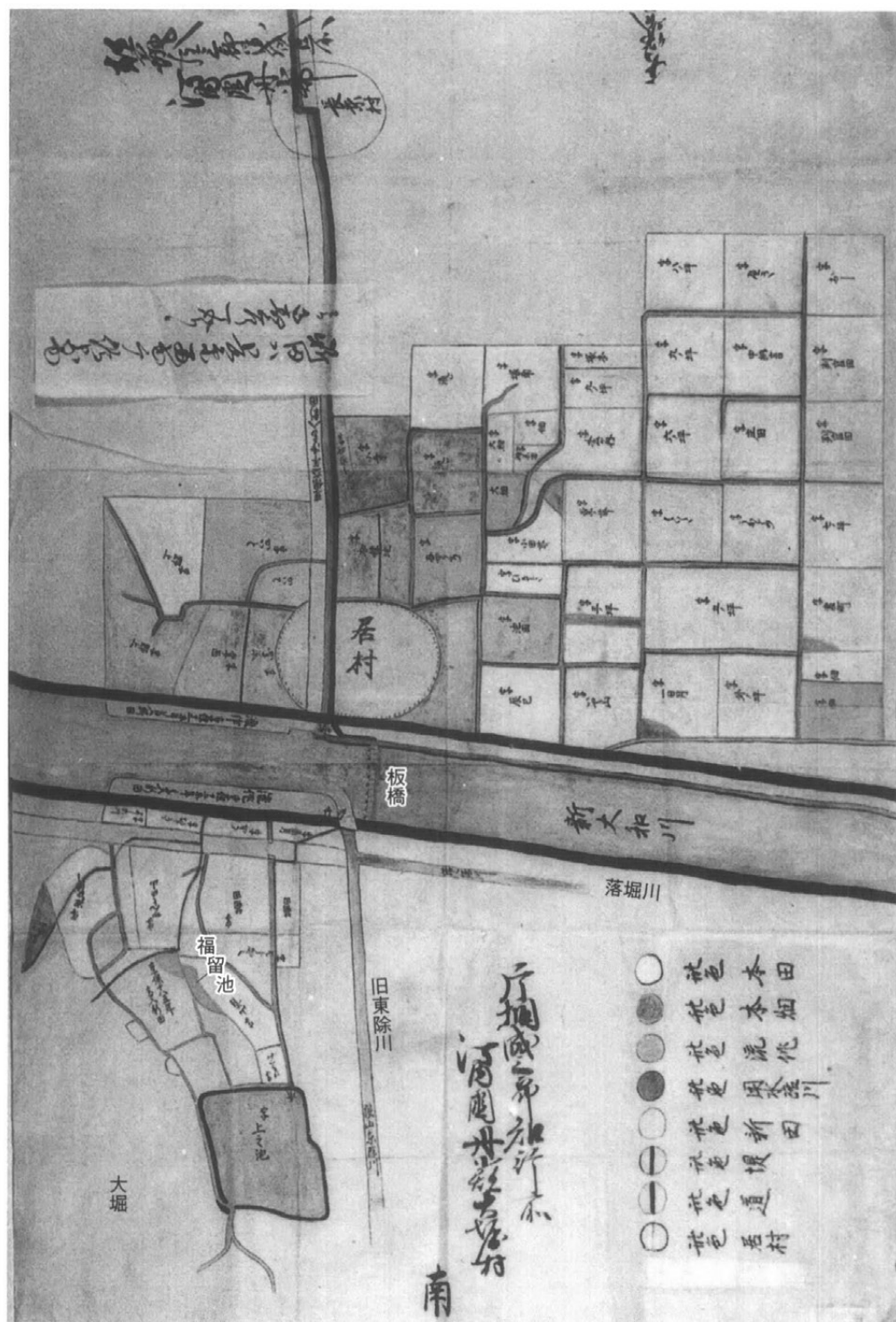


写真6 川辺村領内絵図 天保14(1843)年、辻岡千次氏所蔵

組合井戸証文之事

一字四分一上田壺反壺畝歩

権兵衛持地之内ニ今度六人して組合、新井戸掘置候、諸入用六人へ割合出シ申候、
自今以後組中廻リニ水明可申候、尤組中之内ニ水入用候間ハ外ヘかさぬはつニ御座候、
但シ入用銀貳拾八匁四厘権兵衛、貳拾二匁四分三厘徳兵衛、善兵衛拾四匁二分八厘、拾
貳匁六分貳厘庄兵衛、三拾三匁六分一厘長兵衛、右六人銀ノ百三拾三匁貳分、右之井戸
諸入用ニ払相済申候、壺人年二米貳升つつ、為後日証文仍而如件

寛延三年午ノ八月日

長原村組合井戸主

権兵衛 印 同 庄兵衛 印

同 徳兵衛 印 同 善兵衛 印

同 八兵衛 印 同 長兵衛 印

権兵衛所持の長原村内田地に同人含め6人で井戸を掘り、用水の補いとしたのである。
井戸掘り入用銀133匁余を分担し、さらに米を年2升ずつとあるのは、井戸地主の権兵衛
への支払いであろうか。

新大和川付替え後の用水事情はその後好転せず、川の水量減少もあいまって、八箇用水
上流部の村々では同用水掛かりから離脱する動きも見られた。安政4(1857)年、東出戸村
が組から離れ負担を拒否した争論もその一つである。残る村々だけでは「御大切御国役堤囲」
の御用が勤められないと樋組の村々から東出戸村に対し引止めにかかり、国役堤の負担だ
けは今後も分担することで和談が成立したものである(註16)。

八箇用水あるいは八ヶ村の樋組とはいえ、大和川付替え後の水利事情変転の結果、当初
の構成村も減少、ないしは変化せざるをえなかったのはもちろんのことであるが、これら
は今後の課題である。

[付記]

史料の閲覧および掲載につき、所蔵者の辻岡千次氏、城宏氏に御了解と協力をいただいた。
記して感謝いたします。

註)

(1)『大和川付替工事史』[畑中友次1955]。また、瓜破村は『大阪府全志』4[井上正雄1922]によれば、延宝
8(1680)年に東・西瓜破村に分村したという。

第Ⅲ章 遺構の検討

- (2) 池尻・田中家文書、[狭山池調査事務所1996]所収。
- (3) 大阪市堂島資料室旧蔵。
- (4) 「馬池用水につき長原村訴状」、城宏氏所蔵。
- (5) 妻屋宏氏所蔵、[松原市史編さん委員会1976]所収。
- (6) 城宏氏所蔵。
- (7) 長谷川正彦氏所蔵文書、[松原市史編さん委員会1978]所収。
- (8) 小泉豊氏文書、[藤井寺市史編さん委員会1990]所収。
- (9) 天保9年閏4月「一札」、辻岡千次氏所蔵。
- (10) 安政4年「八箇樋組一件諸書物写」のうち、城宏氏所蔵。
- (11) 前掲(10)。
- (12) 辻岡千次氏所蔵。
- (13) 「畑川用水一札」、大阪市堂島資料室旧蔵。
- (14) 城宏氏所蔵。
- (15) 辻岡千次氏所蔵。
- (16) 辻岡千次氏所蔵、安政4年2月「差入申一札之事」。

引用・参考文献

- 会津本郷陶磁器業史編纂委員会1969、『会津本郷焼のあゆみ』
井上正雄1922、『大阪府全志』4 清文堂
大石久敬1969、大石慎三郎校訂『地方凡例録』下、近藤出版社
大阪狭山市教育委員会1994、「近世初期の尺八樋(一部)を発掘」：『いけだより』vol.3、pp.2-3
大阪市文化財協会1983、『大阪市住宅供給公社住宅建設に伴う長原遺跡発掘調査(NG83-38)略報』
1989、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅰ
1990、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅱ
1992a、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅲ
1992b、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅳ
1994、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅶ
1996、『長原遺跡発掘調査報告』Ⅵ
1997a、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅸ
1997b、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅺ
1999a、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅻ
1999b、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』ⅩⅢ
1999c、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』ⅩⅣ
2000a、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』ⅩⅤ
2000b、『瓜破・瓜破北遺跡発掘調査報告』
2001a、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』ⅩⅥ
2001b、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』ⅩⅦ
2002、『瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅱ
2003、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』ⅩⅨ
大阪府文化財調査研究センター2002、『津田城遺跡—一般国道1号バイパス(大阪北道路)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』(調査報告書 第71集)
大阪府立狭山池博物館2001、『大阪府立狭山池博物館 図録1 常設展示案内』
大橋康二1994、『古伊万里の文様』理工学社
川西宏幸1978、「円筒埴輪総論」：『考古学雑誌』第64巻第2号 日本考古学会、pp.95-164
九州近世陶磁学会2000、『九州陶磁の編年』
京嶋覚1992、「古墳時代後半期における土師器の器種構成」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅲ、pp.187-200
黒田慶一2001、「大地の記憶—馬池の成立ち—」：大阪市文化財協会編『草火』95号、pp.6-7
古代の土器研究会1992、『古代の土器1 都城の土器集成』
狭山池調査事務所1995、『狭山池遺跡東樋遺構現地説明会資料』
1996、狭山池調査事務所編『狭山池 史料編』

「ゾウの足跡調査法」編集委員会1994、『ゾウの足跡化石調査法』地学ハンドブックシリーズ9 地学団体研究会

高橋工2000、「飛鳥時代の集落について」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』XV、pp.145－149

田辺昭三1981、『須恵器大成』角川書店

中世土器研究会1995、『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

趙哲済1995、「本書で用いる層位学的・堆積学的視点からの用語」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅷ、pp.41－44

2001、「長原遺跡の地層」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』XVI、pp.7－28

畑中友次1955、『大和川付替工事史』大和川付替二百五十年記念顕彰事業委員会

原秀禎1977、「河内古市大溝の検討」：古代を考える会編『河内古市大溝の検討』（古代を考える11）、pp.1－9

福島雅蔵1960、「近世河内狭山池の分水慣行」：大阪歴史学会編『封建時代の村と町』、pp.395－437

藤井寺市史編さん委員会1983、『藤井寺市史』第6巻上 史料編 藤井寺市

1986、『藤井寺市史』第3巻 史料編 藤井寺市

1988、『藤井寺市史』第6巻中 史料編 藤井寺市

1990、『藤井寺市史』第6巻下 史料編 藤井寺市

1998、『藤井寺市史』第2巻 通史編 藤井寺市

松原市史編さん委員会1976、『松原市史』第5巻 松原市役所

1978、『松原市史』第3巻 松原市役所

若林幸子2002、「土管内面の製作・調整痕跡について」：大阪府文化財調査研究センター編『津田城遺跡――般国道1号バイパス(大阪北道路)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―』、pp.77－82

あ　と　が　き

21世紀の到来と共に、20年にわたった長吉瓜破地区土地区画整理事業に伴う発掘調査も終焉を迎えた。この間に得られた資料は莫大な量である。また調査前には田畑が広がっていた景観も、すっかり住宅地になっている。

発掘調査成果も調査次数の数に比例して蓄積され、内容的にもこの地区の“通史”を書けるほど充実していった。日本全国を見渡しても2万年前から現代に至る通史を書ける地域はどれくらいあるだろうか。これは地域住民にとっても財産であると思う。

今回報告書は、とうとう最終冊を迎えたわけだが、より多くの一般の人に受入れてもらえるような、“長吉・瓜破史”を編むための作業はこれからも続けていきたい。

末筆ではあるが、本書を成すに当って関係各位には並々ならぬ協力を賜った。改めて謝意を表すとともに、今後とも当協会の事業への変わらぬご理解とご支援をお願い申し上げる次第である。

(高橋 工)

索引

索引は遺構・遺物に関する用語と、地名・遺跡名などの固有名詞とを一括して収録した。

M	MT15	43	し	志紀長吉神社	66
	MT85	54	す	スクレイパー	10
O	ON46	11, 26, 41, 43, 48	せ	青花	20～22, 54
T	TK10	26, 41, 43		青磁	16, 22, 24
	TK23	16, 23, 41		石鏃	10, 26
	TK43	16, 21, 41		瀬戸美濃	21
	TK47	22, 41, 43	と	土管	48, 50, 53, 55
	TK73	23, 26	の	軒平瓦	35
	TK208	11, 20, 21, 26, 41, 43		軒丸瓦	27, 31, 32
	TK209	11, 13, 43	は	八箇用水	61, 71, 73, 74, 77, 79
	TK216	16, 20, 23, 26, 43	ひ	東除川	59, 61, 64～66, 68～72, 74, 75, 77
	TK217	13, 54		肥前磁器	7, 12, 18, 20, 22, 23, 48, 54
あ	赤絵	9		肥前陶器	20
	足跡化石	4, 53～55		平瓦	28～32, 35, 45
	吾彦火山灰層	16, 54	へ	平城宮Ⅱ	23
	暗文	12, 18		平城宮Ⅲ	43
う	馬池谷	11, 12, 58		平城宮Ⅵ	11, 18
え	円筒埴輪	11	ほ	掘立柱建物	3, 12
か	唐津焼	12, 20, 21, 23, 48	ま	丸瓦	27, 28, 31, 32, 35
	川辺	59, 61, 64, 68～78	や	大和川	50, 57, 59, 61, 62, 64, 66, 70～77, 79
	関西系陶器	20, 54		弥生土器	23
き	北花田火山灰層	16			
	畿内第Ⅲ様式	23			
く	クサビ	10, 24			
さ	堺焼	12			
	狭山池	58, 59, 63～65, 69, 70, 80			

Archaeological Reports
of
Nagahara and Uriwari Sites in Osaka, Japan

Volume XX

A Report of Excavations
Prior to the Development of
the Nagayoshi-Uriwari Area in fiscal 2000

March 2003

Osaka City Cultural Properties Association

Notes

The following symbols are used to represent archaeological features and others in this text.

NR : Natural stream

SB : Building

SD : Ditch

SE : Well

SF : Blockade

SK : Pit

SP : Posthole or pit

SX : Other features

CONTENTS

Preface

Explanatory notes

Chapter I Outline and progress of research	1
S.1 Outline of excavations in fiscal 2000	1
1) Excavations	1
2) About the publication of the report	1
S.2 Outline and progress of excavations	3
1) Research area NG00-12	3
2) Research area NG00-29	4
Chapter II Results of research of the South-western sector of the Nagahara Site	7
S.1 Research area NG00-12	7
1) Stratigraphy and remains of the strata	7
i) Stratigraphy ii) Remains of the strata	11
2) Features and remains	11
i) The Asuka period ii) From the Edo to the Modern period	12
3) Conclusion	12
S.2 Research area NG00-29	14
1) Stratigraphy and remains of the strata	14
i) Stratigraphy ii) Remains of the strata	35
2) Features and remains	35
i) The Kamakura period ii) The Muromachi period	55
iii) From the Edo to the Modern period iv) The Middle Palaeolithic	55
3) Conclusion	55
Chapter III Discussion of features	57
S.1 Umaike reservoir and irrigation in the Medieval period	57
1) The re-emergence of irrigation in the Medieval period	57
2) The discontinuity of irrigation	59
S.2 Umaike reservoir and the irrigation channels of Hachiga — Irrigation in the northern site of Shin-Yamato River in the Edo period —	61
1) Introduction	61
2) Before the construction of Shin-Yamato River	64
i) Irrigation water from Sayamaike reservoir	

ii) Relations between Higashi-Uriwari village and the irrigation water of Sayamaike reservoir	
iii) Utilization of Umaike reservoir	
iv) Relations between Higashiyoke River and the reservoir of each villlage	
v) Relations between the village of Kawanabe and the irrigation channels of Osui	
3) Changes after the construction of Shin-Yamato River	70
i) Plateau of Uriwari and Shin-Yamato River	
ii) Construction of Otoshihori River	
iii) Kakehi-Gumi and the irrigation channels of Hachiga	
iv) Irrigation channels of Ochimaruhi, Iyayamahi and Kasamorihi	
v) Irrigation channels of Inubashirihiro to the irrigation channels of Hachiga	
vi) Umaike reservoir in Nagahara village to Shimonoiike reservoir in Uriwari village	
4) Conclusion	77
Bibliography	81
Postscript	
Index	
English Contents and Summary	
Reference Card	

ENGLISH SUMMARY

Introduction

The Nagahara site is located in southeastern Osaka city and contains archaeological materials dating from the Palaeolithic to the Edo Period. This report covers the excavations undertaken in two areas around the Nagahara site (with a total area of 1,150 m²) following the rezoning of land in the Nagayoshi and Uriwari districts in fiscal 2000. The investigated areas consist of two southwestern areas (NG00-12 and NG00-29). Below is an outline of the notable materials recovered and phenomena observed during these excavations arranged chronologically by archaeological period.

1) The Middle Palaeolithic

From strata dating to 70,000 bp, the fossilized footprints of several species of megafauna, including the Naoman elephant and the Bighorn deer, were excavated near an old natural stream. However, there is no evidence of human occupation at this site.

2) The Asuka period

There are remains of a settlement from the early Asuka period in NG97-18 & 49 situated in the north of NG00-12. One post-hole was discovered in the northern end of NG00-12, and in NG00-29, which is located on the southern side of NG00-12, no such remains were found. Therefore, the post-hole is thought to be a part of a structure located in the southern end of the settlement.

3) The Muromachi period

The tap from the reservoir and the irrigation channel itself were discovered from the Medieval layer. The irrigation channel was more than 2.5m in depth, and the width of the tap was narrower than the channel giving it a bottle-shaped image from above. When the irrigation channel was abandoned the tap was blocked, the channel was filled up with ground, and the area was turned into a paddy field.

4) The Edo period

There were four layers of agricultural fields near the northern embankment of Umaiike reservoir.

Further reading

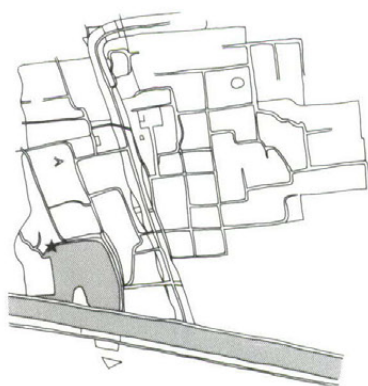
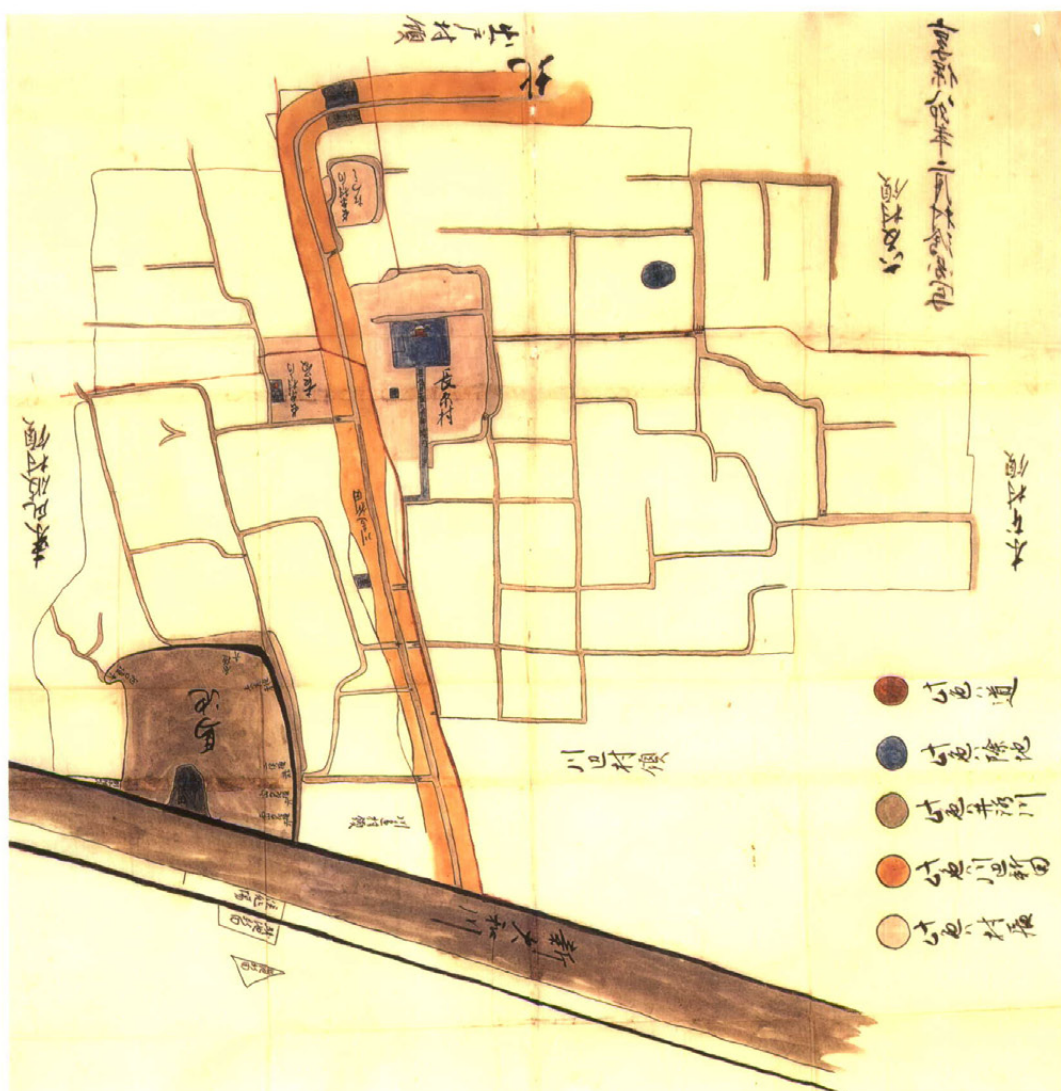
Osaka City Cultural Properties Association

1989-2000 *Archaeological Reports of the Nagahara Uriwari sites* Vols.I-XIX, Osaka (In Japanese, with English summary except for Vols.I-III)

報 告 書 抄 録

ふりがな	ながはら・うりわりいせきはつくつちょうさほうこく20								
書名	長原・瓜破遺跡発掘調査報告 XX								
副書名	2000年度大阪市長吉瓜破地区土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書								
巻次									
シリーズ名									
シリーズ番号									
編著者名	黒田慶一・石原佳子・高橋工								
編集機関	財団法人 大阪市文化財協会								
所在地	〒540-0006 大阪府大阪市中央区法円坂1-1-35 TEL.06-6943-6833								
発行年月日	西暦 2003年 3 月31日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	調査期間		調査面積 (㎡)	調査原因
ながはらいせき 長原遺跡	おおさかし ひらのく 大阪市平野区 ながよしながはらにし 長吉長原西3丁目	27126	—	34° 36′ 00″	135° 34′ 40″	12次 20000601～20000711 29次 20000913～20010302	150 1,000	土地区画整理事業 (長吉瓜破地区)施 行に伴う調査	
所収遺跡名	種別	主 な 時 代		主 な 遺 構		主 な 遺 物			
長原遺跡	溝	旧石器時代				石器遺物			
	田畑	弥生時代				弥生土器・石器遺物			
	その他	古墳時代				須恵器			
		飛鳥時代		柱穴		土師器・須恵器			
		平安～鎌倉時代		足跡		瓦器・須恵器・輸入磁器			
		室町時代		溝・閉塞用盛土・水田		瓦質土器・瓦			
	江戸時代		畑		陶磁器・瓦・土人形・瓦質土管				

原色図版



長原村絵図「享保8（1723）年」（城宏氏所蔵、付図の★印は今回調査地）

図 版



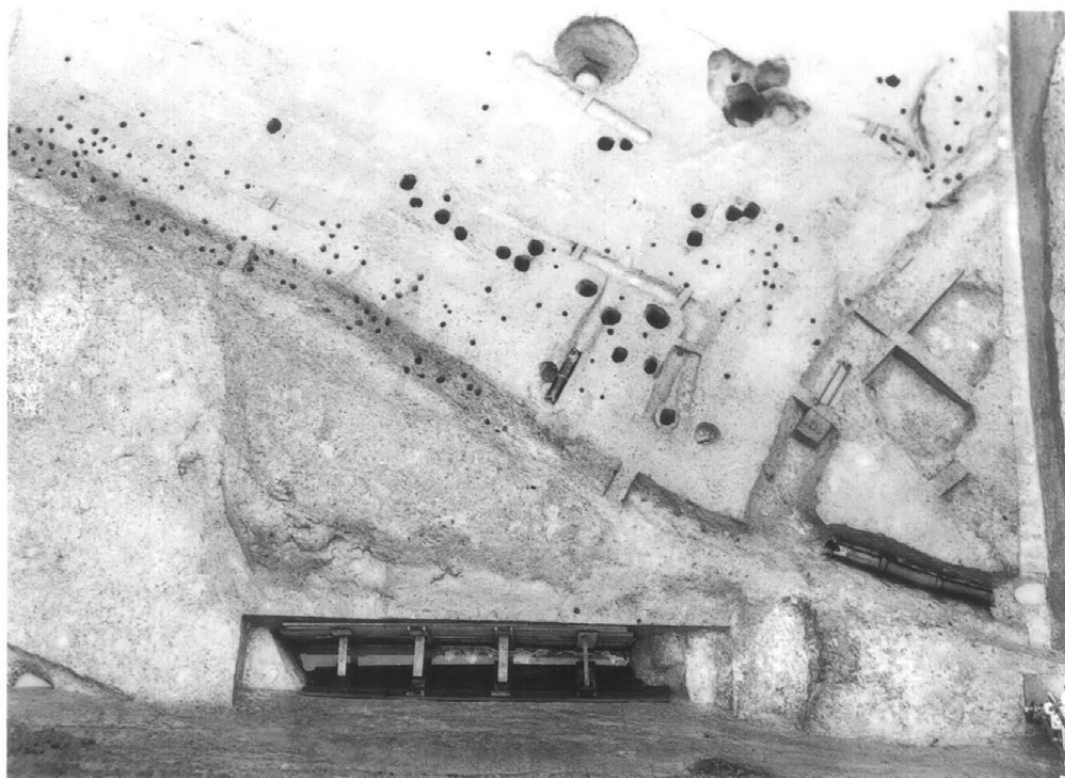
調査区全景(南から)



SP501検出状況(南から)





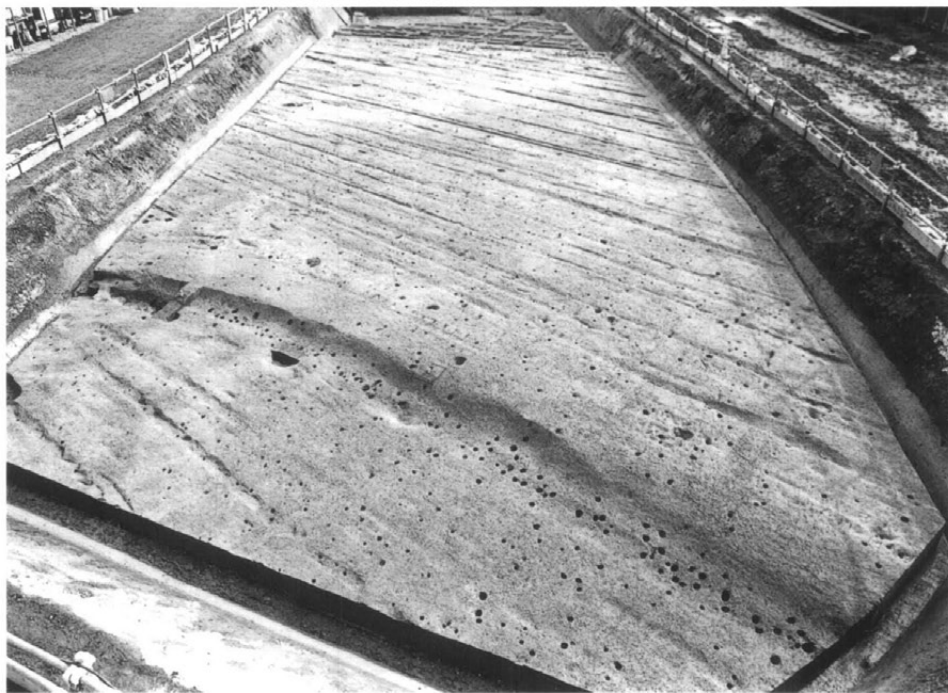


南端(南東から)



SD201(西から)

南区第2c層上面(南東から)



北区第2a層下面(北から)



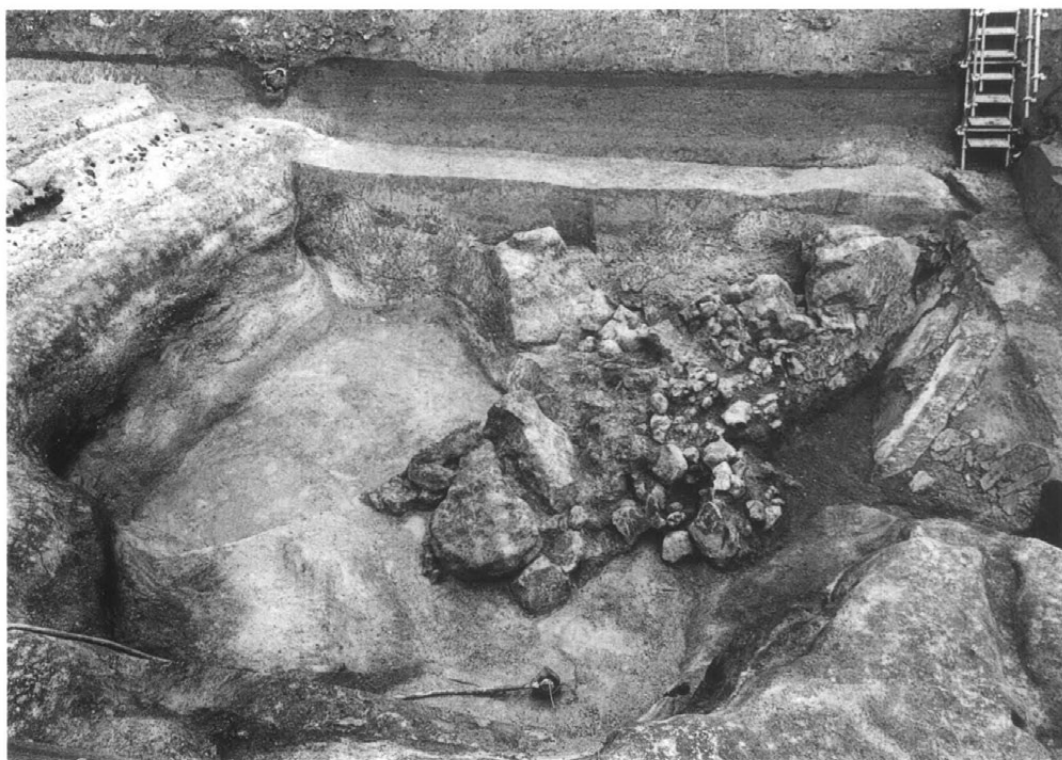
SD301(南から)



SD301(北から)



SD301堆積状況(南から)



SD301アゼ撤去後(南から)



第3a層下面(東から)

第3a層下面(北から)

第4d層上面(北から)



第4d層上面(東から)



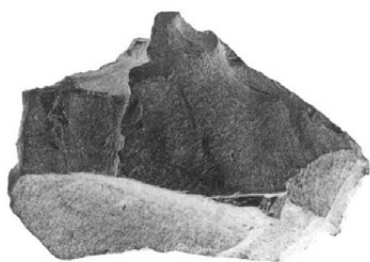
自然流路と足跡化石(西から)



ナウマンゾウの足跡化石(東から)



19



20



21



4



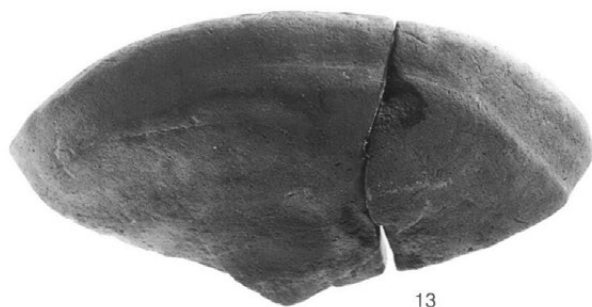
22



5



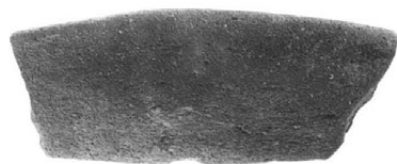
18



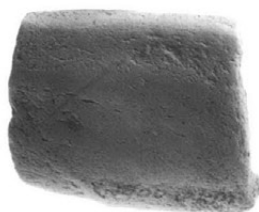
13



17



14

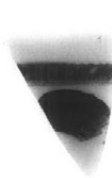


7

第2～4層(4・5・7・14・18)、第4層(13)、地山上面(17)、SP201(22)



6



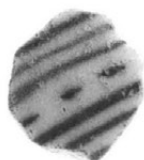
10



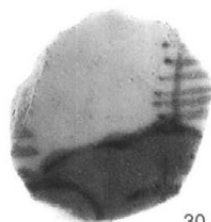
25



15



3



30



2



1



141



140



139



124



56



185



136



186



181



184



131



187



134

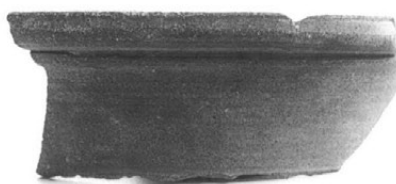
第2c層(56)、第3c層(181・184・186)、第3d層(185・187)、第4b層(131)、第4c層(134・136)



138



192



190



191



119



224



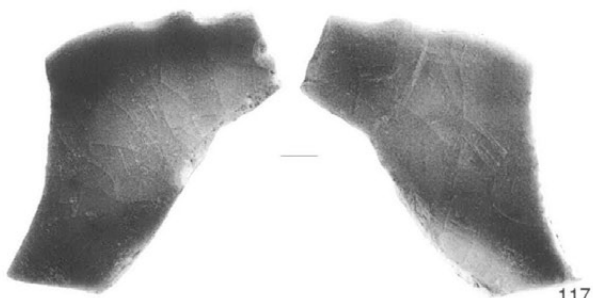
189



59



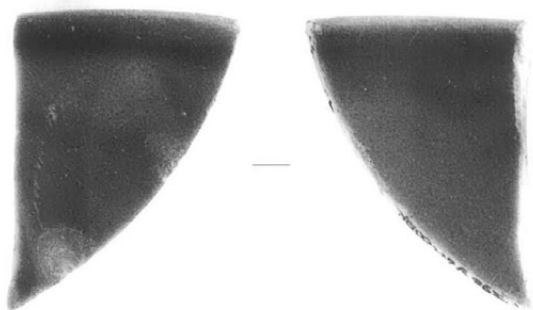
210



117



201



118



203



121



120



215

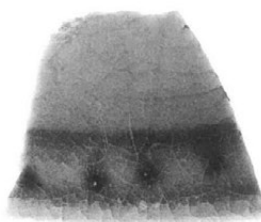
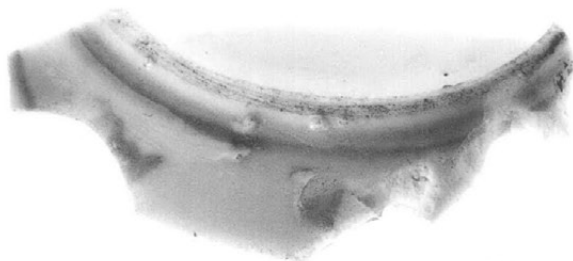
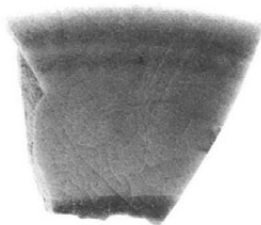
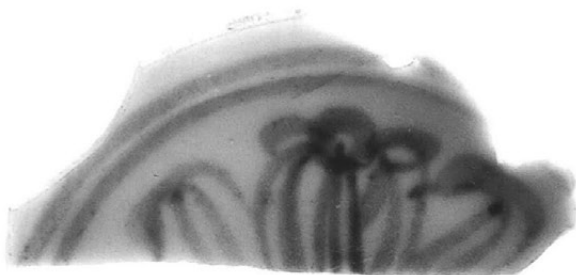


196



212

第3a層(121)、第3b層(117・118・120)、第3c層(203・210・212・215)、第3d層(196・201)

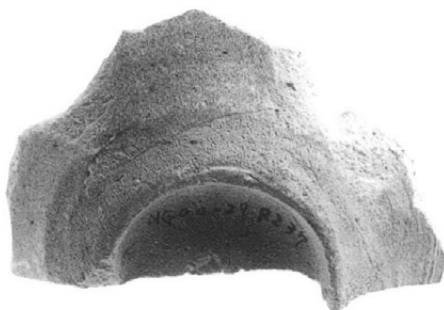
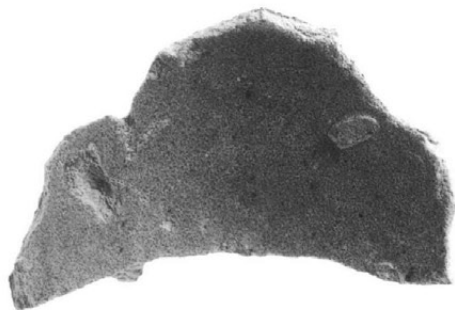


111

72

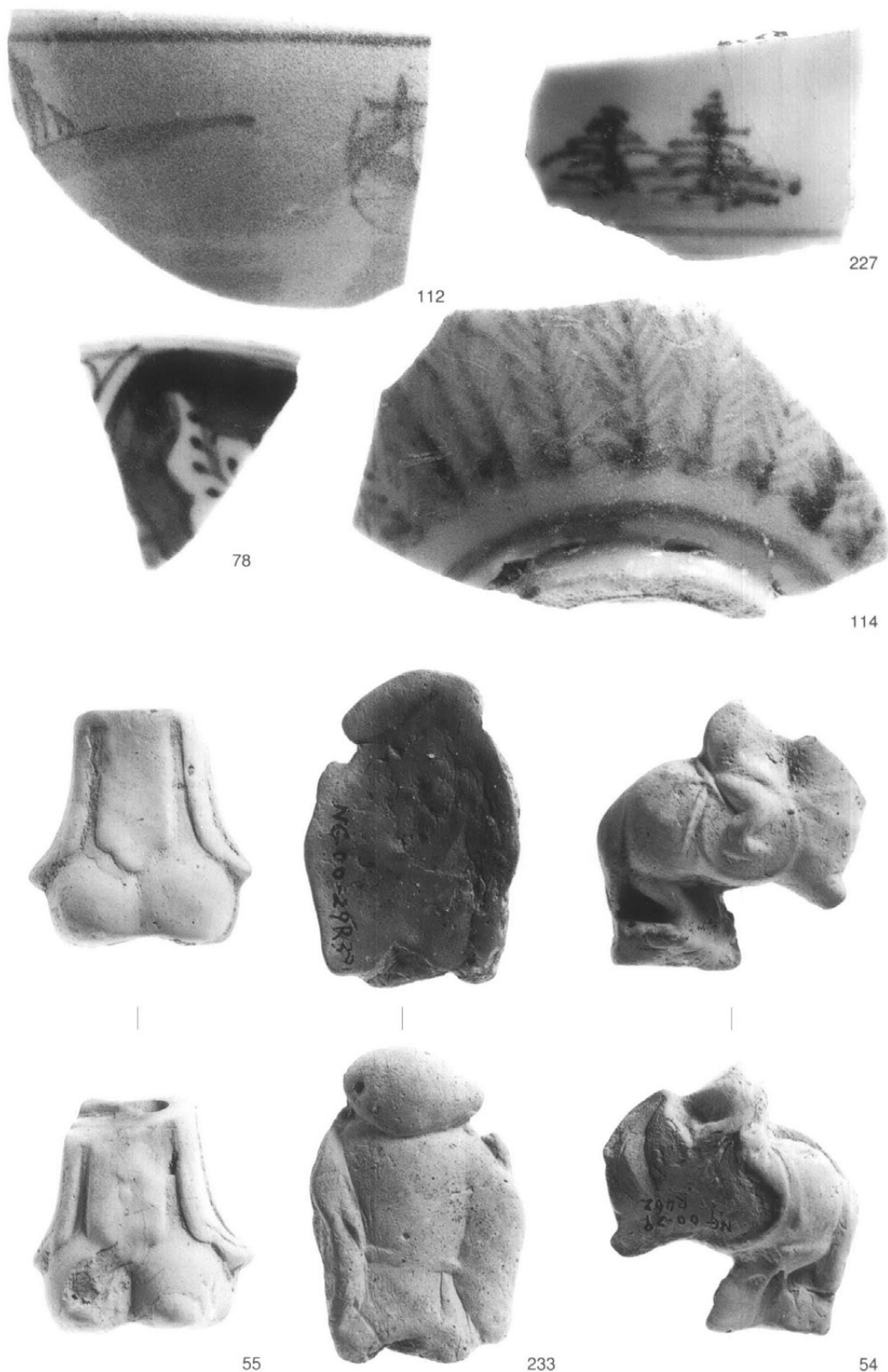


76



225

第2c層(72)、第2d層(76)、第2e層(111)、SD201(225)



第2a層(54・55)、第2c層(78)、第2e層(112・114)、SD106(233)、SD201(227)



142



143



144



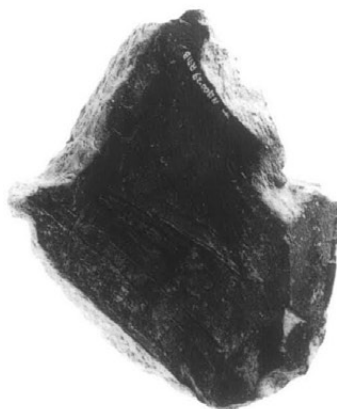
145



53

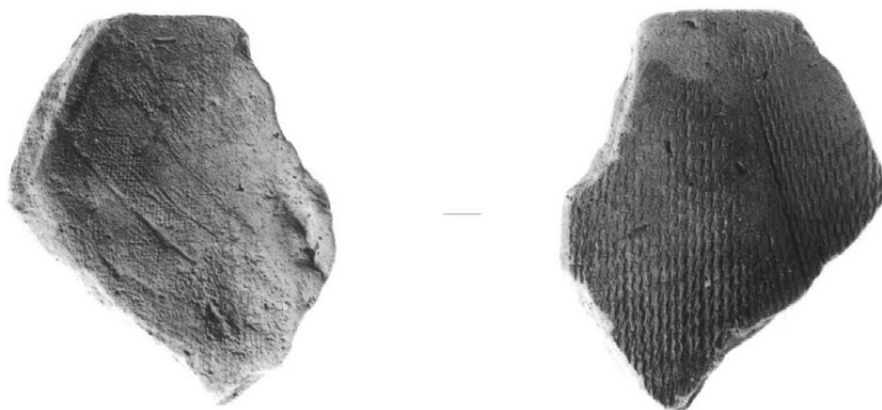
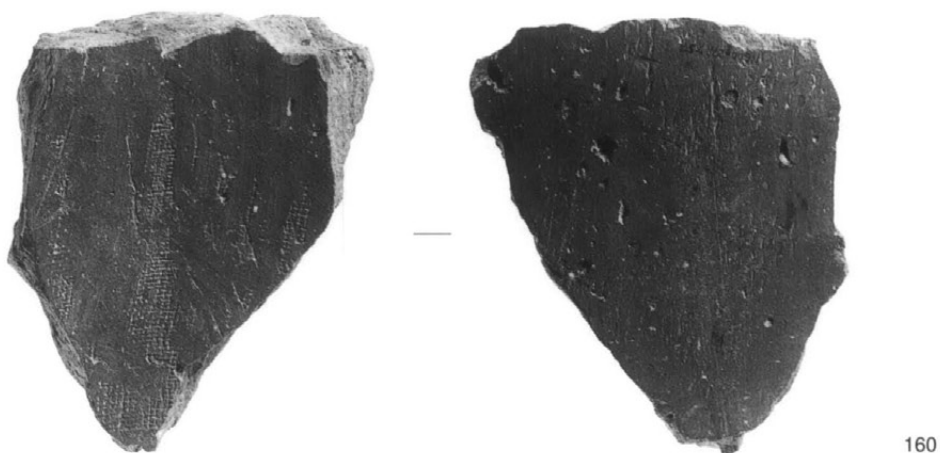


155



154

第2a層(53・144)、第2d層(143・145)、第3c層(155)、第3d層(142・154)



第2d層(147)、第3c層(162・172)、第4c層(146・160)



237



238



239

大阪市平野区 長原・瓜破遺跡発掘調査報告 XX

ISBN4-900687-69-3

2003年3月31日 発行 ©

編集・発行 財団法人 大阪市文化財協会

〒540-0006 大阪市中央区法円坂1-1-35

(TEL 06-6943-6833 FAX 06-6920-2272)

印刷・製本 株式会社 中島弘文堂印刷所

〒537-0002 大阪市東成区深江南2-6-8

Archaeological Reports
of
Nagahara and Uriwari Sites in Osaka, Japan

Volume XX

A Report of Excavations
Prior to the Development of
the Nagayoshi-Uriwari Area in fiscal 2000

March 2003

Osaka City Cultural Properties Association

**Archaeological Reports
of
Nagahara and Uriwari Sites in Osaka, Japan**

Volume XX

A Report of Excavations
Prior to the Development of
the Nagayoshi-Uriwari Area in fiscal 2000

March 2003

Osaka City Cultural Properties Association